秋田県文化財調査報告書第300集

姫ケ岱D遺跡

― 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ ―

2000・3

秋田県教育委員会

姫ケ岱（ひめがたい）D遺跡

— 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

2000・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化遺産があります。地中に眠る埋蔵文化財もその遺産の一つです。私たちには、これらの文化遺産を保護し、未来に継承していく責務があります。

このたびの森吉町における洪水調節と利水事業を目的とした森吉山ダムの建設にあたり、秋田県教育委員会は、建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所の依頼により、この計画区域内の遺跡分布調査や範囲確認調査を実施し、60 箇所の遺跡を確認しました。姫ケ岱Ｄ遺跡はこの中の一つであり、工事に先立って平成９年度に発掘調査を実施し、記録保存を図ることにしました。

調査の結果、縄文時代早期の土器と縄文時代中期から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑が検出され、縄文時代の集落が営まれていたことが分かりました。

本報告書は、この調査記録をまとめたものであります。本書が、森吉地区の地域史解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書の刊行にあたり、御援助、御協力いただきました建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会をはじめ関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 12 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　　清

例　言

1．本報告書は平成9年度に行われた姫ヶ岱D遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2．本報告書は森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては第4冊目にあたる。

3．調査結果については、秋田県埋蔵文化財調査報告会資料（平成10年3月）等でも公表してきたが、本報告書の内容がそれらに優先する。

4．本報告書の執筆は、吉川孝と村上義直と三嶋隆儀が分担し、編集は三嶋が行った。

5．本報告書の作成にあたり、以下の方々から御指導・御助言をいただいた。記して謝意を表する。（敬称略・五十音順）

稲野裕介［北上市立埋蔵文化財センター］、川村正［七ヶ浜町歴史資料館］、鈴鹿良一・能登谷宣康・本間宏［(財) 福島県文化センター］

6．「自然科学的分析」の「放射性炭素年代測定結果報告書」は、株式会社古環境研究所に委託したものである。

7．本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行50,000分の1「米内沢」「大葛」、同じく25,000分の1「阿仁前田」「太平湖」、及び建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所作成1,000分の1「森吉山ダム貯水池平面図」である。

8．本報告書における土層注記中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」（1997年版）によった。

凡　例

1．本報告書に収録した遺構実測図の方位は、真北を示す。原点（MA50）における真北と磁北との偏角は、西に8°10’である。

2．本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を原則とし、適宜1/20も用いた。遺物実測図の縮尺は、1/2を原則とし、適宜異なる縮尺を用いた。挿図にはそれぞれスケールを付した。

3．挿図の遺物実測図には、器種を問わず遺構内・遺構外に分けて通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。

4．土層注記は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構堆積土にはアラビア数字（1・2・3・・・）を用いた。

5．遺構番号は、その種別を問わず、プラン検出順に01から始まる2桁の連番を付したが、精査の過程において遺構でないと判断したものは欠番となっている。

6．遺構・遺物の種類を表す際、下記の略号を用いる。

＜遺構＞	ＳＩ……竪穴住居跡	ＳＫ……土坑	ＳＱ……配石遺構
	ＳＲ……土器埋設遺構	ＳＮ……焼土遺構	ＳＸ……性格不明遺構
	ＳＫＰ……柱穴様ピット		
＜遺物＞	ＲＰ……土器（片）	ＲＱ……石器及び剥片	Ｓ……礫

目　次

序
例言・凡例……iii
目次……iv
挿図・表・図版目次……v
第1章　はじめに……1
　第1節　発掘調査にいたるまで……1
　第2節　調査の組織と構成……4
第2章　遺跡の立地と環境……5
　第1節　遺跡の位置と立地……5
　第2節　遺跡の歴史的環境……6
第3章　発掘調査の概要……11
　第1節　遺跡の概観……11
　第2節　調査の方法……11
　第3節　調査経過……13
第4章　調査の記録……16
　第1節　基本層位……16
　第2節　検出遺構と出土遺物……16
　　1　概要……16
　　2　遺構と出土遺物……16
　第3節　遺構外の出土遺物……47
　　1　土器……47
　　2　土製品……58
　　3　石器……58
第5章　自然科学的分析……64
　第1節　炭化材の樹種同定……64
　第2節　放射性炭素年代測定……65
第6章　まとめ……67
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群…… 3
第２図　周辺の遺跡分布図…… 8
第３図　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡……12
第４図　グリッド設定図……14
第５図　基本土層図……17
第６図　遺構配置図……19
第７図　ＳＩ04・46 竪穴住居跡 ……22
第８図　ＳＩ04 竪穴住居跡出土遺物 ……23
第９図　ＳＩ05・43 竪穴住居跡 ……25
第10図　ＳＩ46・05 竪穴住居跡出土遺物 ……26
第11図　ＳＩ05・43 竪穴住居跡出土遺物 ……27
第12図　ＳＩ41 竪穴住居跡 ……29
第13図　ＳＩ41 竪穴住居跡出土遺物 ……30
第14図　ＳＩ40・45・09 竪穴住居跡 ……32
第15図　ＳＩ40 竪穴住居跡出土遺物 ……33
第16図　ＳＩ40・09 竪穴住居跡出土遺物 ……34
第17図　ＳＫ17・35・38・39・42・44 土坑 ……36
第18図　ＳＫ38・39 土坑、ＳＱ10 配石遺構、ＳＲ22 土器埋設遺構
　　ＳＸ02 性格不明遺構出土遺物 ……38
第19図　ＳＱ10 配石遺構、ＳＲ22 土器埋設遺構、ＳＮ12・14 焼土遺構 ……39
第20図　ＳＲ22 土器埋設遺構出土遺物 ……41
第21図　ＳＸ02・03 性格不明遺構 ……42
第22図　ＳＸ03 性格不明遺構出土遺物 ……43
第23図　柱穴様ピット（1） ……45
第24図　柱穴様ピット（2） ……46
第25図　遺構外出土土器（1） ……49
第26図　遺構外出土土器（2） ……50
第27図　遺構外出土土器（3） ……51
第28図　遺構外出土土器（4） ……52
第29図　遺構外出土土器（5） ……53
第30図　遺構外出土土器（6） ……54
第31図　遺構外出土土器（7） ……55
第32図　遺構外出土土器（8） ……56
第33図　遺構外出土土製品 ……57
第34図　遺構外出土石器（1） ……60
第35図　遺構外出土石器（2） ……61
第36図　遺構外出土石器（3） ……62
第37図　遺構外出土石器（4） ……63

表　目　次

第１表　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群…… 3
第２表　秋田県遺跡地図（県北版）による遺跡一覧（1） …… 9
第３表　秋田県遺跡地図（県北版）による遺跡一覧（2） ……10
第４表　遺構内出土石器計測表……38
第５表　柱穴様ピット計測表……44
第６表　遺構外出土石器計測表……63

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
竪穴住居跡群完掘状況
図版２　ＳＩ04 竪穴住居跡完掘状況
ＳＩ46 竪穴住居跡炉確認状況
ＳＩ05 竪穴住居跡確認状況
図版３　ＳＩ05 竪穴住居跡完掘状況
ＳＩ05 竪穴住居跡炉断面
ＳＩ43 竪穴住居跡炉断面
図版４　ＳＩ41 竪穴住居跡遺物出土状況
ＳＩ41 竪穴住居跡完掘状況
ＳＩ40 竪穴住居跡完掘状況
図版５　ＳＩ45 竪穴住居跡炉完掘状況
ＳＩ09 竪穴住居跡確認状況
ＳＫ17 土坑完掘状況
図版６　ＳＫ35 土坑断面
ＳＫ38 土坑完掘状況
ＳＫ39 土坑完掘状況
図版７　ＳＫ42 土坑完掘状況
ＳＱ10 配石遺構断面
ＳＲ22 土器埋設遺構断面
図版８　ＳＮ12 焼土遺構確認状況
ＳＮ14 焼土遺構確認状況
ＳＸ02 性格不明遺構断面
図版９　ＳＸ03 性格不明遺構確認状況
ＳＫＰ07 柱穴様ピット断面
調査後の状況
図版10　ＳＩ04 竪穴住居跡出土土器
図版11　ＳＩ46 竪穴住居跡出土土器
ＳＩ05 竪穴住居跡出土土器
図版12　ＳＩ41 竪穴住居跡出土土器
ＳＩ40 竪穴住居跡出土土器（1）
図版13　ＳＩ40 竪穴住居跡出土土器（2）
ＳＩ09 竪穴住居跡・ＳＱ10 配石遺構・ＳＸ02 性格不明遺構出土土器
図版14　ＳＲ22 土器埋設遺構・ＳＸ03 性格不明遺構出土土器
遺構内出土石器
図版15　遺構外出土土器（1）
図版16　遺構外出土土器（2）
図版17　遺構外出土土器（3）
図版18　遺構外出土土器（4）
図版19　遺構外出土土器（5）
図版20　遺構外出土土器（6）
遺構外出土土製品
図版21　遺構外出土石器（1）
図版22　遺構外出土石器（2）
図版23　遺構外出土石器（3）
炭化材断面顕微鏡写真

第1章　はじめに

第1節　発掘調査にいたるまで

1972（昭和47）年7月3日、北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本列島を縦断し全国各地に被害をもたらしながら13日まで続いた。秋田県でも被害が甚大で、本県に天災融資法と激甚災害法が適用されるとともに、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町には災害救助法が適用された。この中で特に被害が大きかったのが米代川下流域に位置する能代市と二ツ井町であった。

翌1973（昭和48）年3月、建設省は「米代川工事実施基本計画」の基本流量の見直しを行った。その結果、流量を上流ダム群によって調節することとなり、その一つとして阿仁川支流の小又川に阿仁川ダムが建設されることになった。その後、1988（昭和63）年に「森吉山ダムの建設に関する基本計画」が公示され、阿仁川ダムから森吉山ダムと名称を変更した。森吉山ダムは洪水調節のほか、灌漑用水の供給、水道水の供給、水力発電などを目的とする多目的ダムで、森吉町森吉字桐内から深渡地内までの地域が建設事業に係ることが決まった。

森吉山ダムの建設に伴い、事業対象区域内の住民の移転が進む中、事業主体である建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づいて秋田県教育委員会に対し、貯水池流域面積248.0㎢についての遺跡分布調査を依頼した。秋田県教育委員会は遺跡分布調査を1992年度・1993年度の2カ年にわたって実施し、桐内遺跡（縄文時代前期・後期）・二重鳥遺跡（縄文時代後期）・漆下遺跡（縄文時代後期）・栩岱（とちたい）遺跡（縄文時代後期・晩期）・砕渕（じゃきぶち）遺跡（縄文時代）・丹瀬口遺跡（縄文時代後期）の新発見の遺跡6カ所が開発区域に係ることを確認した。この結果に基づき森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、1991（平成3）年発行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に記された「周知の遺跡」、及び遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての範囲確認調査を秋田県教育委員会へ実施依頼し、遺構・遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、1994（平成6）年度より範囲確認調査を実施し、1998（平成10）年度にすべての遺跡の範囲確認調査を終了した。各年度に範囲確認調査を行った遺跡は以下のとおりである。

1994（平成6）年度

桐内C（桐内Ⅰ）遺跡、桐内D（桐内Ⅱ）遺跡、桐内沢遺跡

1995（平成7）年度

日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、漆下遺跡、上ハ岱A遺跡、上ハ岱B遺跡、二重鳥A遺跡、二重鳥B遺跡、二重鳥C遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥F遺跡、二重鳥G遺跡、二重鳥H遺跡、水上遺跡、天津場A遺跡、天津場B遺跡、天津場C遺跡、ネネム沢A遺跡、ネネム沢B遺跡、ネネム沢C遺跡、森吉家ノ前A遺跡、森吉家ノ前B遺跡、森吉家ノ前C遺跡、森吉A遺跡、森吉B遺跡

1996（平成8）年度

上悪戸A遺跡、上悪戸B遺跡、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、橋場岱A遺跡、橋場岱B遺跡、橋場岱C遺跡、橋場岱D遺跡、橋場岱E遺跡、橋場岱F遺跡、橋場岱G遺跡、向様田A遺跡、向様田B遺跡、向様田C遺跡、向様田D遺跡、向様田E遺跡、向様田F遺跡

1997（平成9）年度

深渡遺跡、深渡A遺跡、鷲ノ瀬遺跡、地蔵岱遺跡、地蔵岱A遺跡、惣瀬遺跡

1998（平成10）年度

鷲ノ瀬遺跡

範囲確認調査進捗中の1994（平成6）年、ボーイスカウト日本連盟が1998年（平成10）年8月に第12回日本ジャンボリーを森吉山麓で開催することを決定した。そのため県道比内・森吉線（旧小滝・阿仁前田停車場線）などジャンボリー開催に向けたアクセス道路の整備が急務となった。これに伴って、1995（平成7）年に日廻岱A遺跡・砕渕遺跡、1996（平成8）年には上悪戸D遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡の各一部が、日本ジャンボリーアクセス道路の整備事業に係る発掘調査として、森吉町教育委員会の手によって発掘調査が行われた。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、範囲確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事日程に合わせ発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。

姫ヶ岱D遺跡の発掘調査は、1997（平成9）年5月26日から8月22日まで遺跡総面積全域にあたる2,100㎡を調査した。秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る発掘調査としては、隣接の姫ヶ岱C遺跡、石棺様組石が発見されたことで話題となった深渡遺跡とともに初めての調査となった。なお同年には、森吉町教育委員会によって上悪戸A遺跡の発掘調査が行われた。

参考文献

無明舎　『秋田県昭和史』　無明舎　1989（平成元）年

秋田魁新報社　『ダムに沈む「むら」　森吉町森吉』　モリトピア選書1　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1992（平成4）年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書2　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993（平成5）年

森吉町教育委員会　『平成7年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1996（平成8）年

森吉町教育委員会　『平成8年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1997（平成9）年

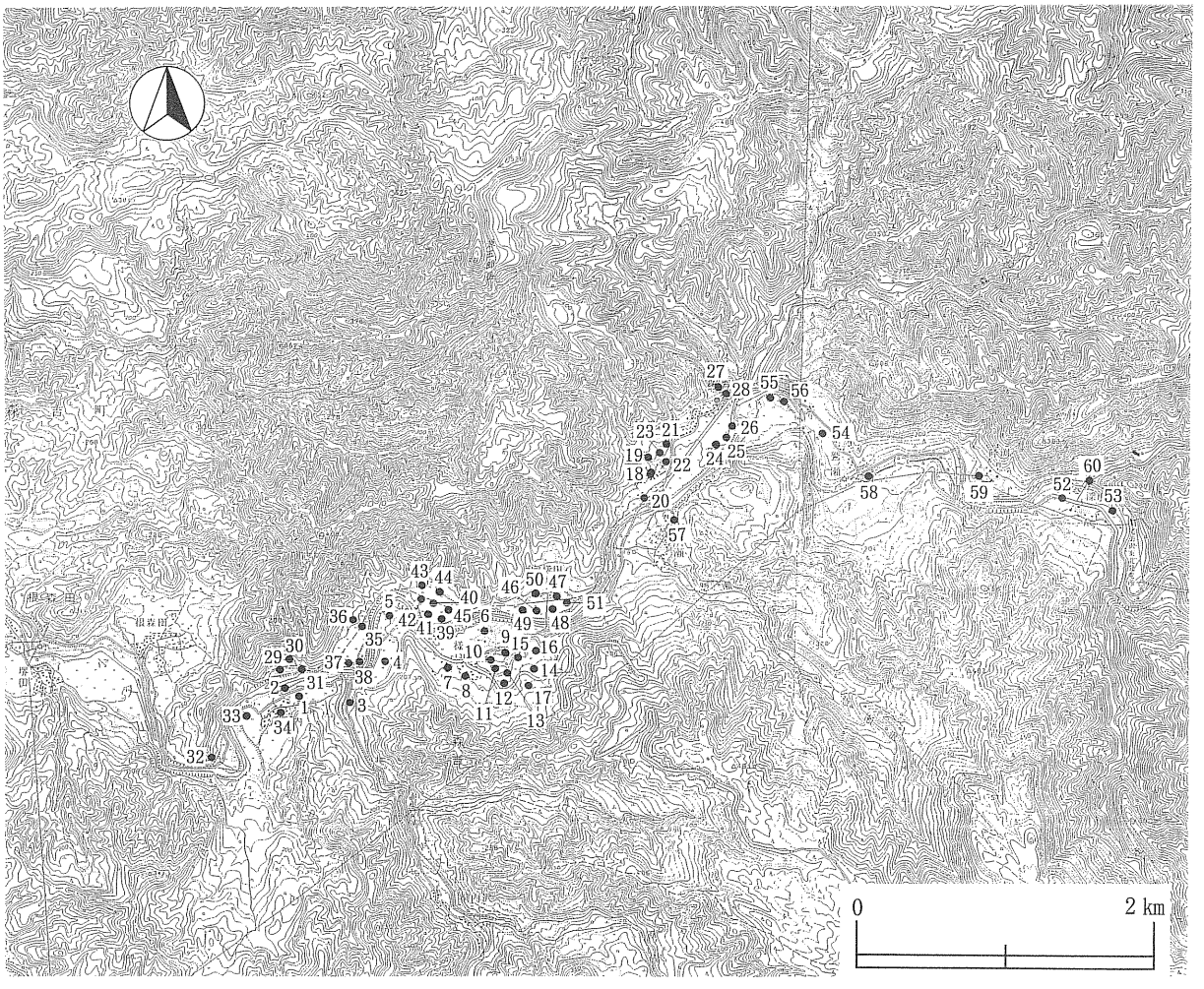
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994（平成6）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995（平成7）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成8）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成9）年

秋田県教育委員会　『教育秋田』　1997（平成9）年



第１図　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

第１表　森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
1	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文前～後期
2	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文後期
3	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下タ103	縄文前～後期
4	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱65, 63-1外	縄文前・後期
5	日廻岱B	森吉町森吉字日廻岱86, 88, 89, 90, 91	縄文前・後期
6	漆下	森吉町森吉字漆下2-1, 4, 5, 6, 7, 8, 14-2, 37外	縄文前・後期
7	上ハ岱A	森吉町森吉字上ハ岱102, 104, 105, 106外	縄文晩期
8	上ハ岱B	森吉町森吉字上ハ岱70, 71, 72	縄文晩期
9	二重鳥A	森吉町森吉字二重鳥31-1, 32-2, 47-1, 106-1, 134, 135	縄文晩期
10	二重鳥B	森吉町森吉字二重鳥11, 99, 100外	縄文前～後期
11	二重鳥C	森吉町森吉字二重鳥93, 94, 95, 96, 97, 110	縄文後期
12	二重鳥D	森吉町森吉字二重鳥39	縄文後期
13	二重鳥E	森吉町森吉字二重鳥65, 66-1, 69, 70-2, 70-3	縄文前・後・晩期
14	二重鳥F	森吉町森吉字二重鳥124-1	縄文時代
15	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥80, 81-1, 84-1	縄文晩期
16	二重鳥H	森吉町森吉字二重鳥6, 14, 15	縄文晩期
17	水上	森吉町森吉字水上42-1, 43-1, 44, 113-6外	縄文中・晩期
18	天津場A	森吉町森吉字天津場15-3	縄文後期・古代
19	天津場B	森吉町森吉字天津場16-1	縄文後期
20	天津場C	森吉町森吉字天津場87-1, 87-3, 88-2	縄文中・後期
21	ネネム沢A	森吉町森吉字ネネム沢26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35	旧石器・縄文後期・古代
22	ネネム沢B	森吉町森吉字ネネム沢17, 19, 22	縄文後期
23	ネネム沢C	森吉町森吉字ネネム沢6-1	縄文晩期
24	森吉家ノ前A	森吉町森吉字森吉家ノ前50, 145, 174, 175, 176, 177, 178	縄文後期・古代
25	森吉家ノ前B	森吉町森吉字森吉家ノ前138, 139, 140, 141, 142	縄文中～晩期・室町時代
26	森吉家ノ前C	森吉町森吉字森吉家ノ前101-1, 103, 114, 115, 116	中世
27	森吉A	森吉町森吉字森吉95	縄文後期・古代
28	森吉B	森吉町森吉字森吉69	縄文後期
29	上悪戸A	森吉町根森田字上悪戸4-1, 9, 10-1, 11-1・2, 12-1~4, 13, 14-1, 16-1・2外	縄文後期
30	上悪戸B	森吉町根森田字上悪戸8-12	弥生後期
31	上悪戸C	森吉町根森田字上悪戸7, 8-9	縄文後期
32	上悪戸D	森吉町根森田字上悪戸34-7, 34-29~41, 34-60・60・61・67, 54外	縄文後・晩期
33	桐内A	森吉町森吉字桐内前田5-1, 6-1・3 外	縄文後期
34	桐内B	森吉町森吉字家ノ下16、字桐内33-1、34～37外	縄文晩期
35	姫ヶ岱A	森吉町根森田字姫ヶ岱8, 9-1, 10-1	縄文前期
36	姫ヶ岱B	森吉町根森田字姫ヶ岱14-10～12	縄文時代
37	姫ヶ岱C	森吉町根森田字姫ヶ岱12-2～11, 15外	縄文中期
38	姫ヶ岱D	森吉町根森田字姫ヶ岱12-31外	縄文中期
39	楠場岱A	森吉町森吉字楠場岱48, 49, 50-1外	縄文中期
40	楠場岱B	森吉町森吉字楠場岱69, 78外	縄文後・晩期
41	楠場岱C	森吉町森吉字楠場岱42, 62外	縄文後・晩期
42	楠場岱D	森吉町森吉字楠場岱110-1	縄文時代
43	楠場岱E	森吉町森吉字楠場岱109	縄文時代
44	楠場岱F	森吉町森吉字楠場岱101, 103, 104	縄文晩期
45	楠場岱G	森吉町森吉字楠場岱6-1, 39, 40, 46	縄文後期
46	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8, 9-1・2, 11, 16, 81-1, 82, 83, 84	縄文晩期
47	向様田B	森吉町森吉字向様田家ノ下モ67-1・2, 70, 71-1, 72, 74, 75外	縄文後・晩期
48	向様田C	森吉町森吉字向様田家ノ下モ76, 77, 78, 79	縄文後・晩期
49	向様田D	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14-1, 17, 18, 19-1, 20	縄文晩期
50	向様田E	森吉町森吉字向様田家ノ下モ36, 37, 39, 63, 64	縄文前期
51	向様田F	森吉町森吉字向様田家ノ下モ58, 59外	縄文後期
52	深渡	森吉町森吉字深渡家ノ前102－1外	縄文前～晩期
53	深渡A	森吉町森吉字深渡29外	縄文後・晩期
54	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬80外	縄文後期
55	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文前～後期・平安時代
56	地蔵岱A	森吉町森吉字地蔵岱124外	縄文中・後期
57	惣瀬	森吉町森吉字惣瀬86外	縄文後期・平安時代
58	栩岱	森吉町森吉字栩岱74外	縄文後・晩期
59	砕渕	森吉町森吉字砕渕124外	縄文後期
60	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬2－1外	縄文後期

第2節　調査の組織と構成

遺　跡　名	姫ヶ岱D遺跡（ひめがたいDいせき）（略号 2HGT-D）
所　在　地	秋田県北秋田郡森吉町根森田字姫ヶ岱 12-31 外
調査期間	1997（平成9）年5月26日～8月22日
調査目的	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調査面積	2,100㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	吉川　　孝　（秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事）
	村上　義直　（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員） （現、同センター文化財主事）
	小西　秀平　（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
総務担当者	藤肥　良清　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査） （現、秋田県教育庁福利課課長補佐）
	荒井　信行　（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）
	佐藤　幸嗣　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） （現、秋田県教育庁福利課主事）
	須田　輝樹　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） （現、秋田県立図書館主事）
調査協力機関	建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所
	森吉町
	森吉町教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

姫ヶ岱Ｄ遺跡の所在する秋田県北秋田郡森吉町は、秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と、鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。

本遺跡は、森吉町中央部の米内沢地区にある森吉町役場の南東約 11㎞、第３セクター秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の東南東約５㎞の地点に所在する。地理的には、北緯 40°02′14″、東経 140°28′16″に位置する。

遺跡周辺の地形をみると、南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高 1,454ｍのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山がある。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地をはさんで、北北東に小繋森（標高 1,010ｍ）、北に高烏帽子（標高 764ｍ）、北西に源五郎岳（標高 559ｍ）などが東西に連なっており、森吉山山頂からの距離は、いずれも約 10～11㎞である。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。本遺跡の近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高 1,119ｍ）・柴倉岳（標高 1,178ｍ）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支川を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川に合流する。

小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約 500ｍ、狭いところで約 20ｍ、南北両側から山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地（本遺跡周辺では源五郎岳山地）の山腹斜面の方が勾配が急である。各集落は主に山麓の平地縁辺部に集村形態をとりながら形成されており、平坦地中央部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和 40 年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩（粘板岩、ホルンフェルス）が小繋森の山頂付近に顔を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山砕屑岩類及び堆積岩類を基盤岩としている。これらを貫く粗粒玄武岩の貫入岩がダイク状及びシート状に複雑に分布しており、向様田地区や小又川下流でみられる。第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動にともなう泥流堆積物・段丘堆積物・扇状地堆積物・崖錐堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。

当地域の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性砕屑岩類が分布し、左岸側には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。

第2節　遺跡の歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』（1991年発行）によると、森吉町には58カ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されている。ただし同書刊行後に、堤沢川流路溝工事にともなう分布調査で、諏訪岱遺跡が発見されており、また秋田県教育庁文化課による1992（平成4）・1993（平成5）年度の森吉山ダム建設工事に係る分布調査、及び秋田県教育委員会による1994（平成6）年度からの同事業に係る遺跡範囲確認調査によって、合計60の遺跡が小又川流域の根森田地区・森吉地区で新たに見つかっており、町の遺跡分布地図は大幅に塗り替えられた。

森吉町では、ダム建設事業に係る遺跡範囲確認調査の実施された1994（平成6）年度以前においては、旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、これらの調査により森吉地区のネネム沢A遺跡で旧石器時代の遺物が確認された。

縄文時代になると遺跡数は比較的増加する。旧い時期の遺跡から挙げていくと、早期以前では爪形文・貝殻沈線文・条痕文の土器が出土した桂の沢遺跡がある。前期では長野岱I遺跡・地蔵岱遺跡、そして1989（平成元）年の秋田県教育委員会による範囲確認調査で、前期から後期にかけての大規模な集落跡（推定面積15万㎡）が判明した狐岱遺跡がある。中期から晩期にかけては、姫ヶ岱C遺跡・砕渕遺跡・日廻岱A遺跡・天津場C遺跡・上悪戸D遺跡・深渡遺跡・森吉家ノ前B遺跡・白坂遺跡・塚の岱遺跡などがある。深渡遺跡は、内部で何かを焼いた痕跡のある石棺様組石が1基検出され、「火葬の可能性あり」と大きく報道された遺跡である。白坂遺跡・塚の岱遺跡は戦前より知られる晩期の大規模遺跡であり、特に白坂遺跡では「笑う岩偶」の出土で話題となった。

弥生時代では、吉野I遺跡・長野岱I遺跡・上悪戸B遺跡で遺物が出土しているが、明瞭なかたちでの遺構検出例は僅少である。

古代にあっては、現在の森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域は『日本三代実録』に記す「榲渕（すぎぶち）村」に擬定されており、令制郡外の地と考えられている。狐岱遺跡や諏訪岱遺跡などでは平安時代の集落跡、地蔵岱遺跡では製鉄関連遺構が確認されており、その他天津場A遺跡・ネネム沢A遺跡・森吉家ノ前A遺跡で古代の遺構・遺物を確認している。

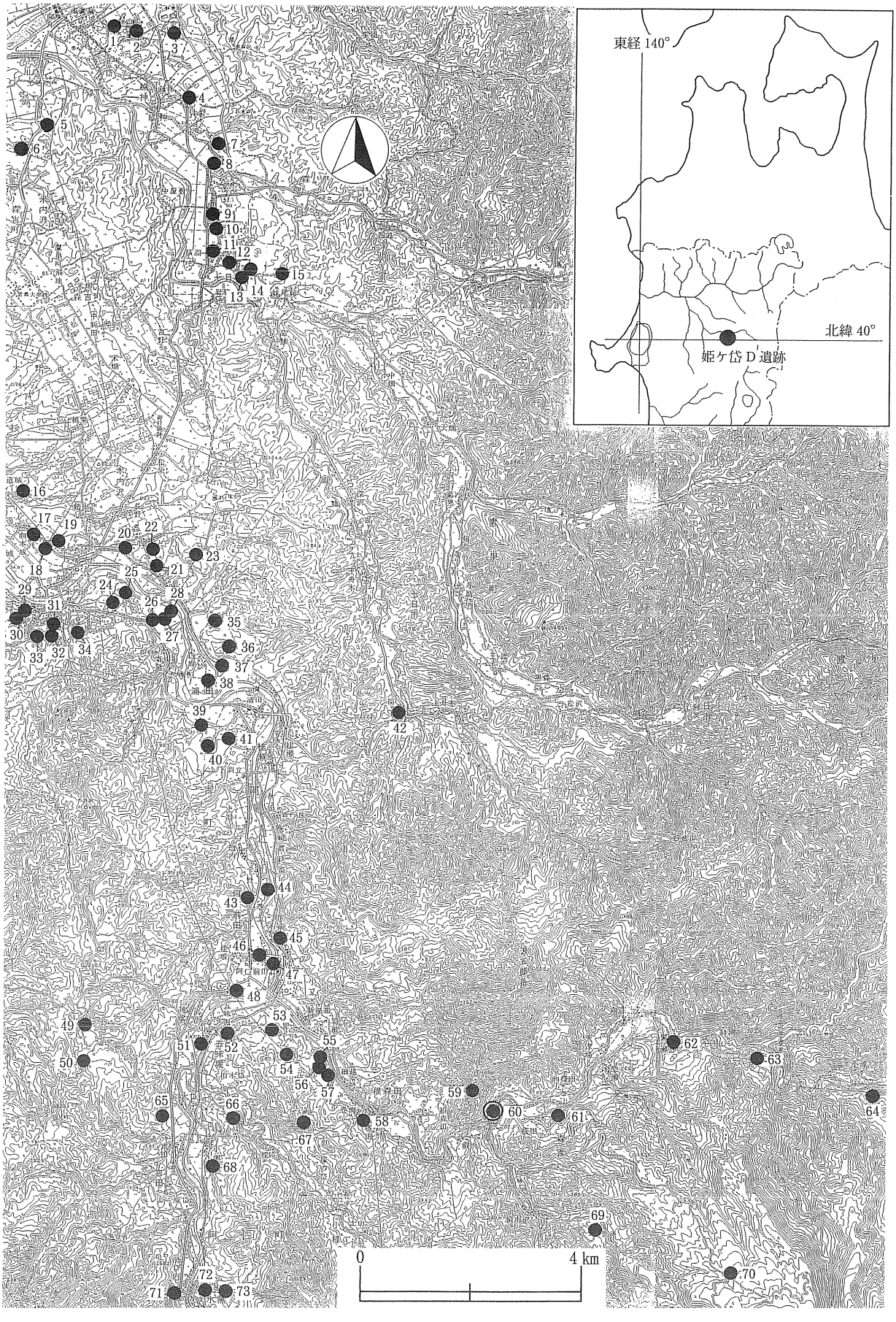
中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10カ所ほど確認されている。そのうち旧前田村にあたる町南部に所在するのは、阿仁前田地区の前田館、五味堀地区の花館・天館、根森田地区の仲ノ又館である。本遺跡に近い仲ノ又館は、現地で「タテデッコ」「タテジャコ」と呼ばれており、空堀や見張り台跡がある。森吉地区では中世城館跡は確認されていないものの、森吉家ノ前B遺跡で馬具の一部と思われる金具と室町時代に属すると思われる珠洲系陶器が出土しており、小滝新兵ヱ岱遺跡出土の鎌倉時代製作の青銅古鏡とともに、当該地区の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

参考文献

秋田県農政部農地整備課　『大野台開発計画区域　土地分類基本調査　米内沢』　1978（昭和53）年

川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書2　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993（平成5）年

角川書店　『角川日本地名大辞典　5　秋田県』　1980（昭和55）年
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991（平成3）年
秋田県　『秋田県史　考古編』　1977（昭和52）年
奈良修介・豊島昴　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書3　吉川弘文館　1966（昭和41）年
大和久震平　「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」『昭和三十二年度調査研究報告』　秋田県文化財保護協会　1958（昭和33）年
大野憲司　「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号　1990（平成2）年
高橋学　「森吉町長野岱Ⅰ遺跡採集の岩偶」『秋田考古学』　第42号　秋田考古学協会　1993（平成5）年
加賀利男　「長野岱Ⅰ遺跡について」『広報　もりよし』　第120号　1968（昭和43）年
加賀利男　「塚の岱遺跡の発掘調査について」『広報　もりよし』　第131号　1969（昭和44）年
森吉町　「民俗資料ならびに考古学資料調査の協力依頼について」『広報　もりよし』　第127号　1968（昭和43）年
森吉町教育委員会　『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事にかかる発掘調査報告～』　1992（平成4）年
森吉町教育委員会　『平成7年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1996（平成8）年
森吉町教育委員会　『平成8年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1997（平成9）年
森吉町教育委員会　『上悪戸D遺跡発掘調査報告書～比内・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』　1997（平成9）年
秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年
秋田県教育委員会　『白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第244集　1994（平成6）年
秋田県教育委員会　『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第247集　1994（平成6）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成9）年



第２図　周辺の遺跡分布図

第２表　秋田県遺跡地図（県北版）による遺跡一覧（１）

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物
1	石の巻岱Ⅰ	鷹巣町脇神字石の巻岱 60	縄文	縄文土器片（晩期）
2	石の巻岱Ⅱ	鷹巣町脇神字石の巻岱 65	縄文	縄文土器片（後期）、香炉型土器
3	高森岱	鷹巣町脇神字高森岱 16	縄文	縄文土器片（前期・中期）
4	藤株	鷹巣町脇神字藤株塚ノ岱 43-4	縄文	竪穴住居跡、Ｔピット、縄文土器（前期・後期・晩期）、土製品、石器、石製品
5	からむし岱Ⅰ	鷹巣町脇神字からむし岱 21	続縄文	続縄文土器片
6	からむし岱Ⅱ	鷹巣町脇神字からむし岱 93	続縄文	続縄文土器片、壺形土器
7	タモノ木	鷹巣町小森字タモノ木 17	縄文	縄文土器片（中期）
8	小森	鷹巣町小森字小森 88-1	縄文	縄文土器片（晩期）
9	根木屋敷岱Ⅰ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱 20	古代	土師器
10	根木屋敷岱Ⅱ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱 61	縄文	縄文土器片（後期・晩期）
11	山の上	鷹巣町七日市字山の上 57	縄文	縄文土器片（中期）
12	囲の内	鷹巣町七日市字囲の内 80	縄文	縄文土器片（後期）
13	石倉岱	鷹巣町七日市字石倉岱 3-1	縄文	縄文土器片（中期）
14	伊勢堂岱	鷹巣町七日市字伊勢堂岱 8-4	縄文	縄文土器片（前期・中期・後期）
15	野尻	鷹巣町七日市字野尻 8-2	縄文	縄文土器片（後期）
16	大野	合川町上道城字大野 1	縄文	縄文土器片（中期）
17	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷 3	縄文	縄文土器片、石匙
18	桐木岱Ａ	森吉町米内沢字桐木岱 41～65	縄文	縄文土器片（晩期）、石器
19	桐木岱Ｂ	森吉町米内沢字桐木岱 20～23	縄文	縄文土器片、土偶
20	長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱 346-1	縄文	縄文土器片（中期）
21	長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱 56-1	縄文・弥生・古代	円形ピット、組石群、縄文土器片（前期・中期）、弥生土器片、土師器、石器
22	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱 56-1	中世	空堀
23	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋 1-34	縄文・古代	縄文土器片（前期、中期、後期）、土師器、石器
24	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱 77-1	縄文・古代	縄文土器片（前期、中期、後期）、土師器、石器
25	狐岱	森吉町米内沢字狐岱 88	縄文・古代	竪穴住居跡（縄文・古代）、土坑、配石墓、縄文土器片（前期・中期・晩期）、土師器
26	山崎	森吉町米内沢字山崎 57-1	縄文	土坑、配石遺構、縄文土器片
27	吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野 13-1	縄文・弥生	土坑、縄文土器片、弥生土器片
28	吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野 5-1	古代	土師器片
29	御獄	森吉町米内沢字御獄 62-1	古代	土師器片
30	御獄館	森吉町米内沢字高御獄 2	中世	空堀、土塁
31	寺ノ上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上 12-28	縄文	縄文土器片（晩期）、石鏃、石匙
32	寺ノ上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上 27-1	古代	土師器片
33	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口 99-5	中世	空堀、土塁、井戸跡
34	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森 52-57	古代	土師器片
35	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢 50-1	縄文	縄文土器片、石器
36	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根 92	縄文	縄文土器片（後期）、石器
37	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱 80	縄文	縄文土器片（晩期）、土偶、岩偶

第３表　秋田県遺跡地図（県北版）による遺跡一覧（２）

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物
38	白坂	森吉町浦田字白坂上岱 19-22	縄文	竪穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器（後期・晩期）、岩偶、石器、土製品
39	愛宕堂	森吉町浦田字稲荷沢 40	縄文	縄文土器片（中期）、石器破片
40	浦田館	森吉町浦田字愛宕堂下 44	中世	館跡
41	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂 3	縄文	縄文土器片（前期・中期）、石器
42	若木岱	鷹巣町七日市字若木岱 9-2	縄文	縄文土器片、石器
43	焼山	森吉町阿仁前田字道行沢 136-1	縄文	縄文土器片
44	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱 345	縄文	縄文土器片
45	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根 36	縄文	縄文土器片、石器
46	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森 1-1	中世	館跡
47	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森 1-1	縄文	縄文土器片（前期・中期）
48	陣場岱Ⅰ	森吉町阿仁前田字陣場岱 40-1	縄文	縄文土器片（前期・中期）、石器
49	冷水沢Ａ	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
50	冷水沢Ｂ	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
51	五味堀	森吉町五味堀字五味堀 1	縄文	縄文土器片、石器
52	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前 45-46	縄文	縄文土器片（晩期）
53	五味堀高屋敷	森吉町五味堀字下タ大久保岱 174	縄文	縄文土器片
54	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱 20	縄文	縄文土器片（後期）、独鈷石
55	小又小平里Ａ	森吉町小又字涌坪 74	縄文	縄文土器片（後期）、石器
56	小又小平里Ｂ	森吉町小又字上岱 9	縄文	縄文土器片（後期）、石器
57	片平館	森吉町根森田字片平館 3	縄文	縄文土器片（後期）、石器
58	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢 13	縄文	土坑、縄文土器（早期～晩期）、石器
59	仲ノ又館	森吉町根森田字仲ノ又 75	中世	空堀
60	姫ヶ岱	森吉町根森田字姫ヶ岱 8～15	縄文	縄文土器片、石器
61	様田	森吉町森吉字様田二重鳥 131	縄文	縄文土器片、石器
62	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬 31-1	縄文	縄文土器片（前期）
63	深渡	森吉町森吉字深渡家の前	縄文	縄文土器（前期～晩期）、石組炉
64	向小滝	森吉町森吉字向小滝上段 613	縄文	縄文土器片（晩期）、石器
65	風張城	阿仁町吉田字寺屋布 1-7	中世	空堀、井戸跡
66	花館	森吉町五味堀字野崎 1-82	中世	空堀
67	天館	森吉町五味堀字天館 101	中世	館跡
68	高田城	阿仁町小淵字山ノ内 65-32	中世	空堀
69	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱 46	縄文	縄文土器片（後期・晩期）
70	小又川	森吉町小又川国有林 52 林班る小班	縄文	縄文土器片（後期）、石器
71	熊堂	阿仁町水無字湯口内 451-1	縄文	縄文土器片（中期）、石鏃
72	上岱Ⅰ	阿仁町水無字上岱 104-2	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器（中期・後期）
73	上岱Ⅱ	阿仁町水無字上岱 135-2	縄文	縄文土器片（中期）

第3章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

姫ヶ岱D遺跡は、阿仁川支流小又川右岸の砂礫段丘上にある。この段丘は3つの段丘面から成っており、本遺跡は、南北の距離がおよそ110m、東西が最大で約25mの南北に細長い中位段丘面に立地する。本遺跡の標高は、およそ126～127.5mであり、東側は小又川に向かって比高20mもの急崖となっている。遺跡外となる下位段丘には表土に砂礫層が広がり、その南東端で小又川がほぼ直角に屈曲し、流れの向きを西にかえている。また、本遺跡の現況は、ほぼ全域が休耕田である。

姫ヶ岱地域では1996（平成8）年度に秋田県教育委員会が範囲確認調査を行い、姫ヶ岱A遺跡（遺跡面積1,650㎡）、姫ヶ岱B遺跡（同850㎡）、姫ヶ岱C遺跡（同8,600㎡）、姫ヶ岱D遺跡（同2,100㎡）の4遺跡を確認した。この地域の中ほどを町道が南西から北東に通っており、姫ヶ岱A・C・Dの各遺跡は町道の南側に、B遺跡は北側に位置している。今回、姫ヶ岱D遺跡については遺跡総面積にあたる2,100㎡を調査した。

第2節　調査の方法

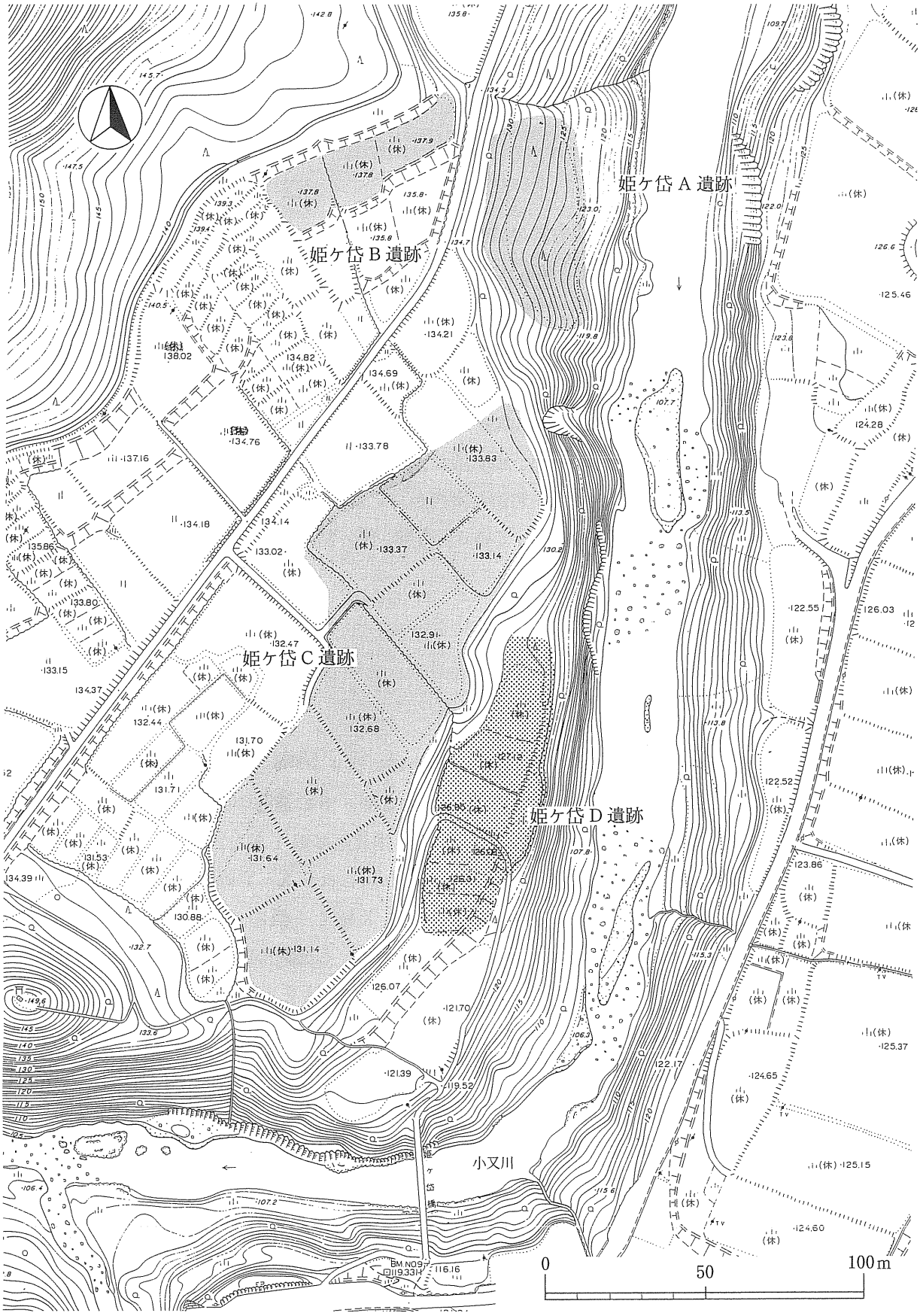
1　野外調査

調査はグリッド法でおこなった（第4図）。対象面積全域にグリッドを設定するため、遺跡の西側にある建設省打設の3級基準点№1・№2を用いて、隣接する姫ヶ岱C遺跡中心付近に中心杭を設定した。この中心杭を原点とし、国家座標第X系の南北方向に南北基準線Y軸を設定した。またこの基準線と直交して原点の基準杭を通る線を東西基準線X軸とし、これらX・Y両軸に4m×4m方眼メッシュを割り付けた。原点をMA50とし、東西方向には、X軸上を西に4m進む毎にMB・MC・MD・・・・と正順に、東に4m進む毎にLT・LS・LR・・・・と逆順に各々A～Tまでの、2文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Y軸を北に4m進む毎に51・52・53・・・・、南に4m進む毎に49・48・47・・・・と増減する2桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るX軸とY軸の組み合わせで、MA50・MB51・MC52・・・・のように呼ぶこととした。

遺構は種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、2または4分割法による精査を行った。

遺物はグリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐水性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として1/20、細部状況を表すために適宜1/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、グリッド杭と間尺とを組み合わせた手測量によった。断面図には土色・堅さ・しまり・土性・混入物を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。



第３図　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡

発掘調査における写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、発掘終了の際には全景を写すためローリングタワーを使用した。写真は、35㎜カメラにモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）フィルムを装着し、必要に応じてネガカラーも加えている。

2　室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせた図を第2原図とした。第2原図作成後、これをトレースした。

遺物は、洗浄・注記の後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業の後、写真撮影を行っている。

第3節　調査経過

発掘調査に先立って、平成9年5月12日～23日の日程で森吉山ダム建設事業のための工事用道路（森吉山ダム完成後は県道比内森吉線となる予定）に係る根森田字仲ノ又地内の範囲確認調査を行った。この調査は、その過程で遺跡と認められれば当該地区の発掘調査を継続して行い、認められなければ姫ヶ岱D遺跡の発掘調査に入るという原因者からの要請であった（結果的には、当該地区では遺構や遺物包含層の存在は認められなかった）。

当初からそうした流動的な要素があったのに加え、事務所・駐車場用地造成工事のやり直しというハプニングが重なり、ベルトコンベアーを用いた本格的な粗掘作業を開始したのは、6月13日であった。

5月26日　調査初日ながら調査体制が整っていない。午前は下草刈り・立木伐採を行った。午後、発掘現場作業員健康診断。

5月28日　範囲確認調査の時のトレンチ排土の除去作業を行った。並行して遺物の有無を丹念に調べた結果、大木9・10式土器がまとまって出土した。また、石核も2点確認した。

6月 2日　小又川に臨む姫ヶ岱D遺跡東側に土留柵を設置した。

6月 3日　事務所・駐車場用地造成工事終了。

6月 4日　姫ヶ岱D遺跡と姫ヶ岱C遺跡との斜面にトレンチを5本入れ、遺構の有無を確認する作業を始めた。造成地が未買収地だったことが判明し、隣接地に造成工事をやり直すこととした。

6月 6日　グリッド杭打設開始。

6月 9日　ベルトコンベアー現場到着。

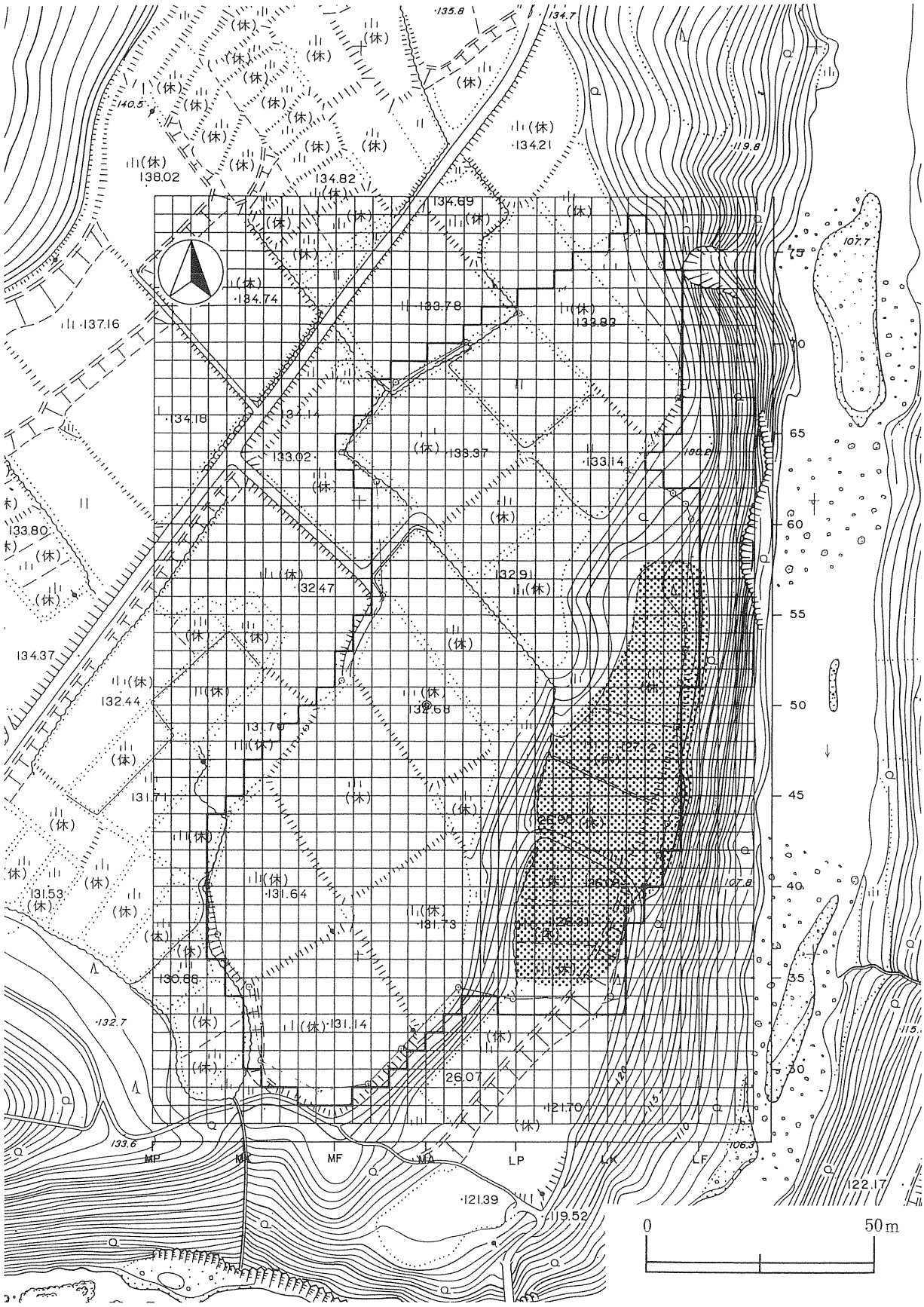
6月10日　ベルトコンベアー設置作業。造成工事終了。斜面トレンチには遺構はないものと判断した。調査区域南側（排土置き場に近い方）で一輪車を利用した粗掘作業を開始。

6月11日　事務所・作業員休憩所棟などを造成地に設置。

6月12日　発電機の配線完了。

6月13日　調査区北側から粗掘作業を開始。グリッド杭打設終了。

6月17日　遺跡遠景写真の撮影。初めての遺構としてSX01（欠番）、SX02を確認。



第４図　グリッド設定図

6月20日　電話取付工事完了。台風が近づいているのでその対策をとった。

6月23日　LG58で台付鉢形土器の台部出土。

7月10日　LI42より長径40㎝（推定）、短径33㎝の楕円形の石皿が表土中より出土。

7月14日　SQ09（SI09）、SQ10を確認。

7月24日　SK17を確認。

8月 1日～4日　森吉山麓にてプレジャンボリーにあたる第11回東北キャンポリーが開催される。

8月 5日　LMライン以西の攪乱層より多量の遺物が出土する。

8月 8日　SI04、SI05、SK22、SN13、SN14を除いた全遺構について精査を終了。

8月18日　現場器材小屋撤去作業開始。

8月19日　現場器材小屋撤去時にその跡地と周辺から土坑3基（SK38、SK39、SK42）、住居跡（SI40、SI42）を検出。

8月22日　全遺構の精査終了。図面整理が残ったまま、本遺跡の発掘調査を終え、姫ヶ岱C遺跡の調査に入った。

8月28日　京極森吉山ダム工事事務所長他2名来跡。

8月29日　森吉山ダム工事事務所工事課長、冨樫文化課長、同課武藤学芸主事ら来跡。

9月 3日　本遺跡の図面整理等を終了した。

第４章　調査の記録

第１節　基本層位

本遺跡はかつて水田として利用されていたもので、水田化の際に遺跡全体が大きく削平を受けている。したがって遺物包含層であるⅣ層の残存している部分が少なく、削平をまぬがれた部分（もともと標高の低い所や水田の畦部分）はわずかである。基本層位の詳細は図に示してあるので、以下略述する。

Ⅰ層は表土であり、さらに３つに分けられる。Ⅰａ層は耕作の影響を受けていない表土で、Ⅰｂ層はかつて水田における耕作土がそのまま表土となっている層である。Ⅰｃ層はⅠｂ層の直下にみられる層で、Ⅰｂ層の鉄分が沈殿し、さらに酸化作用を受けたものと考えられる。Ⅱ層は表土の直下にある層で、西側の姫ヶ岱Ｃ遺跡に近い斜面では薄くなる。層厚は0.1～0.2ｍほどである。Ⅲ層はⅡ層より薄い色調を呈し、層厚は0.1～0.2ｍほどである。Ⅳ層は遺物包含層で、色調はⅢ層よりさらに薄い。層厚は0.2～0.3ｍほどである。Ⅲ層・Ⅳ層は分層の困難な部分もある。Ⅴ層は漸移層で、層厚は0.1～0.3ｍほどである。Ⅵ層は地山で、シルト質土および細砂で構成され、ロームのような粘性はなくパサパサしており、場所によって砂の混入度が異なる。

第２節　検出遺構と出土遺物

１　概要

姫ヶ岱Ｄ遺跡発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡８軒（うち４軒は炉のみ）、土坑６基、配石遺構１基、土器埋設遺構１基、焼土遺構２基、性格不明遺構２基、柱穴様ピット18基の計38基であった。

各遺構の構築時期は、遺物の出土がなく不明確なものもあるが、概ね縄文時代中期後半から縄文時代晩期までであり、主体となるのは縄文時代中期末葉から後期初頭、縄文時代後期後葉、縄文時代晩期前葉の３時期と考えられる。遺構の分布は遺跡南東端の下位段丘に臨む中位段丘縁辺部に集中し、旧道をはさんだ北側がそれに次ぐ。遺跡北部における遺構分布は疎らであった。

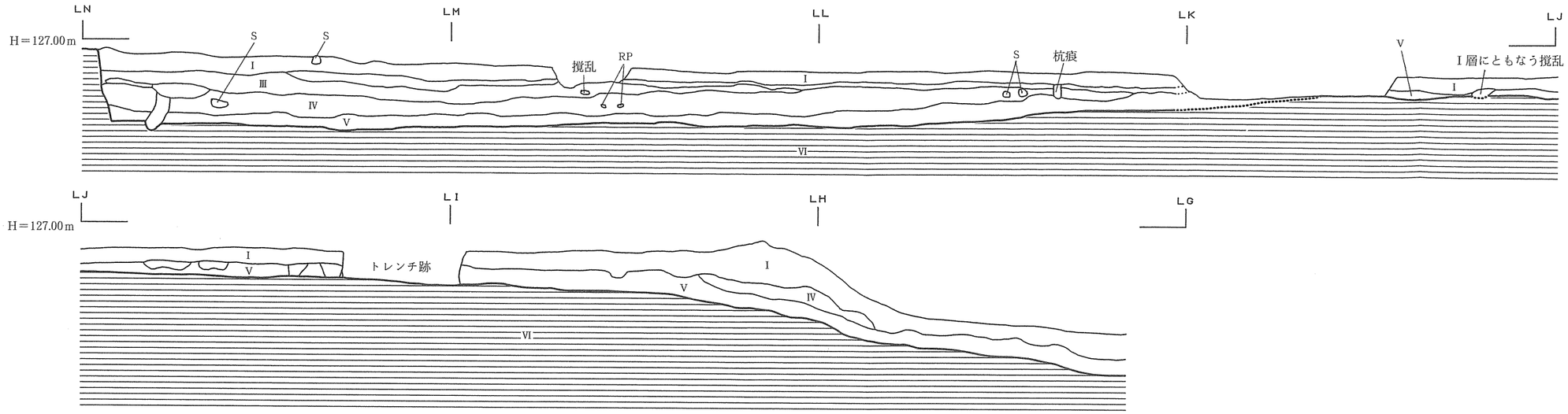
２　遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡のうちプランが確認できたのは４軒であり、のこりの４軒は炉が検出されただけであった。しかし、これらの炉の検出面は縄文時代の野外生活面より低く、地山を掘り込んで造られているので、竪穴住居に伴うものであることは明らかである。そこで、ここでは竪穴住居跡とともに扱った。

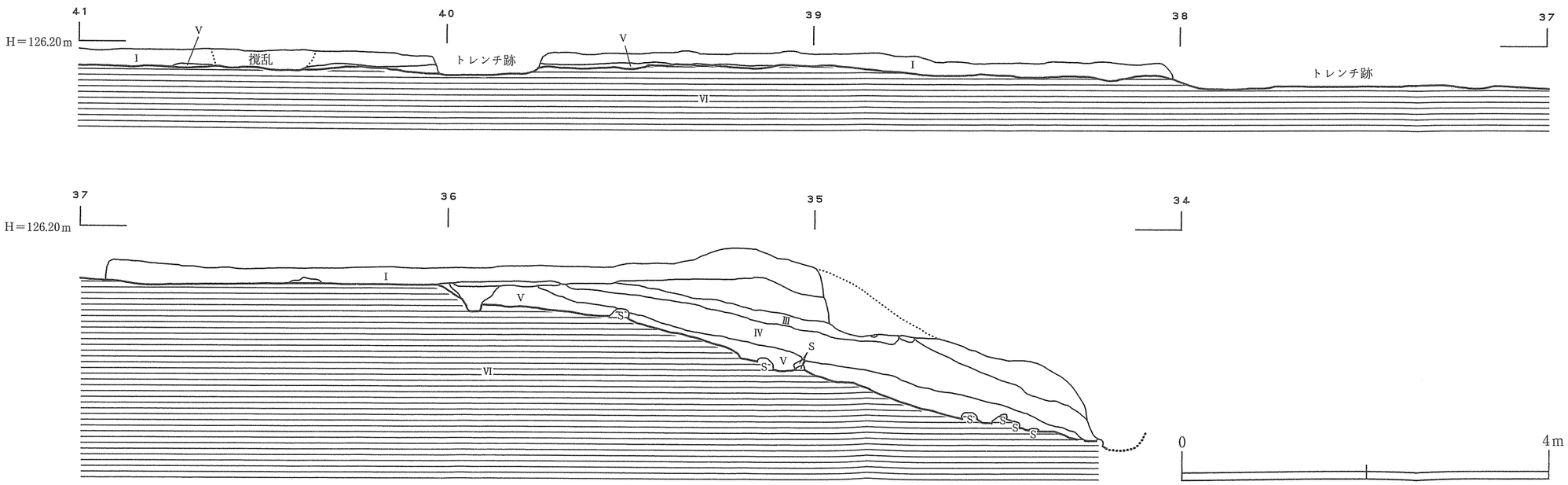
８軒あったと思われる住居のうち７軒は、調査区南東端の段丘縁辺部に一部重複を伴いながら連なるようにして検出されており、検出順に記述していくと、位置関係の説明に混乱を生じるおそれがある。そこで、竪穴住居跡に関する記述は、検出順ではなく、南側からSI04、SI46、SI05、SI43、SI41、

47 ライン土層断面

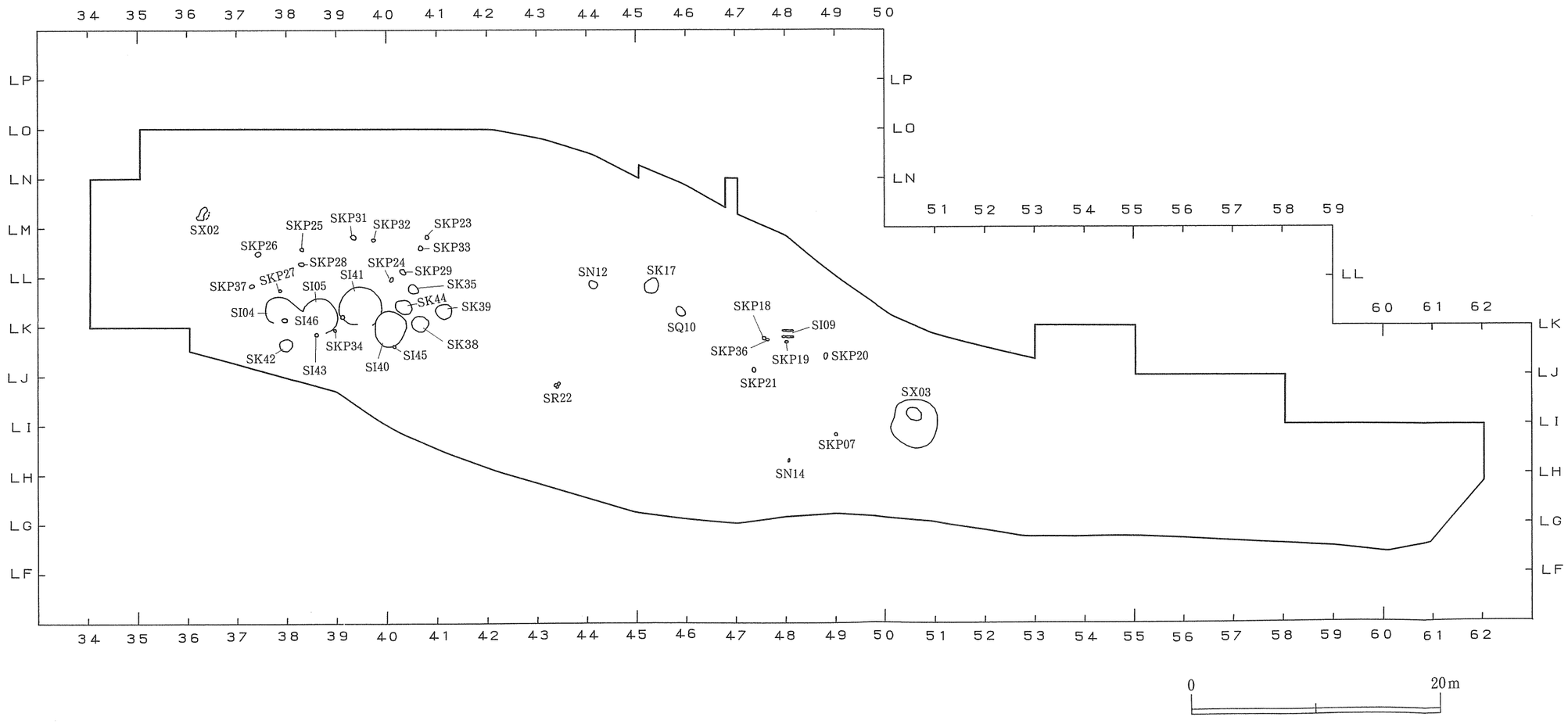


基本土層
Ⅰ層　黒褐色土（10YR3/2）表土
Ⅱ層　黒色土（10YR2/1）
Ⅲ層　黒色土（10YR2/1）　黒褐色土（10YR3/2）が下層に混入
Ⅳ層　黒褐色土（10YR3/2）　上層に黒色土（10YR2/1）浸透、遺物包含層
Ⅴ層　にぶい黄褐色土（10YR3/2）　暗褐色土（10YR3/3）混入、漸移層
Ⅵ層　にぶい黄褐色土（10YR3/2）　地山

LL ライン土層断面



第５図　基本土層図


34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50
51 52 53 54 55 56 57 58 59
60 61 62
LP LO LN LM LL LK LJ LI LH LG LF
SX02
SKP26
SKP25
SKP31
SKP32
SKP23
SKP33
SKP28
SKP24
SKP29
SKP37
SKP27
SI05
SI41
SK35
SK44
SK39
SI04
SI46
SKP34
SK38
SK42
SI43
SI40
SI45
SR22
SN12
SK17
SQ10
SKP18
SI09
SKP36
SKP19
SKP20
SKP21
SX03
SKP07
SN14
0
20m

第６図　遺構配置図

SI40、SI45（ここまで調査区南東端部に集中）、SI09という順番で行う。

SI04 竪穴住居跡（第7・8図、図版2・10）

［位　　置］ LK37・38グリッドに位置する。

［確　　認］ 漸移層～地山面で確認した。

［重　　複］ SI46竪穴住居跡と重複する。本遺構の床面より低い位置で石囲炉状の配石遺構とその内側で埋土に刺さった状態の土器片を検出した（SI46竪穴住居跡炉）ので、本遺構がSI46竪穴住居跡より新しい。

また本遺構の北壁からさらに北へ向かう狭い範囲で、床面より約0.05m低い面が検出された。底面は砂を主体とする砂礫層で、その上を黒色土が覆っていた。この面は倒木痕による破壊を受け、わずかしか遺存していないため、どれくらいの広がりをもっていたかは不明であるが、本遺構とはまた別の、SI46竪穴住居跡か、あるいはそれとも異なる住居跡の床面であったとも考えられる。

［平 面 形］ ほぼ円形のプランを示しているが、東側は倒木痕とみられる攪乱を受けており、壊されている。規模は、北西―南東の方向で直径2.6mほどである。

［壁・床面］ 確認面から床面までの深さは約0.2mで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は堅くしまっており、中央の炉周辺の床面には部分的に褐色土（地山土）が堆積していた。

［　炉　］ 住居中央部に石囲炉が構築されている。直径0.6mほどの円形で、長径0.2mほどの石を6個配する。東南側は石が1～2個抜き取られた状態と考える。炉とその周辺部分は他の床面より若干高くなっている。

［柱　　穴］ 柱穴は住居跡内部からは検出されなかったが、住居外の壁に隣接する部分から柱穴様ピットを2基検出した。

［出土遺物］ 1は器高（14.5㎝）より口径（推定22.5㎝）の大きい鉢形土器である。口縁にはヘラ状工具で押圧された刻目がある。RL縄文が施されている。2～5は、深鉢形土器の口縁部、6～8は胴部である。9は大型の深鉢形土器の底部、10は鉢形土器の底部である。1と10は、縄文時代晩期前葉（大洞B～BC期）の土器の特徴を備えている。石器では粗製の石匙（S1）が出土した。横型の石匙で打面側につまみ部を設ける。両面に先行剥離面を残し、調整はつまみ部周辺とつまみから降りる縁部および下側部に押圧剥離が行われている。

SI46 竪穴住居跡炉（第7・10図、図版2・11）

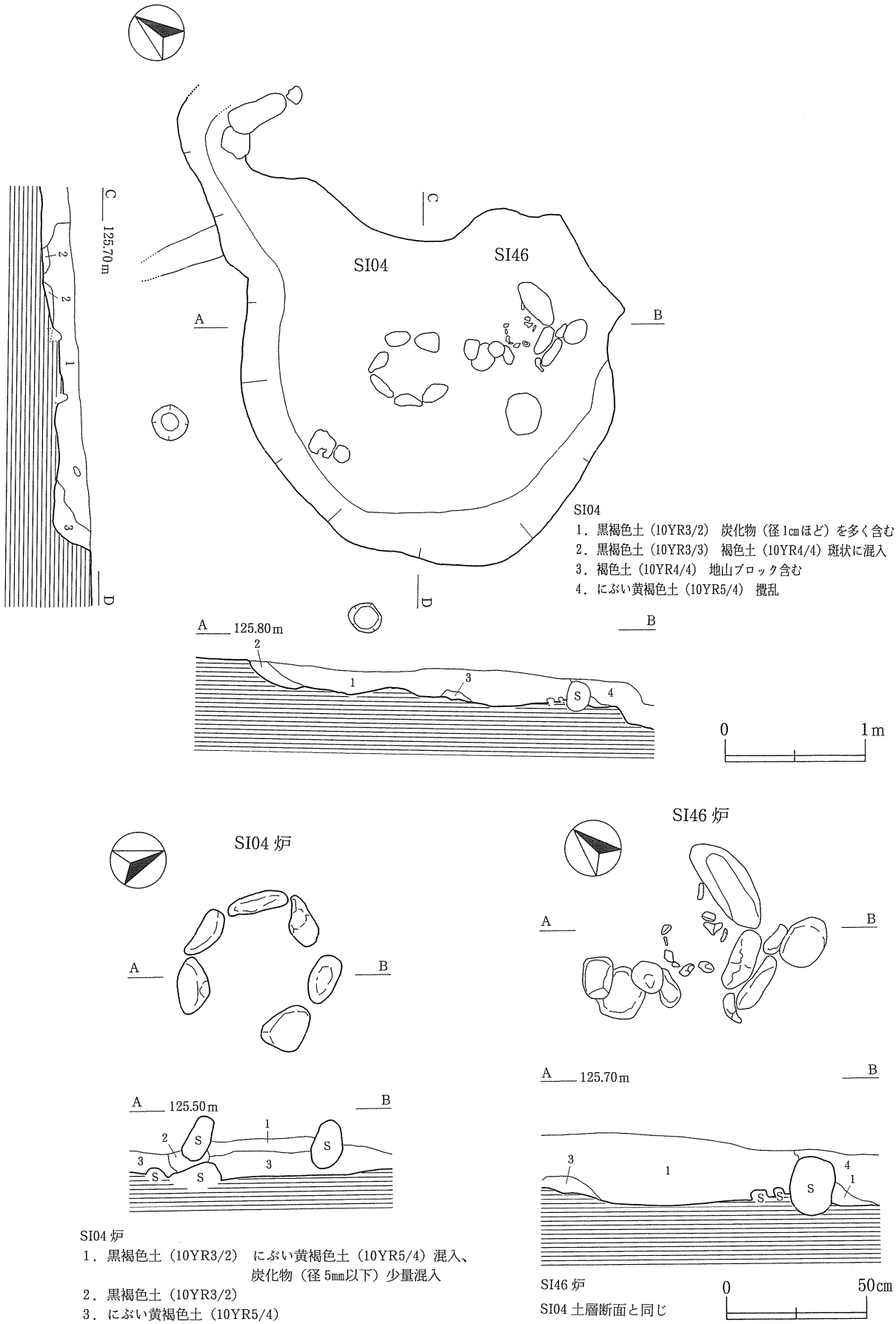
［位　　置］ LK37東部に位置する。

［確　　認］ SI04竪穴住居跡の精査中に、同住居跡東側の床面よりさらに低い面で確認した。石囲炉状の配石遺構の内側に土器が弧状に埋土に刺さった状態で検出したため、住居跡と判断した。

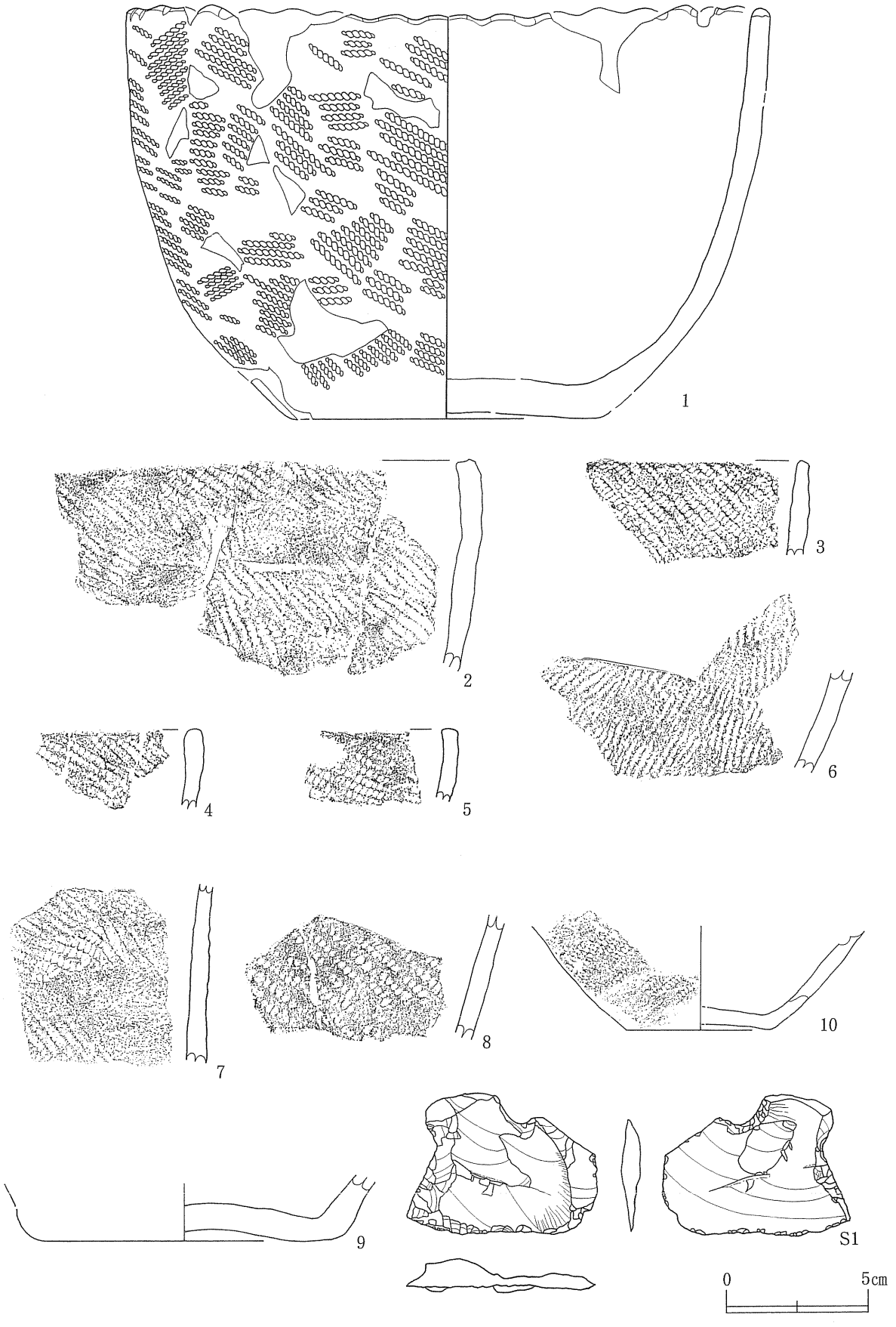
［重　　複］ SI04竪穴住居跡と重複する。SI04竪穴住居跡がほぼ同じ場所に構築されたと考えられるので、SI46竪穴住居跡が旧い。

［平 面 形］ SI04竪穴住居跡によってほとんどが壊されていて、住居跡のプランは確認されなかった。

［壁・床面］ いずれも不明である。



第７図　SI04・46 竪穴住居跡



第８図　SI04 竪穴住居跡出土遺物

[　炉　] 北西側に開く「コ」の字形の石組の内側には土器が埋設されている。炉としては一部分しか検出されていないが、抜き取った礫の痕跡からかつては全体が複数に区画されていたと判断される。石囲炉の中央に縄文時代中期末葉の大木10式土器が据えられていることを考慮すると、複式炉であった可能性がある。

[柱　穴] 検出されなかった。

[出土遺物] 土器片が弧状にめぐるように埋土に刺さった状態で出土した。これらはSI04竪穴住居跡の埋土より出土した土器片、および遺構外出土の土器片と接合する。11がそれで深鉢形土器の胴部である。沈線によって楕円文が区画され、その中にLR縄文が充填される。炉の一部として使用されていたと思われ、外面にはリング状の煮こぼれが付着する。同位置の内面にもリング状に熱をうけた痕跡がある。

SI05竪穴住居跡（第9・10・11図、図版2・3・11）

[位　置] LJ38・LK38に位置する。

[確　認] 漸移層～地山面で、本遺構西側部分のプランを確認した。

[重　複] 本遺構東壁に近いところからは石囲炉が検出された。これは先に構築された別の住居（SI43）に伴ったものと考えられる。したがって本遺構は、SI43竪穴住居跡より新しい。また、SI04竪穴住居跡と近接しているが、切り合い関係の有無は不明である。

[平面形] 東側が倒木痕により壊されているが、直径約3mのほぼ円形を呈するとみられる。

[壁・床面] 確認面から床面までの深さは0.2mほどで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は堅くしまっている。また、炉の西側の床面には少量の褐色土が堅くマウンド状に堆積していた。その他、本遺構の住居中央南側からは、SI04竪穴住居跡の北壁からのびる、床面より一段低い面が検出された。

[　炉　] 中央部に土器の設置された石囲炉（炉A）がある。直径0.6mほどの環状に大小さまざまな石を9個配し、そのほぼ中央に土器を埋設している。また炉Aの北東約0.5m離れたところに土器埋設炉（炉B）がある。A・Bの炉埋設土器は、ともに大洞BC式期前後の粗製土器と考えられるので、2つの炉は同時期に存在していた可能性がある。

[柱　穴] 柱穴は検出されなかった。

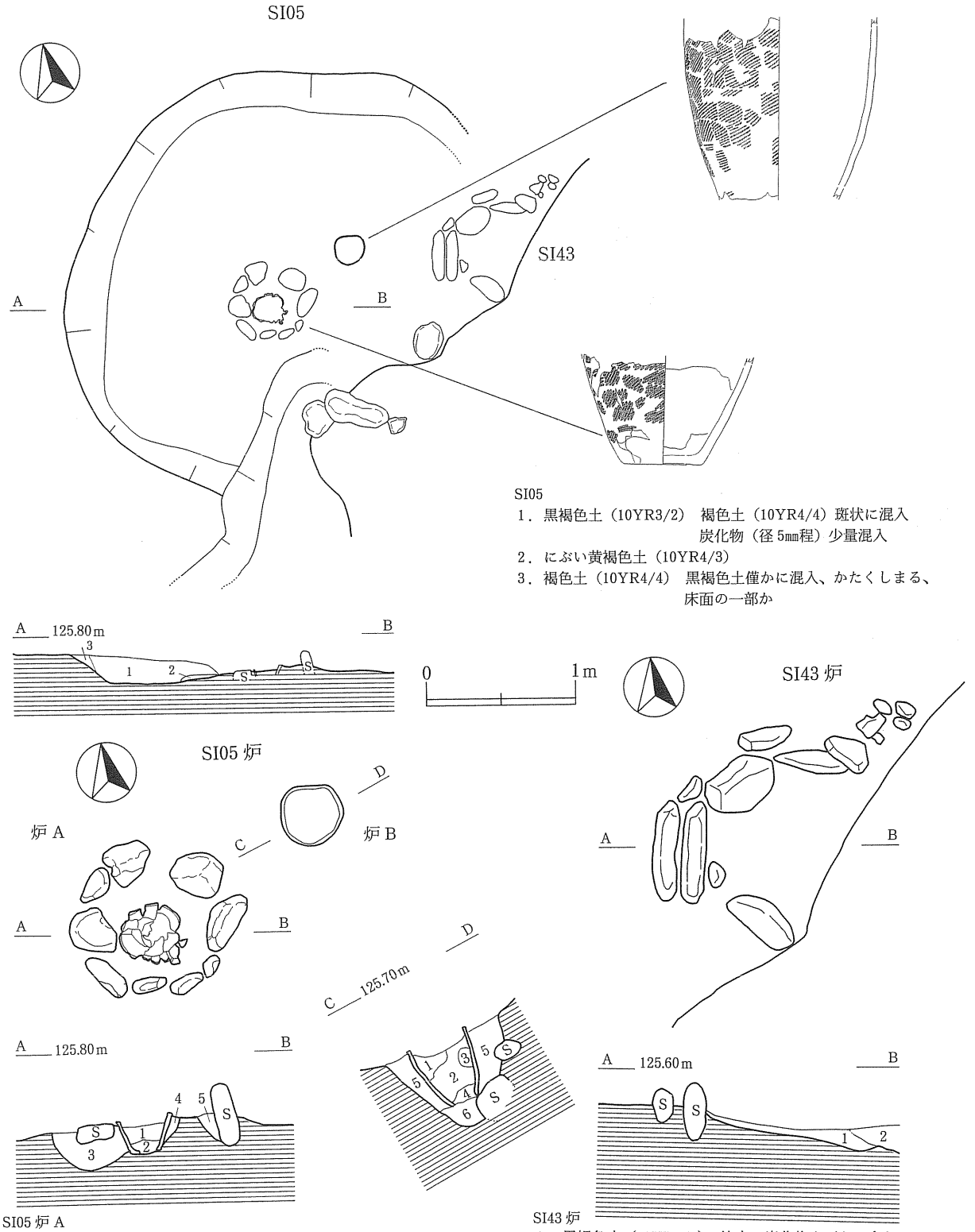
[出土遺物] 12は炉Aに埋設されていた深鉢形土器である。底部から胴部にかけて残存し、口縁部を欠く。全面にLR縄文が施され、内部に熱をうけた痕跡を残す。13は炉Bの埋設土器である。深鉢形土器で、口縁部と底部がない状態で埋設されていた。L原体の無節縄文が施されている。14・15は同一個体で、深鉢形土器の口縁部と胴部である。L原体の無節縄文が施され、外面には多量の煤が付着している。16は深鉢形土器の胴部、17は鉢形土器の口縁部で、大洞BC式に属する。18は大型の深鉢形土器の底部である。

SI43竪穴住居跡炉（第9・11図、図版3）

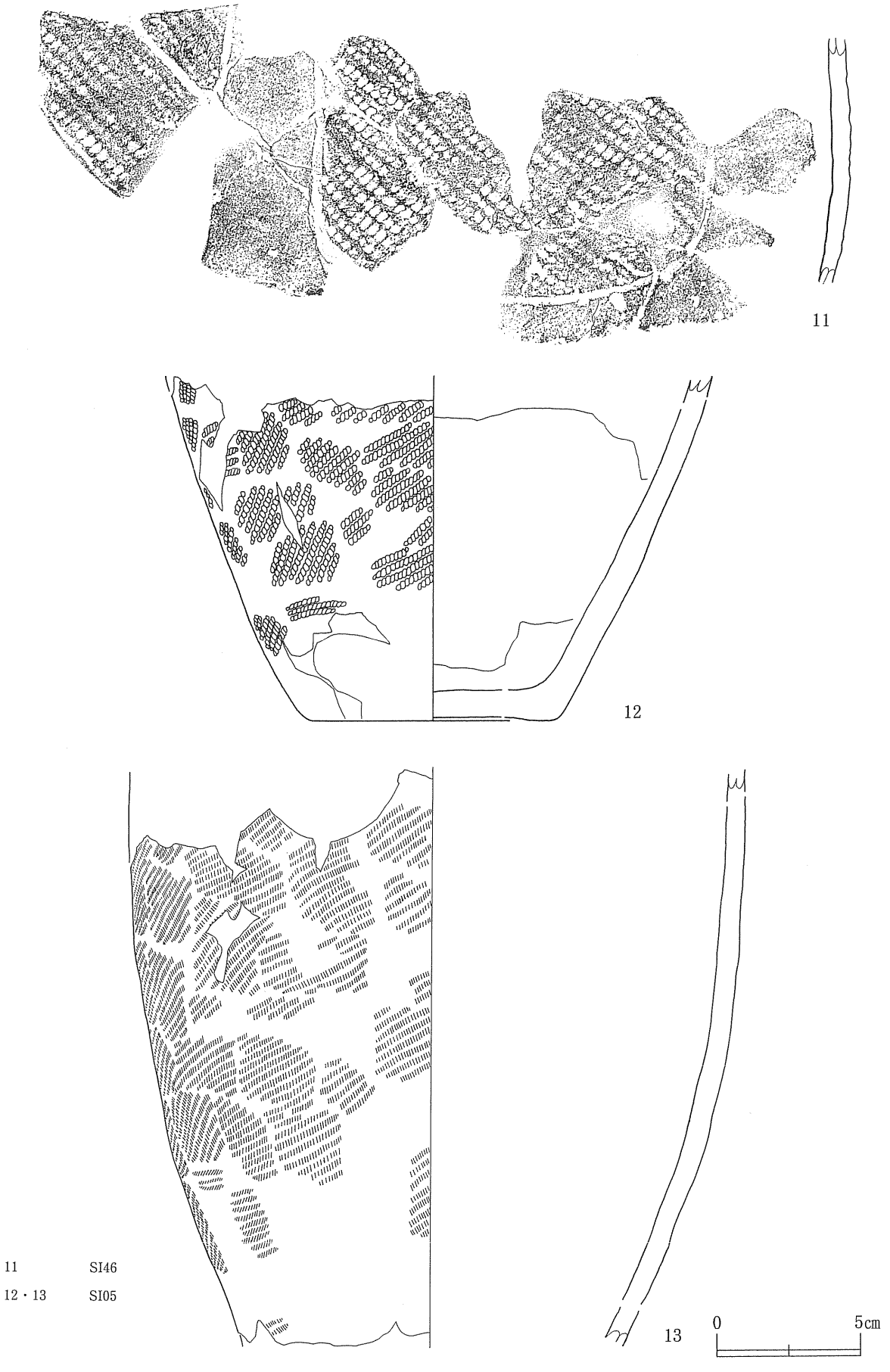
[位　置] LJ38のLK側（西部）に位置する。

[確　認] SI05竪穴住居跡の東側から検出された。

[重　複] SI05竪穴住居跡と重複する。残された炉の形状から、SI05竪穴住居跡より旧い住居跡と考えられる。



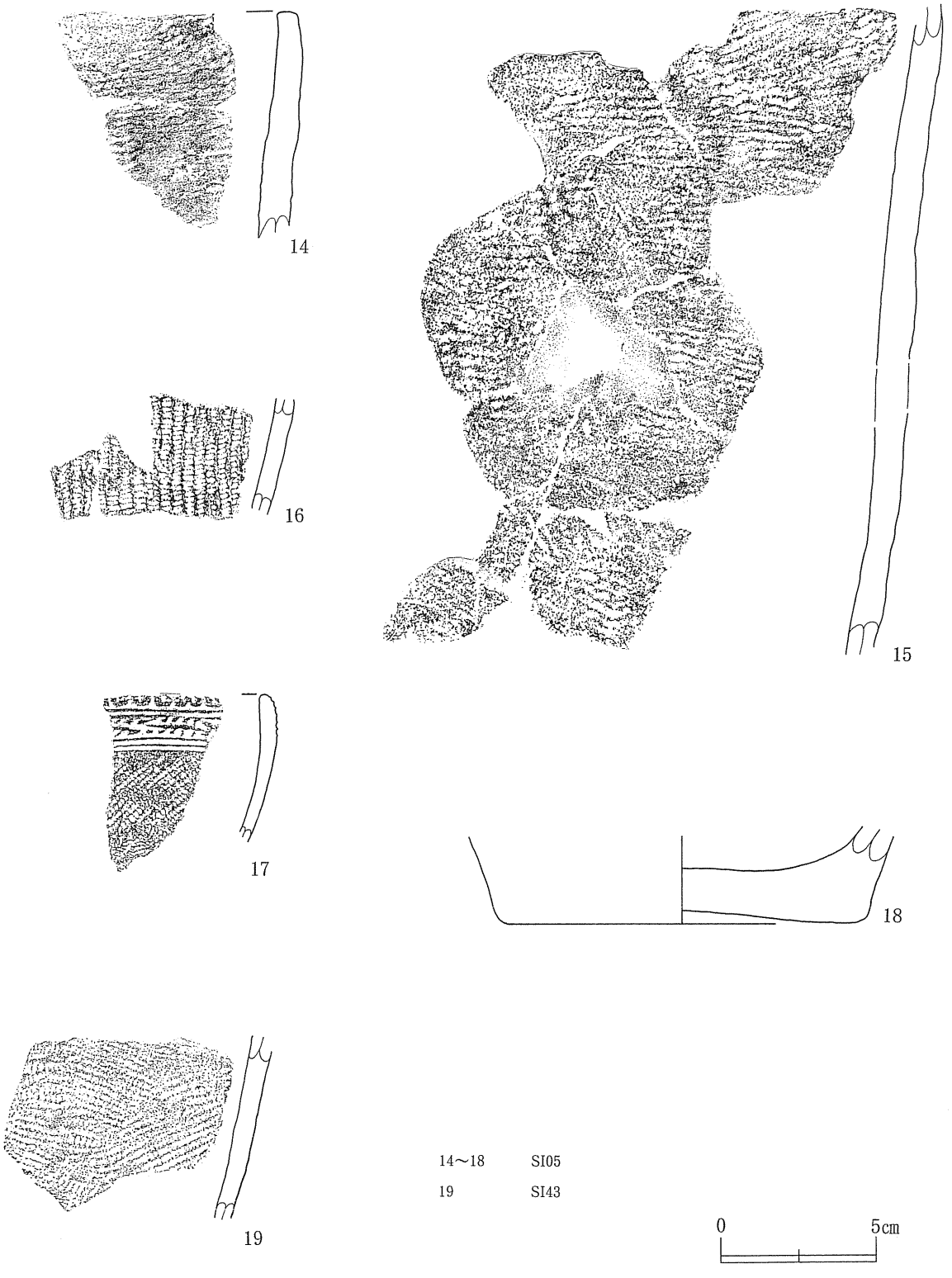
第９図　SI05・43 竪穴住居跡



11　　SI46

12・13　　SI05

第 10 図　SI46・05 竪穴住居跡出土遺物



第11図　SI05・43竪穴住居跡出土遺物

［平 面 形］　プランは確認されなかった。

［壁・床面］　いずれも不明である。

［　炉　］　西側に2個の礫を立て、その両側に礫を「コ」の字形に配するが、東側は倒木痕によって壊されている。形状からみて複式炉と考えられる。

［出土遺物］　19の深鉢形土器の胴部が出土した。外面には煤状炭化物が付着している。

SI41 竪穴住居跡（第12・13図、図版4・12）

［位　　置］　LK39グリッドに位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［重　　複］　北側の一部でSI40竪穴住居跡と切り合うが、新旧関係はつかめなかった。

［平 面 形］　不整円形である。規模は南北3.3m、東西3.2mほどで、プランの確認された4軒の竪穴住居跡ではもっとも大きい。

［壁・床面］　確認面から床面までの深さは0.2m前後である。壁は緩やかに外傾して立ち上がるが、東側は地山面まで削平をうけているので確認できなかった。床面はほぼ平らである。住居床面中央部に、径1mほどの浅い掘り込みが検出された。埋土中には炭化物の混入がみられるが、焼土はみられなかった。その他人為的に置かれたものと考えられる縄文土器底部および拳大の礫が数個出土した。この掘り込みは、堆積土の状態から本住居に伴うものとみられる。

また本遺構北寄りの地点からは、確認面より数cm上で大型の深鉢形土器が壊れた状態で出土した。これは住居跡の窪地に廃棄されたものと考えられる。

［炉・柱穴］　炉・柱穴は検出されなかった。

［出土遺物］　確認面より上で縄文時代後期後葉のものとみられる深鉢形土器が出土した。20がそれで、砲弾状の器形を呈し、推定口径38cm、器高45cm、底径10.5cmを測る。口縁部から胴部にかけて1/2ほど欠損している。外面全面には幅の狭いヘラ状工具で条線状に縦位に、内面は口縁部近くだけ横ナデが施されている。また外面の口縁から下へ22cmぐらいまでの部分と、内面の底部から3cmほど上から6cmほどの幅で煤状炭化物が付着している。炉の埋設土器として使用されていた可能性が高い。21～25はいずれも深鉢形土器の胴部、26は底部である。

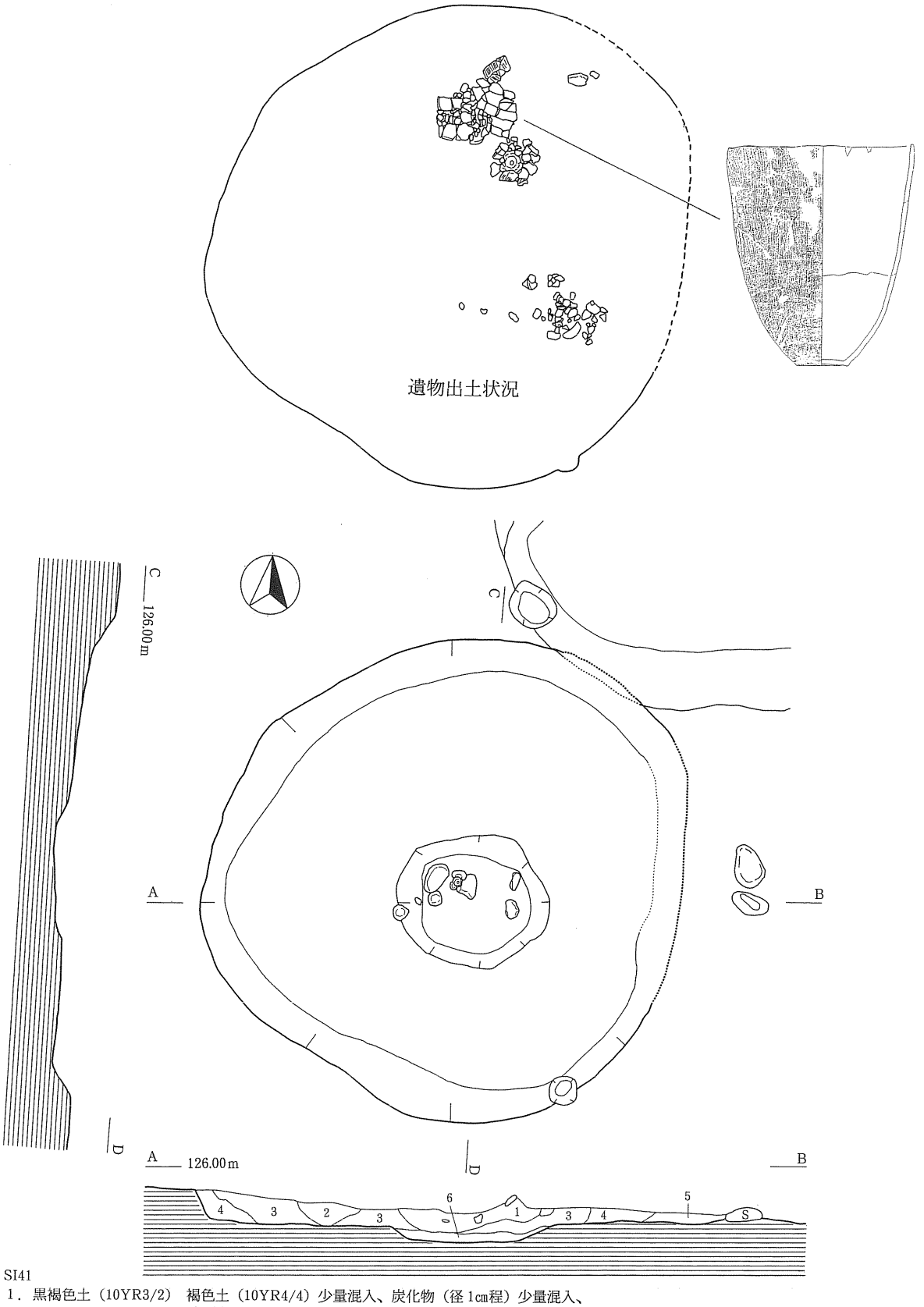
SI40 竪穴住居跡（第14・15・16図、図版4・12・13）

［位　　置］　LK40グリッド杭を中心に位置し、範囲はLJ39・40、LK39・40の4グリッドへ及んでいる。

［確　　認］　地山面で確認した。

［重　　複］　北東側の壁に接する形で、複式炉と考えられる炉の一部が検出された。堆積土の状態、炉と床面のレベル差などを考えると、これは先に構築された別の住居（SI45）に伴うものとみられ、本遺構はこれより新しいといえる。また南側ではSI41と切り合うが新旧関係はつかめなかった。

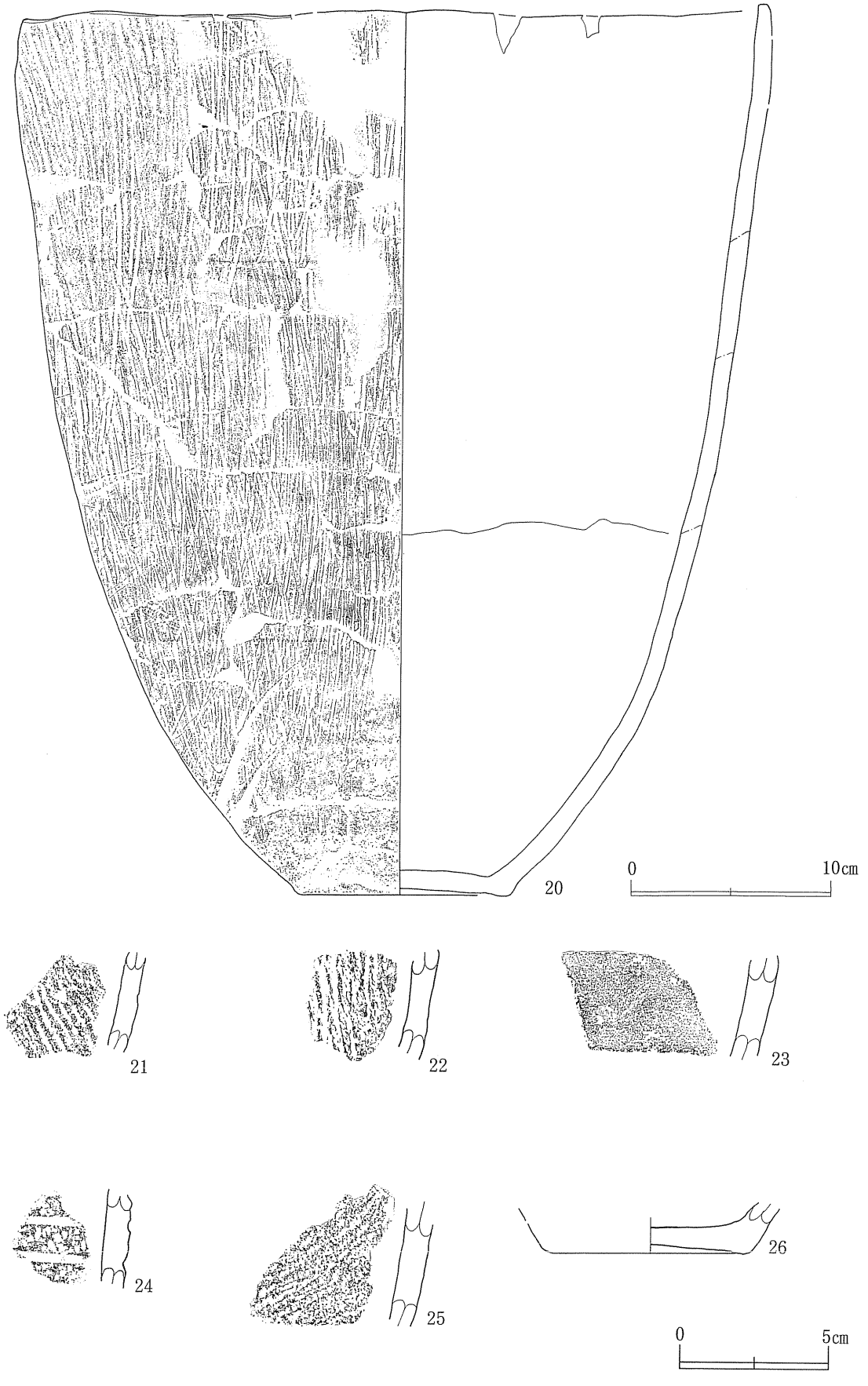
［平 面 形］　不整円形をなし、規模は、北東―南西で2.9m、北西―南東で2.4mほどである。東側は地山面まで削平をうけている。



SI41
1．黒褐色土（10YR3/2）　褐色土（10YR4/4）少量混入、炭化物（径1㎝程）少量混入、
　　礫（拳大前後）多量混入
2．暗褐色土（10YR3/3）　細砂を僅かに含む、礫（拳大前後）多く含む
3．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　細砂を僅かに含む
4．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　褐色土（10YR4/4）多く混入
5．にぶい黄褐色土（10YR5/4）　暗褐色土（10YR3/3）混入、炭化物（径5㎜程）少量含む
6．にぶい黄褐色土（10YR5/4）　漸移層

0　1m

第12図　SI41 竪穴住居跡



第 13 図　SI41 竪穴住居跡出土遺物

［壁・床面］　確認面から床面までの深さは0.5m程度である。プランの確認された4軒の竪穴住居跡ではもっとも深い。床面は竪穴の壁に向かって緩く傾斜している。

また、西側では壁上面から北側に向かってのびる浅い掘り込みを確認した。住居跡の可能性もあるが、炉・柱穴などは検出できず、決め手に欠ける。

［炉・柱穴］　炉・柱穴は検出されなかった。

［出土遺物］　27は西側床面から出土した深鉢形土器である。口縁部と底部しか出土しなかったが図上復元をした。器形は口辺が短く内反し頸部がくびれ胴部がやや膨らむ形と思われる。口縁部を除いた器面全体に刺突が施され、胴部の上部に沈線が認められる。また底部には木葉痕がある。28は深鉢形土器の口縁部で、条線または櫛目状の文様が縦位に施されている。29～34は深鉢形土器の胴部である。34はLR縄文を地文としてS字状の沈線で区画した文様帯をもつ。この中で32～34は、文様を区画する沈線が細く、磨消縄文の手法が認められるものもあるので、大木10式期新段階に並行もしくはそれに後続する時期の土器と考えられる。35は深鉢形の底部から胴部にかけての土器で、LR縄文が施されている。36は深鉢形土器の胴部から底部にかけての土器。37は把手であろう。断面形は棒状で、口縁部付近に付されていたと思われる。把手部分を丁寧になでており、外縁部分にはLR縄文が施されている。石器では凹石（S2）が1点出土した。形状は円形に近く凹みは表裏両面に認められる。凹みはV字状でそれほど深くない。また長軸方向の両端に敲打痕をもつ。

SI45 竪穴住居跡炉（第14図、図版5）

［位　　置］　LJ40グリッドに位置する。

［確　　認］　SI40竪穴住居跡の北東壁に隣接した石組で確認した。

［重　　複］　確認された石組は南西部を欠いている。これはSI40竪穴住居跡の床面のレベルが本遺構のレベルより低いことより、SI40の構築に伴うものと考えられる。したがって本遺構がSI40より旧いといえる。

［平 面 形］　プランは確認できなかった。

［壁・床面］　いずれも不明である。

［　炉　］　礫を数個敷き、その周辺四方に礫を立てて囲っている。南東部を欠いており、現状では「コ」の字形を呈している。形状からは、敷石部を持つ複式炉の一部ではないかと考えられる。

［柱　　穴］　検出されなかった。

SI09 竪穴住居跡炉（第14・16図、図版5・13）

［位　　置］　LJ47・48グリッドの48ライン上に位置し、前記7軒からは30m離れている。

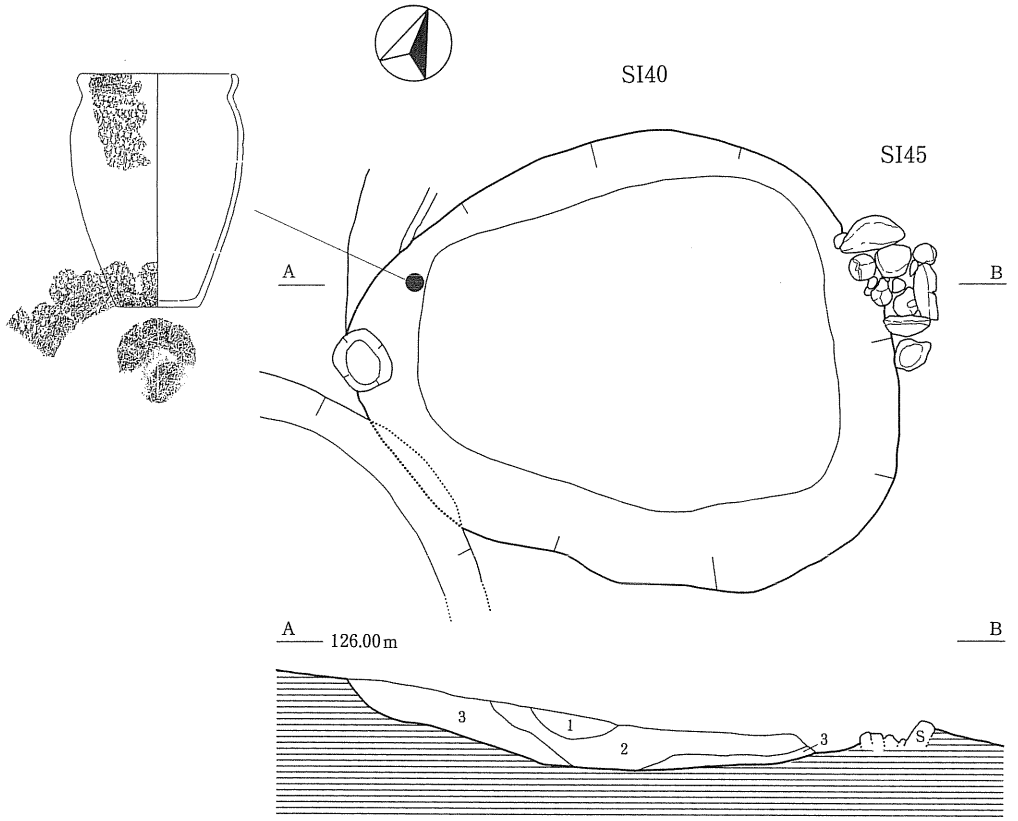
［確　　認］　地山面にて石囲炉を検出した。

［平 面 形］　石囲炉の検出面のレベルから竪穴住居跡と考えたが、プランは確認できなかった。

［床　　面］　石囲炉を検出したレベルでは、特に堅くしまる部分はみられなかった。

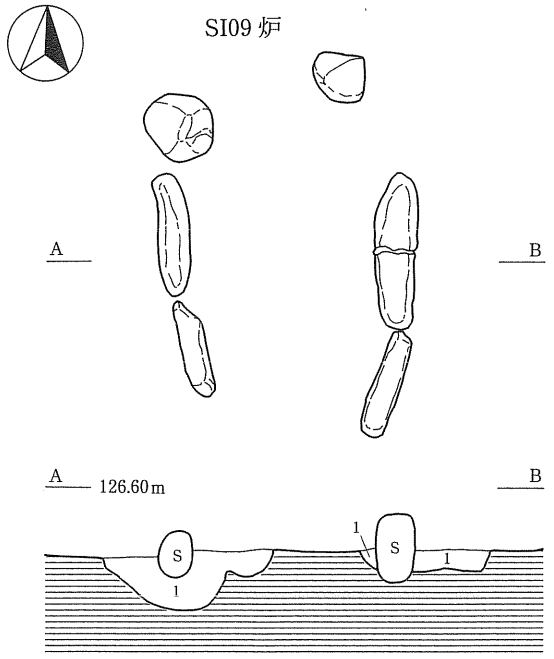
［　炉　］　石囲炉を構成する6個の礫のうち、4個は細長い棒状の礫で、それらの北側にあたる2個の礫には焼けた痕がみられる。また、炉周辺の一部ではわずかながら焼土を確認した。

［柱　　穴］　検出されなかった。



SI40
1．黒褐色土（10YR3/2）　炭化物（径 5㎜程）含む
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　暗褐色土（10YR3/3）多く混入、炭化物（径 5㎜程）少量含む
3．褐色土（10YR4/4）　にぶい黄褐色土（10YR4/3）僅かに混入

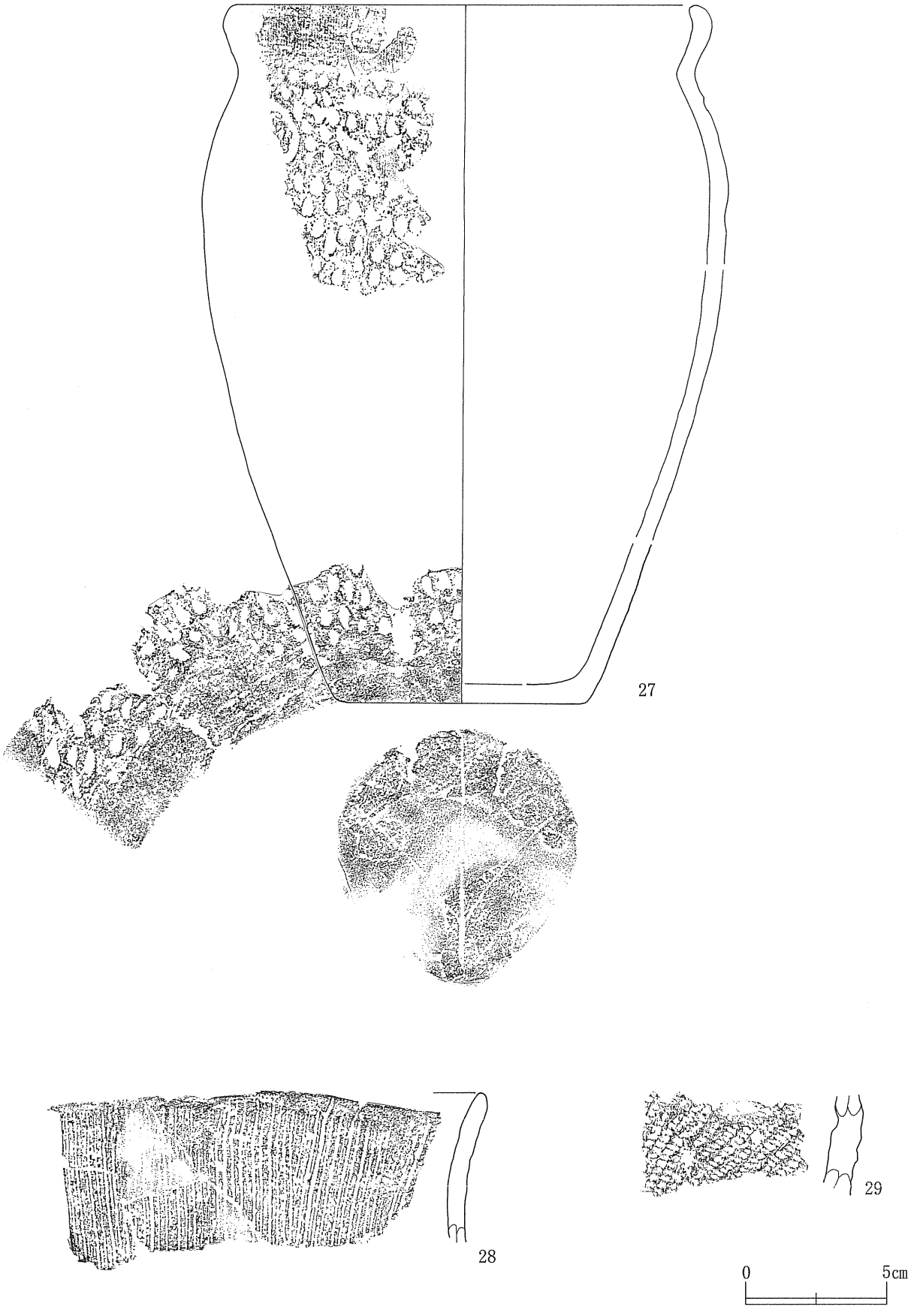
0　1m



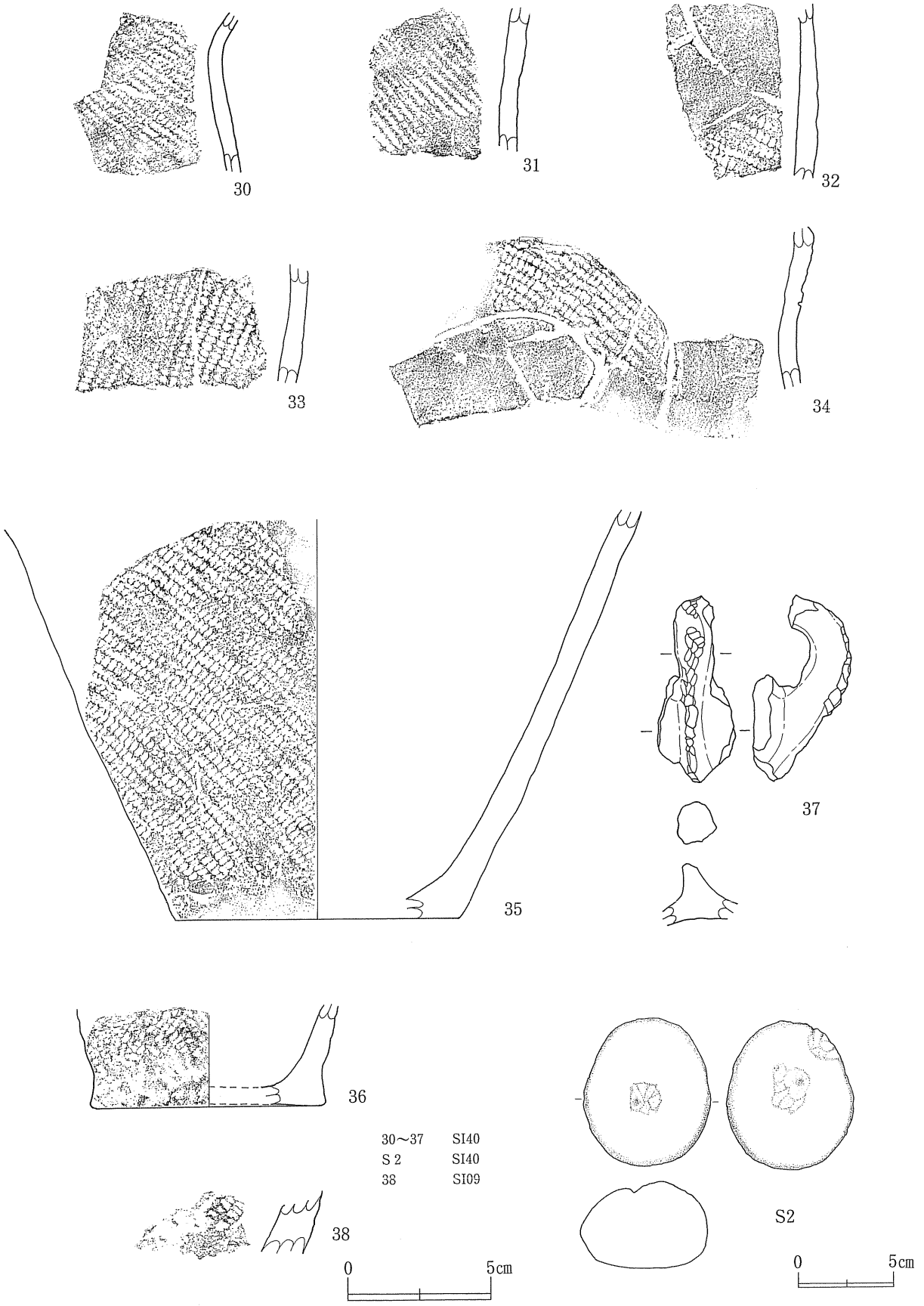
SI09 炉
1．暗褐色土（10YR3/3）

0　50㎝

第 14 図　SI40・45・09 竪穴住居跡



第 15 図　SI40 竪穴住居跡出土遺物



第 16 図　SI40・09 竪穴住居跡出土遺物

［出土遺物］　38が検出された土器で、深鉢形土器の底部に近い部分である。

(2) 土坑

土坑は6基検出した。そのうちSK17をのぞく5基は、段丘南東端部の竪穴住居跡が集中している箇所の周辺に分布している。

SK17土坑（第17図、図版5）

［位　　置］　LK45グリッド南西寄りに位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［平 面 形］　不整円形をなし、最大径1.2m強を測る。

［壁・床面］　確認面からの深さは0.37～0.39mで、緩やかに立ち上がる。直径0.4mほどの範囲で平坦な底面がある。

［出土遺物］　底面より約0.07m上位の埋土から厚さ3cmほど、大きさ15×26cmほどの板状の自然礫（砂岩）が出土した。この礫は非常にもろくなっていた。土器・石器は出土していない。時期は不明である。

SK35土坑（第17図、図版6）

［位　　置］　LK40グリッドに位置する。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。

［平 面 形］　不整円形をなし、最大径は約0.8mである。

［壁・床面］　確認面からの深さは約0.35mで、北側の壁はややオーバーハング気味である。

［出土遺物］　出土しなかった。

SK38土坑（第17・18図、図版6・14）

［位　　置］　LK40・LJ40の両グリッドにまたがって位置する。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。

［平 面 形］　ほぼ円形を呈し、直径は1.3m弱である。

［壁・床面］　壁・床面とも、木の根などの攪乱により、はっきりしない。

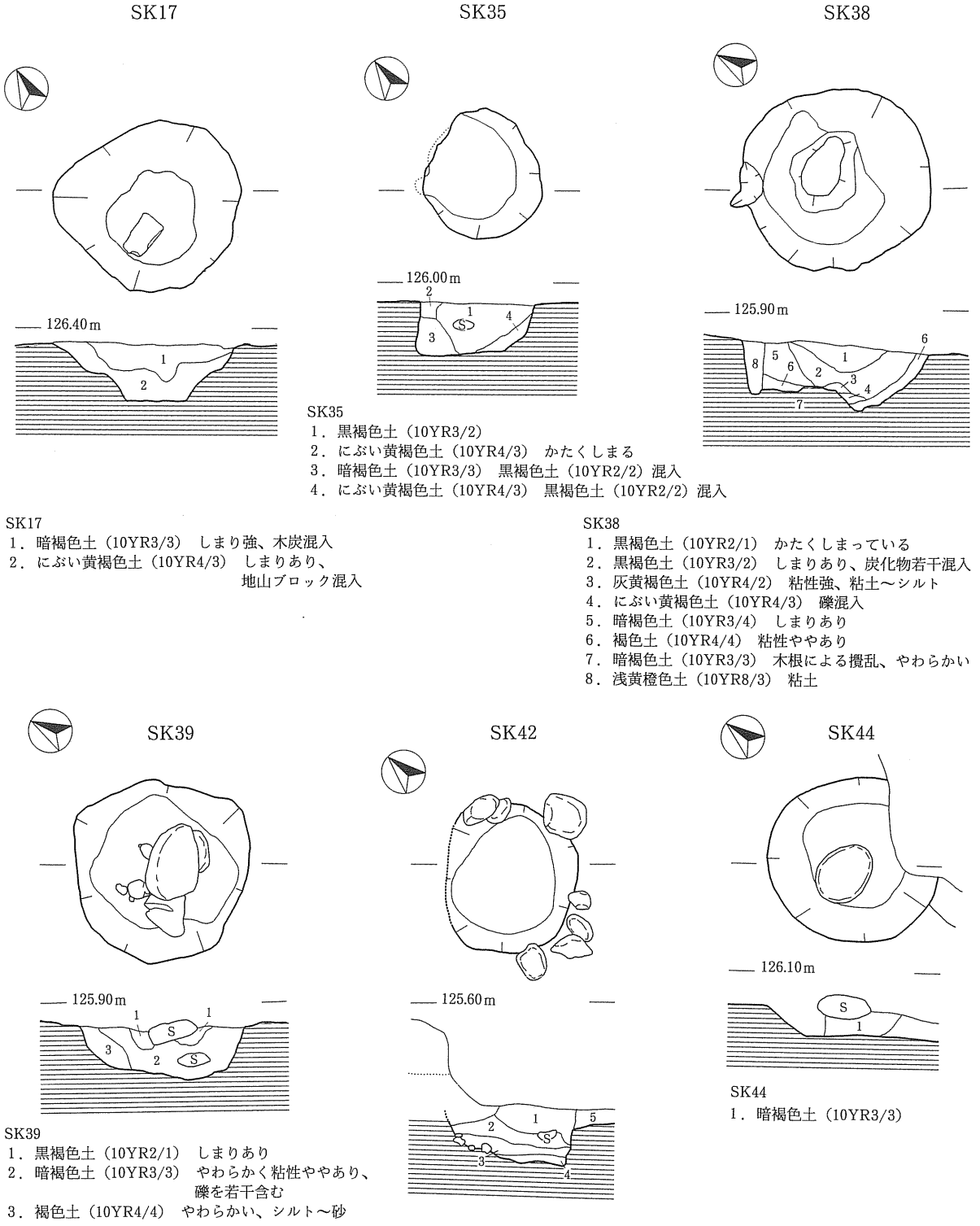
［そ の 他］　直径6cmほどの円礫および12×8cmほどの楕円形をした偏平な礫が、底面中央のやや東寄りに2個並んでいる。その西側底面には、0.4×0.8mほどの範囲で白色粘土が広がっている。

［出土遺物］　縄文土器片1点、折損した石箆1点、チップ1点が出土した。土器片は摩耗がはげしく、時期を判別することは難しい。S3の石箆は、ほぼ中央から折損している。基部側がSK38内から、刃部側が遺構外から出土し、接合した。そのため基部側が灰白色（5Y7/1）、刃部側が灰色（5Y6/1）と色調が変化している。横長の剥片を素材としており、打点の向きと同方向に刃部が設けられている。刃部は緩い弧を描き、背面のみ二次加工が施されている。また、打点の向きとほぼ直角に両側縁があり、背面、腹面ともに二次加工がなされている。石質は頁岩である。

SK39土坑（第17・18図、図版6・14）

［位　　置］　LK41グリッドに位置し、南端部がLK40グリッドに若干はいる。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。



SK35
1．黒褐色土（10YR3/2）
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　かたくしまる
3．暗褐色土（10YR3/3）　黒褐色土（10YR2/2）混入
4．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　黒褐色土（10YR2/2）混入

SK17
1．暗褐色土（10YR3/3）　しまり強、木炭混入
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりあり、
地山ブロック混入

SK38
1．黒褐色土（10YR2/1）　かたくしまっている
2．黒褐色土（10YR3/2）　しまりあり、炭化物若干混入
3．灰黄褐色土（10YR4/2）　粘性強、粘土～シルト
4．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　礫混入
5．暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり
6．褐色土（10YR4/4）　粘性ややあり
7．暗褐色土（10YR3/3）　木根による攪乱、やわらかい
8．浅黄橙色土（10YR8/3）　粘土

SK39
1．黒褐色土（10YR2/1）　しまりあり
2．暗褐色土（10YR3/3）　やわらかく粘性ややあり、
礫を若干含む
3．褐色土（10YR4/4）　やわらかい、シルト～砂

SK42
1．黒褐色土（10YR3/1）　炭化物（径5㎜以下）少量含む
2．灰黄褐色土（10YR4/2）　焼土粒（5YR4/6）少量含む
3．黒褐色土（10YR3/1）　にぶい黄褐色土（10YR5/4）少量混入
4．にぶい黄褐色土（10YR3/4）　黒褐色土僅かに混入、
礫（径5㎝程）少量含む
5．黒褐色土（10YR3/1）　基本土層Ⅳ層

SK44
1．暗褐色土（10YR3/3）

第17図　SK17・35・38・39・42・44土坑

［平 面 形］　径1.2mほどの円に近い形をしている。

［壁・床面］　確認面からの深さは0.3mほどで、鍋底状を呈する。

［そ の 他］　確認面上に30×50cmほどの円礫があり、また埋土中からは、大きさがそれぞれ異なる円みを帯びた礫4個と、板状の礫1個が出土している。

［出土遺物］　縄文土器片7点および凹石1点・剥片1点である。時期は判然としない。S4は大きさが10.0×7.1×4.5cmの長円形の凹石である。表裏両面の長軸方向に2個の凹みが並ぶ。凹みはすり鉢状で深い。長軸方向の両端に敲打痕をもつ。

SK42土坑（第17図、図版7）

［位　　置］　LJ37・38グリッドの38ライン上に位置する。

［確　　認］　Ⅳ層面で確認した。

［平 面 形］　西側が倒木痕によって壊されているが、長径約1.1mの楕円形を呈すると考えられる。

［壁・床面］　確認面からの深さ約0.4mである。西側の壁は倒木痕により壊されている。

［そ の 他］　本遺構はⅣ層遺物包含層を切って構築されている。したがって、構築期はⅣ層堆積期か、あるいはそれよりも新しいといえる。

［出土遺物］　微細な縄文土器片が1点、剥片が3点出土した。

SK44土坑（第17図）

［位　　置］　LK40グリッドに位置し、SI40とSK35の間にある。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。検出面で径0.4mほどの礫が確認された。

［平 面 形］　長径1m、短径0.8mほどの楕円形を呈する。

［壁・床面］　深さは0.16mほどで、鍋底状を呈する。

［出土遺物］　出土しなかった。

(3) 配石遺構

SQ10配石遺構（第18・19図、図版7・13）

［位　　置］　LK45グリッドに位置する。

［確　　認］　漸移層で確認した。

［形　　態］　円礫の上に覆うような形で5個の角礫がまとまってある。礫の下に柱穴状の掘り込みがあり、その深さは0.4～0.5mである。また少し離れたところに2個の礫がある。

［出土遺物］　柱穴状の掘り込みからは39・40の深鉢形土器の胴部破片が出土した。39はRL縄文が施され、40は無文で沈線が2条認められる。その他剥片が検出されている。

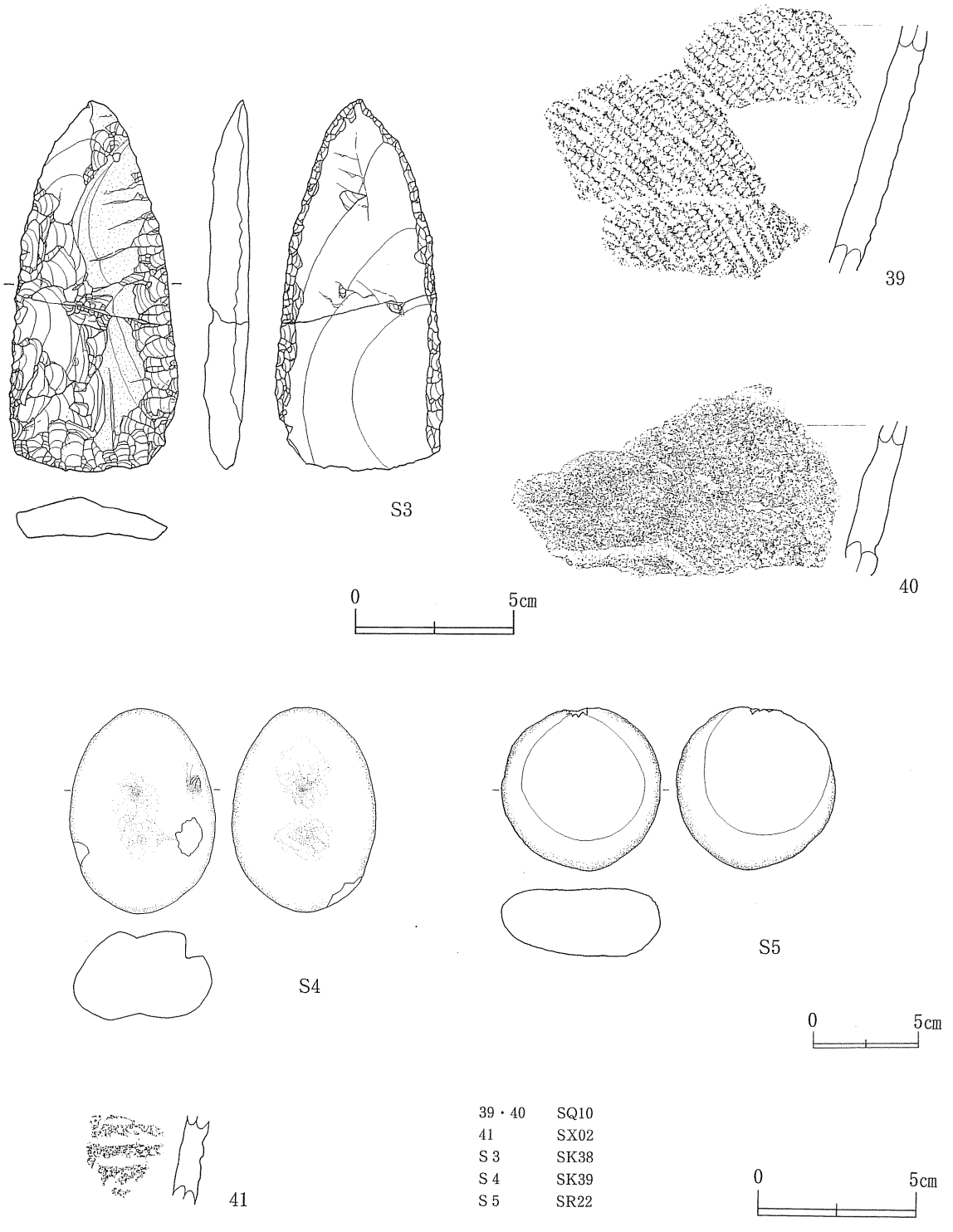
(4) 土器埋設遺構

SR22土器埋設遺構（第18・19・20図、図版7・14）

［位　　置］　LI43グリッドに位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

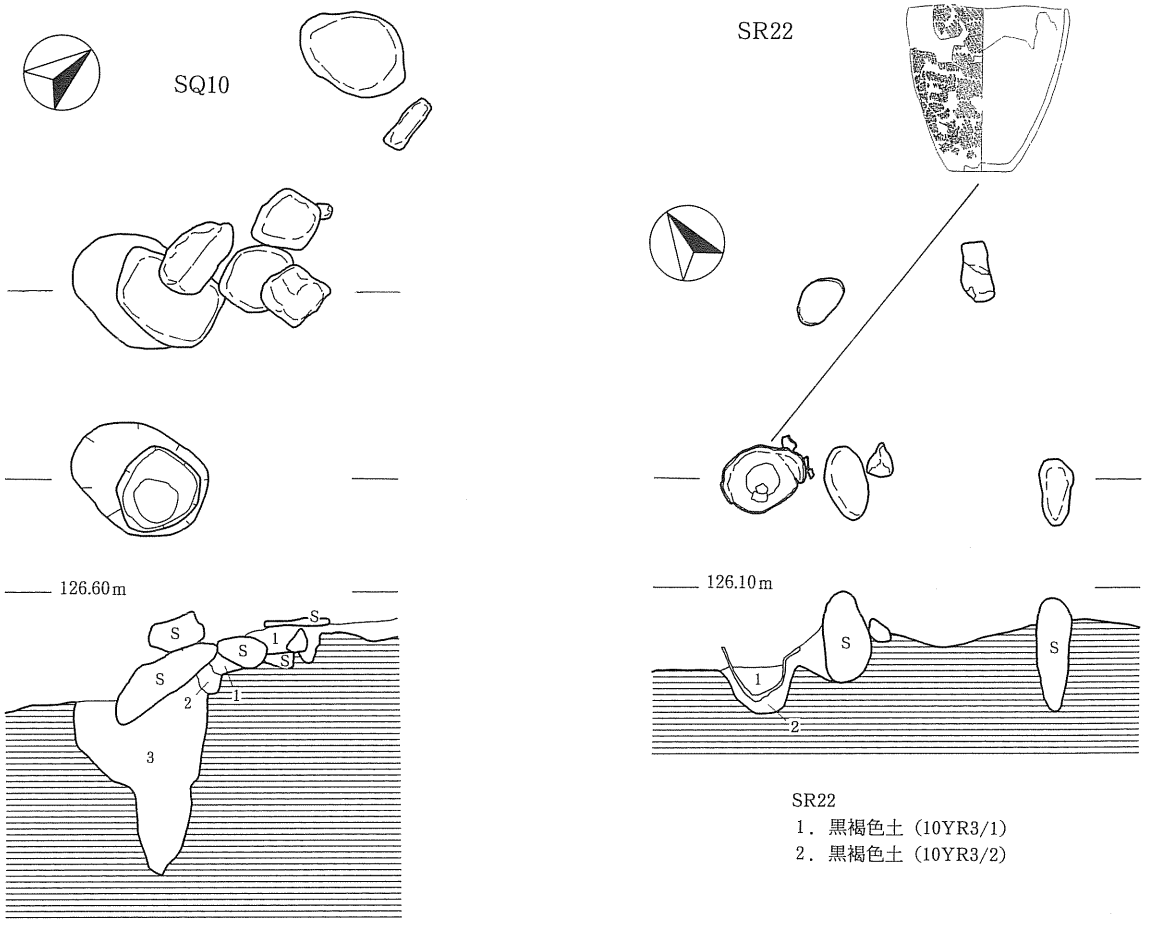
［形　　態］　土器の東南東に隣接して礫（立石）が2個あり、そのうちの1つには火を受けた痕跡がある。土器とこの2個の立石とを結ぶ延長線上にもう1個立石がある。さらにこれらにほぼ並行して2個の別の礫がある。礫や立石の間隔はそれぞれおよそ0.4～0.5mほどである。なお土器中の埋土は黒褐色土である。



第 18 図　SK38・39、SQ10、SR22、SX02 出土遺物

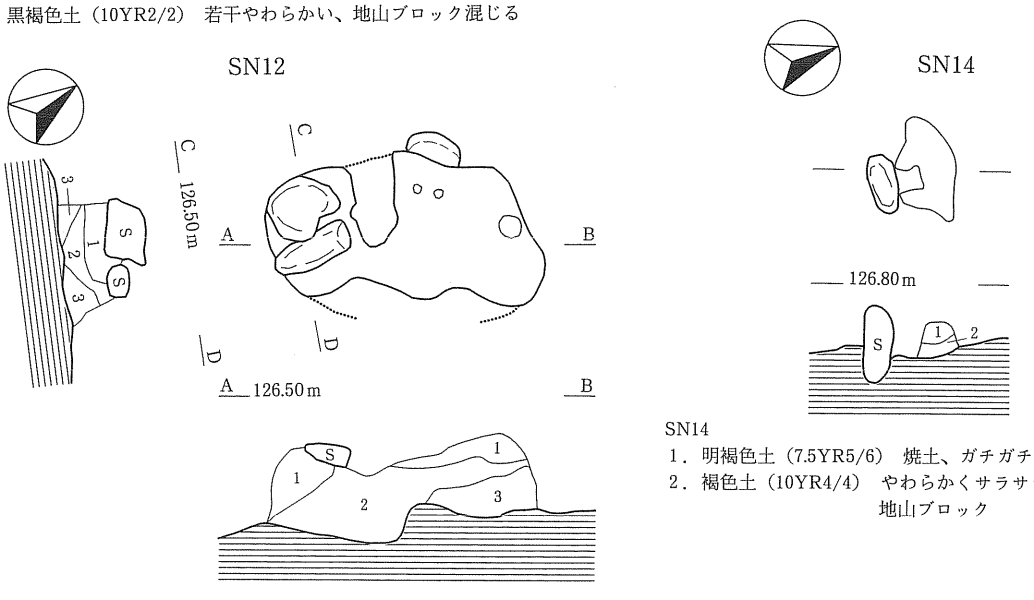
第４表　遺構内出土石器計測表

挿図番号	番号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)
8	S1	ＳＩ０４	石　匙	49.0	64.0	6.5	27.4
16	S2	ＳＩ４０	凹　石	79.0	67.5	46.0	267.3
18	S3	ＳＫ３８	石　箆	120.0	54.0	13.5	83.0
18	S4	ＳＫ３９	凹　石	100.0	70.5	45.0	320.8
18	S5	ＳＲ２２	磨　石	79.5	76.5	34.0	283.3



SR22
1．黒褐色土（10YR3/1）
2．黒褐色土（10YR3/2）

SQ10
1．黒褐色土（10YR3/2）　かたい、褐色土が若干混入、部分的に酸化している
2．黒褐色土（10YR2/3）
3．黒褐色土（10YR2/2）　若干やわらかい、地山ブロック混じる



SN14
1．明褐色土（7.5YR5/6）　焼土、ガチガチにかたい
2．褐色土（10YR4/4）　やわらかくサラサラしている、地山ブロック

SN12
1．赤褐色土（5YR4/6）　焼土、かたくしまっている
2．黒褐色土（10YR2/3）　やわらかく、ボロボロしている
3．暗褐色土（10YR3/4）　とてもやわらかい、粘性もなくサラサラしている

0　50cm

第19図　SQ10配石遺構、SR22土器埋設遺構、SN12・14焼土遺構

［出土遺物］　42 は埋設されていた深鉢形土器で口縁部と底部を一部欠いている。RL 縄文が施されている。43 は北西の礫の西側で検出された深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけての 1/4 ほどしか残存しない。口縁部には３条の平行沈線と口唇部には３個の刻目のある B 字形突起が４個付くと予想される。外面には LR 縄文が施され、煤状炭化物が付着している。42・43 はともに大洞 B～BC 式期に属する土器と考えられる。石器では磨石（S5）が１点出土した。形状は直径 7.5㎝のほぼ円形である。両面とも使用されているが、片面の使用頻度が極めて高かったと見え、使用面が平坦になっている。また敲打痕も認められる。

(5) 焼土遺構

SN12 焼土遺構（第 19 図、図版 8）

［位　　置］　LK44 グリッド南西隅、LL44 杭の近くに位置する。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。

［形　　態］　南側に２個の礫があり、その下にも焼土がある。北側に大きく焼土が広がっており、礫のある南側との間は溝状に欠けていた。したがって、何らかの理由で削られているが、かつてはもっと大きく焼土が広がっていたと思われる。北側に大きく広がる焼土には、３カ所ほどの攪乱を受けた円形の窪みがある。また北側の焼土が厚いのに対し、南の欠けた部分に近い方の焼土は薄い。

SN14 焼土遺構（第 19 図、図版 8）

［位　　置］　LH48 グリッドに位置する。

［確　　認］　漸移層～地山面で確認した。

［形　　態］　北側に焼土、南側に立石が並んでいる。プラン確認時は、焼土範囲は立石の横に「C」の字状にみえ、中央の焼土のない部分から焼土範囲の西側にかけては、炭化物粒が広がっていた。したがって中央の焼土のない部分は、何か焼く対象を置いた場所ではないかと考えられる。この際、立石をすぐ南に置いたことになる。焼土部分はよほど火を強く受けたらしく、ガチガチに堅くなっていた。

(6) 性格不明遺構

SX02 性格不明遺構（第 18・21 図、図版 8・13）

［位　　置］　LM36 グリッドに位置する。

［確　　認］　地山面で確認した。

［形　　態］　倒木痕などの攪乱作用により生じた窪地に剥片等を捨てたものではないかと考えられる。遺物は剥片が多く、そのほとんどが１層から出土している。

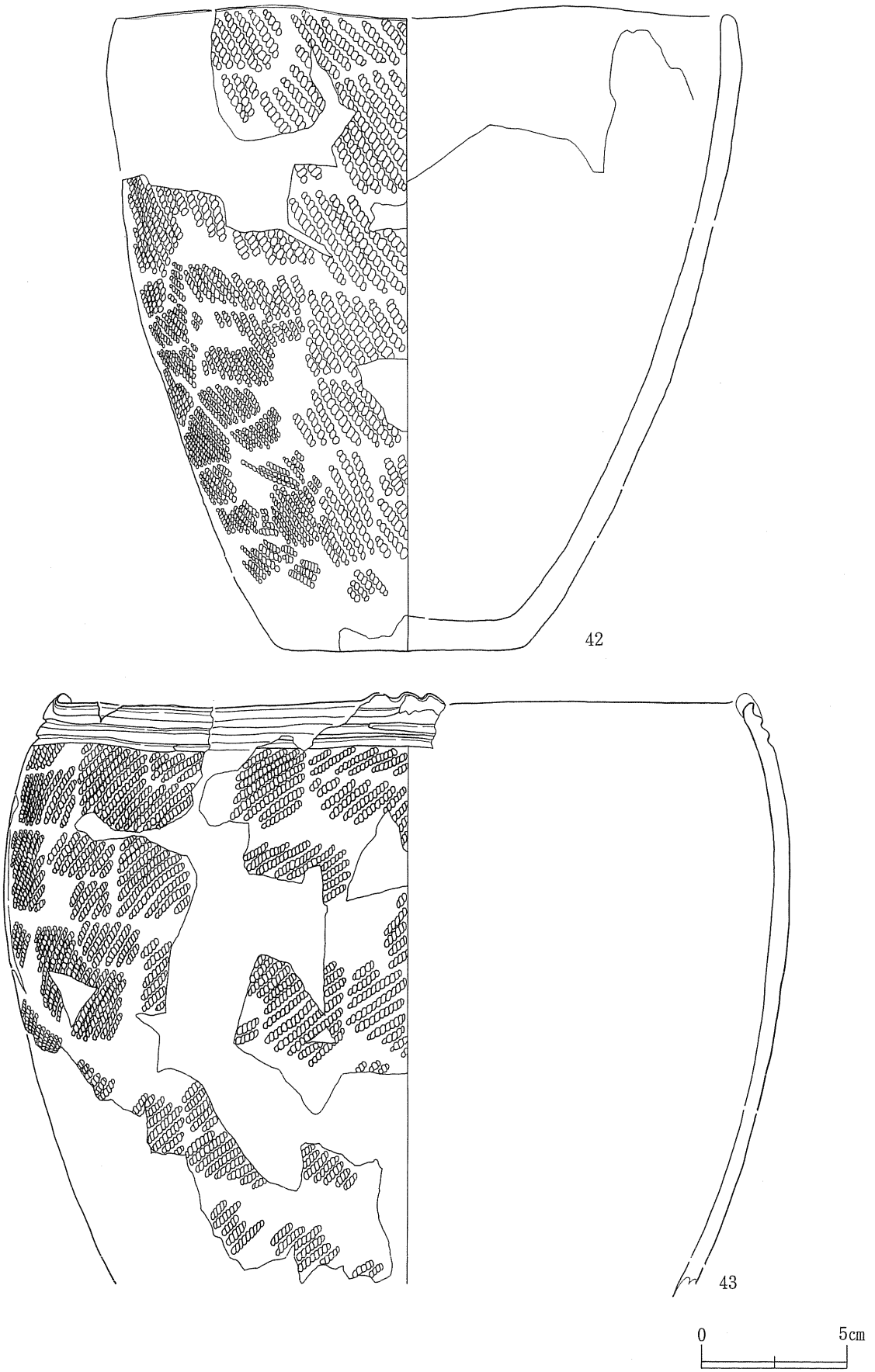
［出土遺物］　41 は土器小片である。縄文が施されているが、摩滅が激しくその原体は不明である。

SX03 性格不明遺構（第 21・22 図、図版 9・14）

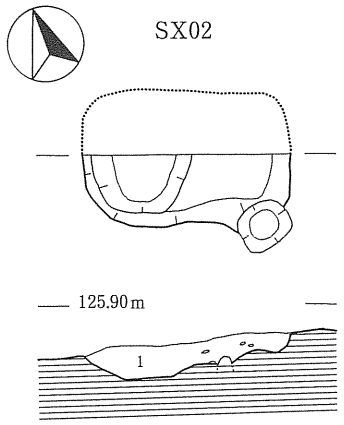
［位　　置］　LH・LI50 に位置し、若干 LH・LI51 にかかる。

［確　　認］　Ⅳ層で確認した。

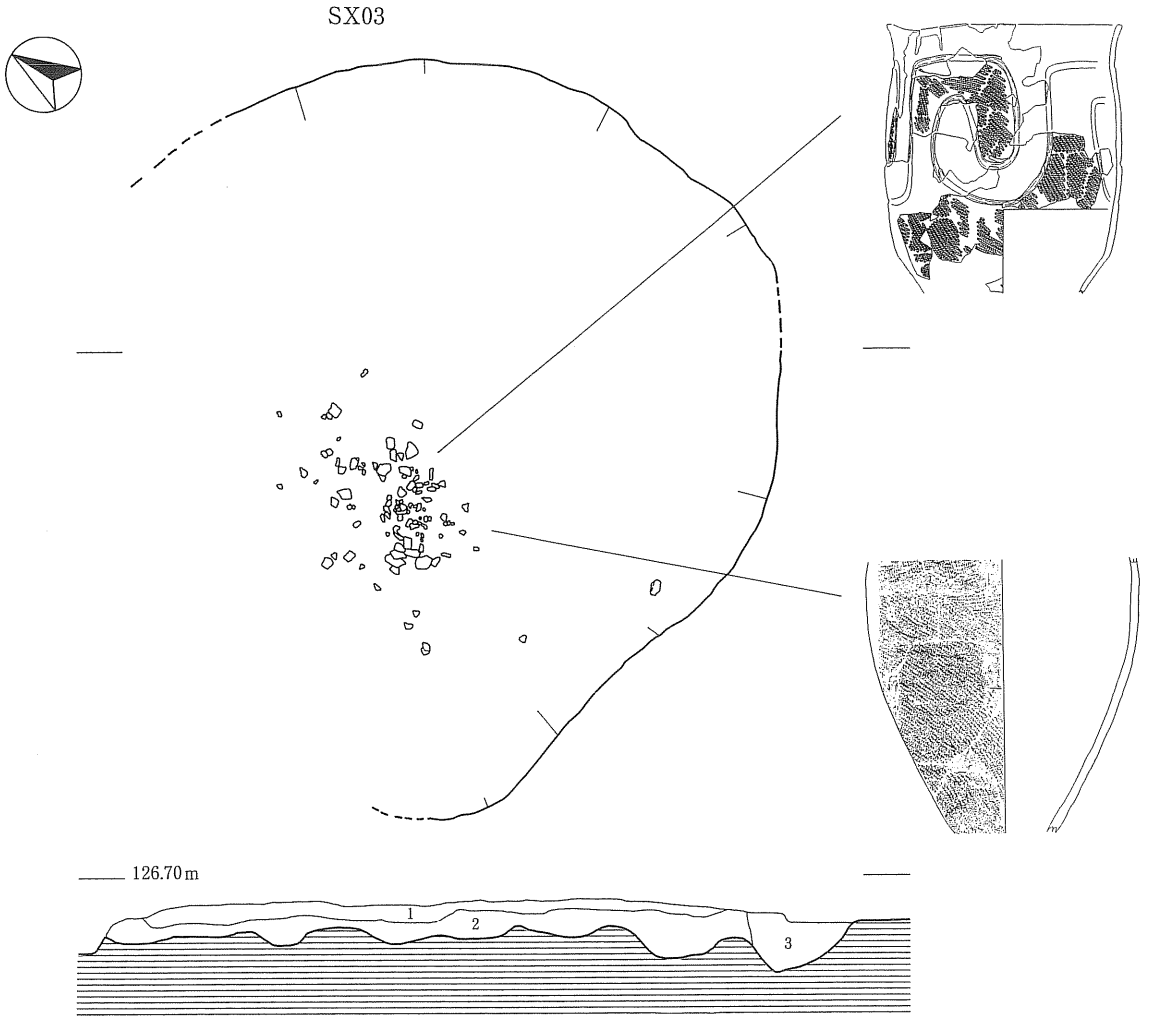
［形　　態］　地山層は皿状の窪みとなっており、その低い箇所に遺物包含層（Ⅳ層）が広がっている。径４ｍほどの不整円形をなし、おもにそのプランの西半分から 110 点を越す土器片が出土した。プラン北端部および西端部は範囲確認調査におけるトレンチで切られており、その



第 20 図　SR22 土器埋設遺構出土遺物



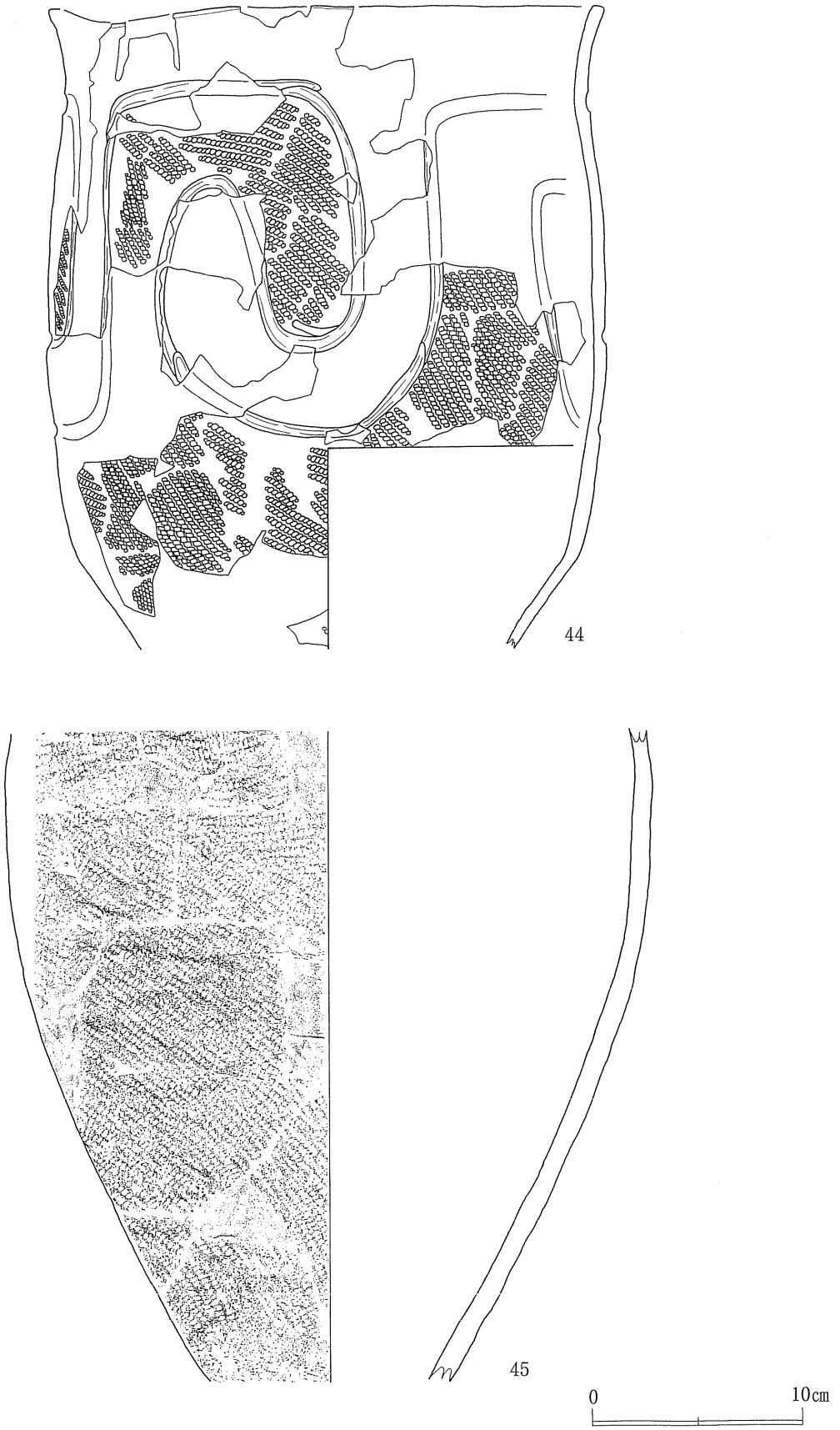
SX02
1．黒褐色土（10YR3/2）　暗褐色土（10YR3/3）少量混入、炭化物（径 5㎜以下）僅かに混入、フレイク・チップを多く含む



SX03
1．黒褐色土（10YR2/1）　遺物を多く含む、周辺部は黒褐色土（10YR2/3）
2．暗褐色土（10YR3/3）　遺物を密に含む、地山ブロック混じる
3．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　攪乱層、しまりなし、遺物なし

0　1m

第 21 図　SX02・03 性格不明遺構



第 22 図　SX03 性格不明遺構出土遺物

広がりは不明である。上位段丘に所在する姫ヶ岱Ｃ遺跡からの流れ込みによるものか、あるいは自然の窪みに土器を捨てたものか、いずれかであろうと考えられる。

［出土遺物］　44 は頸部がわずかにくびれ、胴部下部で急激に内向する深鉢形土器。LR 縄文を地文として、沈線によって波頭状文が描かれている。大木 10 式土器に属する土器である。45 は口縁部・底部を欠いた深鉢形土器で、LR 縄文が施されている。

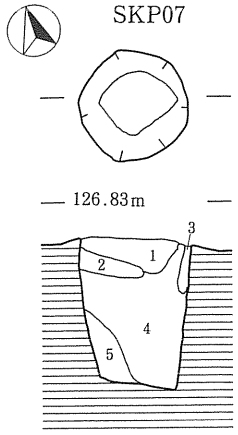
(7) 柱穴様ピット（第 23・24 図、図版 9）

調査区内において、18 基の柱穴様ピットを検出した。検出箇所は、他の遺構の分布する箇所とほぼ一致する。ピットの平面形は、円形・楕円形あるいは不整形であり、規模は径 0.2～0.51ｍ、深さ 0.1～0.43ｍとさまざまである。

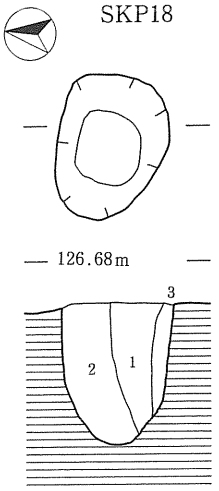
18 基のピットの中で、柱痕が残ると思われるピットが 2 基（SKP18・21）あった。なお、確認されたすべての柱穴様ピットから遺物が検出されなかったので、構築時期は不明である。

第５表　柱穴様ピット計測表

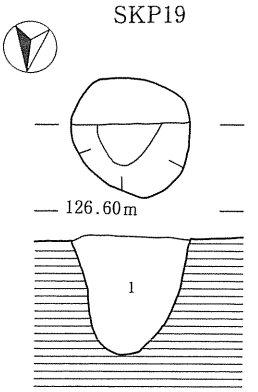
番　号	遺構番号	平　面　形	規　　模（cm）		
			長　軸	短　軸	深　さ
1	ＳＫＰ０７	円　　形	30.5	28.5	43.5
2	ＳＫＰ１８	楕　円　形	39.5	29.0	37.5
3	ＳＫＰ１９	円　　形	34.5	30.5	31.0
4	ＳＫＰ２０	楕　円　形	40.5	31.5	19.5
5	ＳＫＰ２１	円　　形	30.5	30.5	22.5
6	ＳＫＰ２３	楕　円　形	27.5	23.5	14.5
7	ＳＫＰ２４	楕　円　形	33.5	28.0	32.0
8	ＳＫＰ２５	円　　形	30.0	28.5	19.5
9	ＳＫＰ２６	楕　円　形	35.5	30.0	31.0
10	ＳＫＰ２７	円　　形	24.0	21.5	12.5
11	ＳＫＰ２８	円　　形	34.5	30.5	19.5
12	ＳＫＰ２９	不　整　形	51.5	33.0	19.0
13	ＳＫＰ３１	不　整　形	35.0	28.5	18.5
14	ＳＫＰ３２	不　整　形	29.5	23.5	10.0
15	ＳＫＰ３３	不　整　形	34.5	32.5	16.0
16	ＳＫＰ３４	楕　円　形	25.0	20.0	35.0
17	ＳＫＰ３６	楕　円　形	30.5	22.5	35.0
18	ＳＫＰ３７	楕　円　形	27.5	21.5	11.5



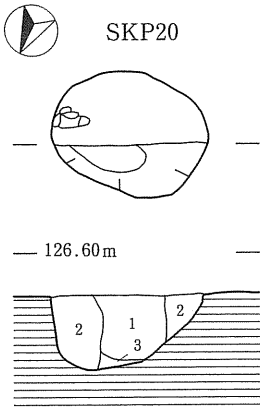
SKP07
1. 黒褐色土（10YR2/2）しまり強、炭化物混入、シルト
2. 黄褐色土（10YR5/6）しまり強、1層少量混入、シルト
3. 褐色土（10YR4/4）風乾すると白っぽくなる、上部ほどよくしまり、～にぶい黄褐色土（10YR4/3）サラサラしている、シルト
4. 暗褐色土（10YR3/4）やわらかくややネバネバしている、砂粒少量混入、シルト
5. にぶい黄褐色土（10YR4/3）風乾すると白っぽくなる、サラサラしている、シルト



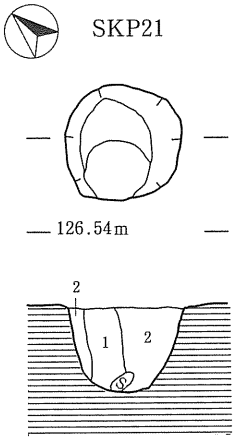
SKP18
1. 黒褐色土（10YR3/1）柱痕
2. 黒褐色土（10YR3/2）にぶい黄褐色土（10YR4/3）斑状に混入、しまり強
3. 黒褐色土（10YR3/2）褐色土（10YR4/4）斑状に混入、しまり強



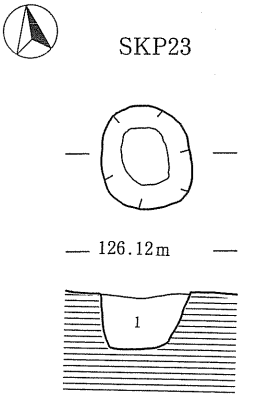
SKP19
1. 黒褐色土（10YR2/2）にぶい黄褐色土（10YR4/3）
・黒色土（10YR2/1）ブロック5%混入



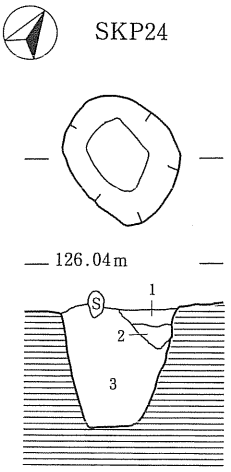
SKP20
1. 黒色土（10YR2/1）やわらかい
2. 黒褐色土（10YR3/2）1層に比べかたく、にぶい黄褐色土（10YR4/3）少量混入
3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）



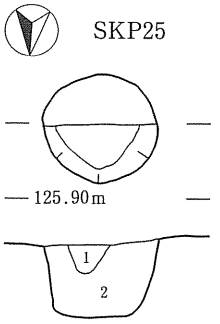
SKP21
1. 黒褐色土（10YR2/2）黒色土（10YR2/1）混入
2. 黒褐色土（10YR2/2）にぶい黄褐色土（10YR4/3）斑状に混入
黒色土（10YR2/1）混入



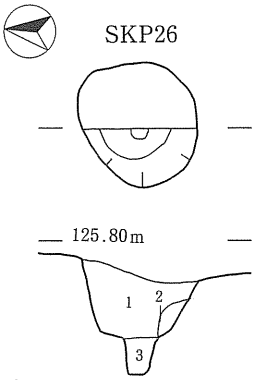
SKP23
1. 黒褐色土（10YR2/2）比較的やわらかい



SKP24
1. 黒褐色土（10YR2/2）褐色土（10YR4/4）僅かに含む
2. 黒褐色土（10YR3/1）
3. 黒色土（10YR2/1）褐色土（10YR4/4）ブロック斑状に混入



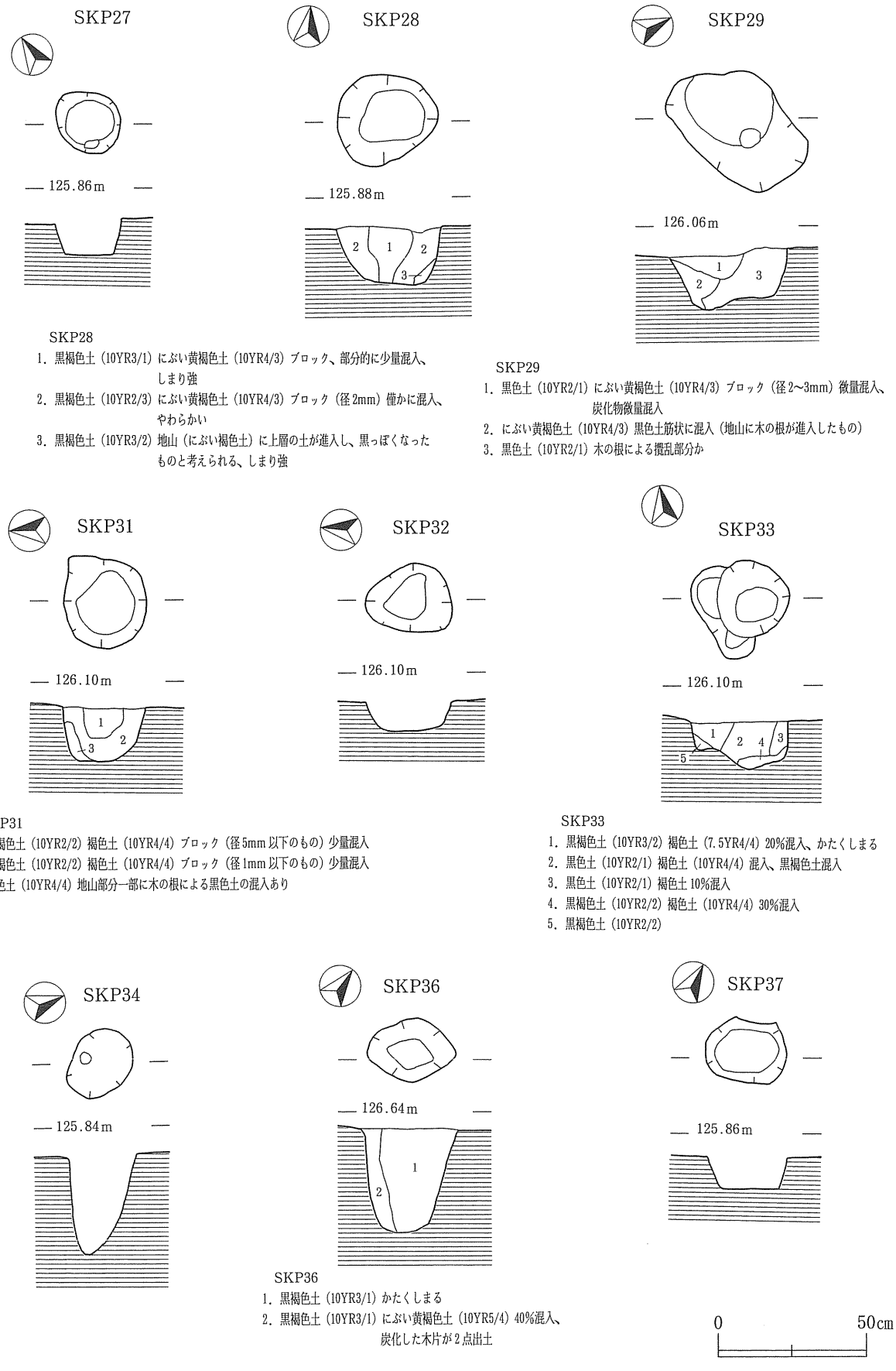
SKP25
1. 黒褐色土（10YR3/2）
にぶい黄褐色土（10YR4/3）ブロック状に20～30%混入
2. 黒褐色土（10YR3/2）
にぶい黄褐色土（10YR4/3）斑状に10%混入



SKP26
1. 黒褐色土（10YR2/2）にぶい黄褐色土（10YR4/3）
径5mm前後のもの、少量混入
2. にぶい黄褐色土（10YR4/3）黒色土（10YR2/1）混入
3. 黒色土（10YR2/1）非常にやわらかい

0　50cm

第23図　柱穴様ピット（1）



SKP28
1. 黒褐色土（10YR3/1）にぶい黄褐色土（10YR4/3）ブロック、部分的に少量混入、しまり強
2. 黒褐色土（10YR2/3）にぶい黄褐色土（10YR4/3）ブロック（径2mm）僅かに混入、やわらかい
3. 黒褐色土（10YR3/2）地山（にぶい褐色土）に上層の土が進入し、黒っぽくなったものと考えられる、しまり強

SKP29
1. 黒色土（10YR2/1）にぶい黄褐色土（10YR4/3）ブロック（径2～3mm）微量混入、炭化物微量混入
2. にぶい黄褐色土（10YR4/3）黒色土筋状に混入（地山に木の根が進入したもの）
3. 黒色土（10YR2/1）木の根による攪乱部分か

SKP31
1. 黒褐色土（10YR2/2）褐色土（10YR4/4）ブロック（径5mm以下のもの）少量混入
2. 黒褐色土（10YR2/2）褐色土（10YR4/4）ブロック（径1mm以下のもの）少量混入
3. 褐色土（10YR4/4）地山部分一部に木の根による黒色土の混入あり

SKP33
1. 黒褐色土（10YR3/2）褐色土（7.5YR4/4）20%混入、かたくしまる
2. 黒色土（10YR2/1）褐色土（10YR4/4）混入、黒褐色土混入
3. 黒色土（10YR2/1）褐色土10%混入
4. 黒褐色土（10YR2/2）褐色土（10YR4/4）30%混入
5. 黒褐色土（10YR2/2）

SKP36
1. 黒褐色土（10YR3/1）かたくしまる
2. 黒褐色土（10YR3/1）にぶい黄褐色土（10YR5/4）40%混入、炭化した木片が2点出土

第24図　柱穴様ピット（2）

第3節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の量は、コンテナ（規格54㎝×34㎝×9.5㎝）で23箱であった。その内訳は、縄文時代の土器・土製品・石器・剥片である。

1　土器

縄文土器は、早期・前期・中期・後期・晩期とバラエティーに富み、その中で縄文時代中期末葉～後期初頭の土器がもっとも多く、後期後葉および晩期前葉のものがそれに次ぐ。出土した土器は時期別に分け、時期の特定できなかった地文のみ（撚糸文のみも含む）の粗製土器は最後に記載した。

縄文時代早期の土器（第25図1、図版15）

1は、LJ50出土の尖底部とLK48出土胴部が接合したものである。尖底部は砲弾状を呈しており、先端部が粘土の接合部分でやや凹んでいる。外面にはRL縄文が横位回転で底部先端まで施されている。内面は丁寧なナデ調整となっている。また内面の底部部分には煤状炭化物が認められる。胎土には、石英粒と黒雲母粒が混入している。残存高8.3㎝、器厚0.8～1.0㎝、尖底部の厚さ1.5㎝を測る。

縄文時代前期の土器（第25図2～7、図版15）

LG57、LJ49・50グリッド周辺からだけ出土した。いずれも深鉢形土器で、胎土に多量の繊維を含んでいる。2・3は、同一個体で平縁の口縁部。0段多条RL撚紐の縄文が施されている。4も平縁の口縁部、RL縄文である。5・6は同一個体で、7と同じくRL縄文が施されている。

縄文時代中期の土器（第26図8～21、図版16・17）

8は、胴部は若干膨らみ口縁がやや外傾し、口縁部に大きな三角状の突起を3個もつ小型の深鉢形土器である。口縁はやや膨れ上がった形態で、外側に連続して左上がりのR原体による押圧が施される。頸部には口縁に沿うように3条の平行沈線が描かれ、三角状突起の下位の平行沈線下に2条の半円の沈線が加わる。またさらにその下にカーブを緩くした3条の平行沈線と上段同様の半円の2条の沈線が描かれる。地文はLR縄文が横位に施されている。円筒上層式土器のなかでは、もっとも新しい特徴を有しており、年代的には中期中葉以降に属するものと認められる。9～17は口縁部資料である。9はRL縄文にあまり深くない沈線が横方向に走る。10・12～14は沈線により縄文充填部と無文部が画されている。11は大型の深鉢で、沈線により上下が区画され、口縁部にあたる上位には無文帯があり、下位にはRL縄文が施される。15は円形や三角形状に沈線によって区画されている。16・17は沈線がなく縄文施文後、口縁部に横位のナデがみられる。21は羽状縄文である。

縄文時代後期の土器（第27～29図22～49、図版16・17・18）

22は、胴下半部はしまり、胴上部が膨らみ、そこから口縁部が内湾する深鉢形土器である。口縁部は1/3ほどしか残存しないが、二重口縁的な形態をとり、4個の把手（状）が付くと予想される。口縁部・胴部の文様はすべてこの4個の把手（状）に規制され、4単位に展開する。まず、把手（状）の下にボタン状貼付文が付き、その間はボタン状貼付文を結び目とした垂幕状の二重口縁となり、その中間に左親指で強く粘土を右方向に寄せ、その盛り上がった部分の反対側に爪でキザミを入れている。垂幕状の下部分と縦に隆起した部分には竹管文が施されている。またボタン状貼付文からは2条の沈線がJ字状に垂下し、波状に左に上がって次のJ字状沈線につながる。胴部の縄文はLR縄文である。

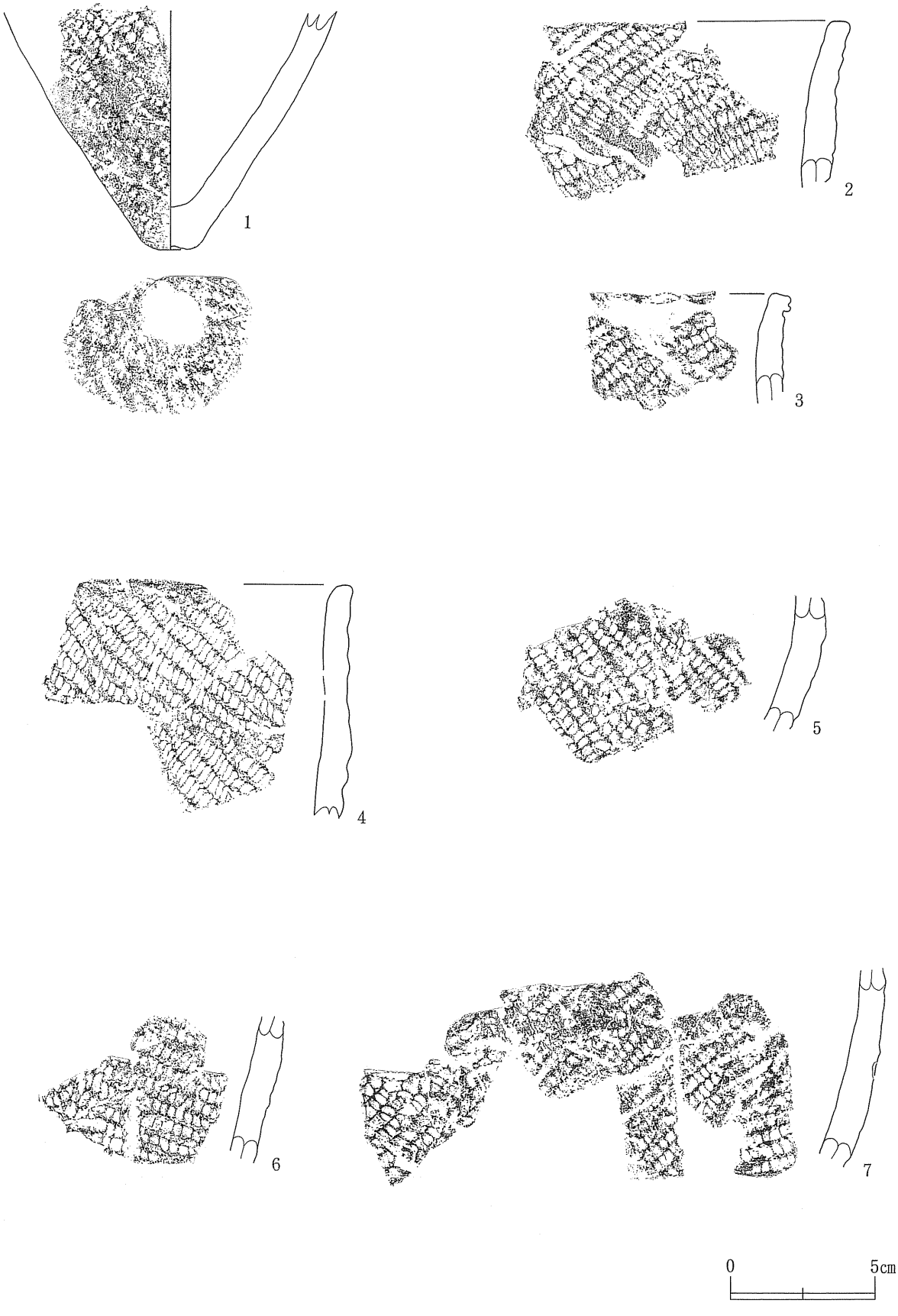
なお、内面の口縁から8cmほどまで煤状炭化物が付着している。ボタン状貼付文の存在や口縁部の形態などから後期初頭に位置づけたが、J字状沈線など中期末葉の大木10式土器の特徴を併せもっており、類例に乏しい。

23と24は同一個体である。外傾する波状口縁で、波頭からわらび状の隆線が垂下し、胴部で最大径のある部位の横位の隆線と斜めにつながる。横位の隆線の下にはRL縄文が施され、上半部と区画される。わらび状の両側および横位の隆線の上部には、角棒状のもので刺突されている。また内側の波頭部分にもわらび状の短い隆帯が付く。25～27も同一個体で、25と26は口縁部、27は胴部である。口縁の下に口縁に平行した隆線があり、隆線上には器面に対して右方向から刺突が施されている。27は斜めに降りる隆線の両側に器面に対して下方向から刺突が施されている。28は胴部の最大径のある部位に隆線があり、細い棒状のもので器面に対し垂直に刺突されている。29～31は山形状の口縁部。29は山頂部分が欠損していて、器面に対して下方向から角棒状のもので刺突されている。30は山頂部から下に向かって高さ1cmほどの把手状のものが付き、その両側の付け根部分に刺突が施されている。把手の下は横方向の沈線が巡り、口縁と沈線の間にはRL縄文が押圧される。31の山頂部には丸棒状のものでキザミが加えられ、キザミから隆線が垂下する。32は胴部資料で、非常に細い沈線で区画された中に、細い棒状あるいはヘラ状のもので刺突されている。33・34は同一個体で、平縁の口縁部に穿孔した山形状突起が付く。L原体の無節縄文が施される。以上、23～34の土器は、隆線と刺突に特徴がある土器群である。

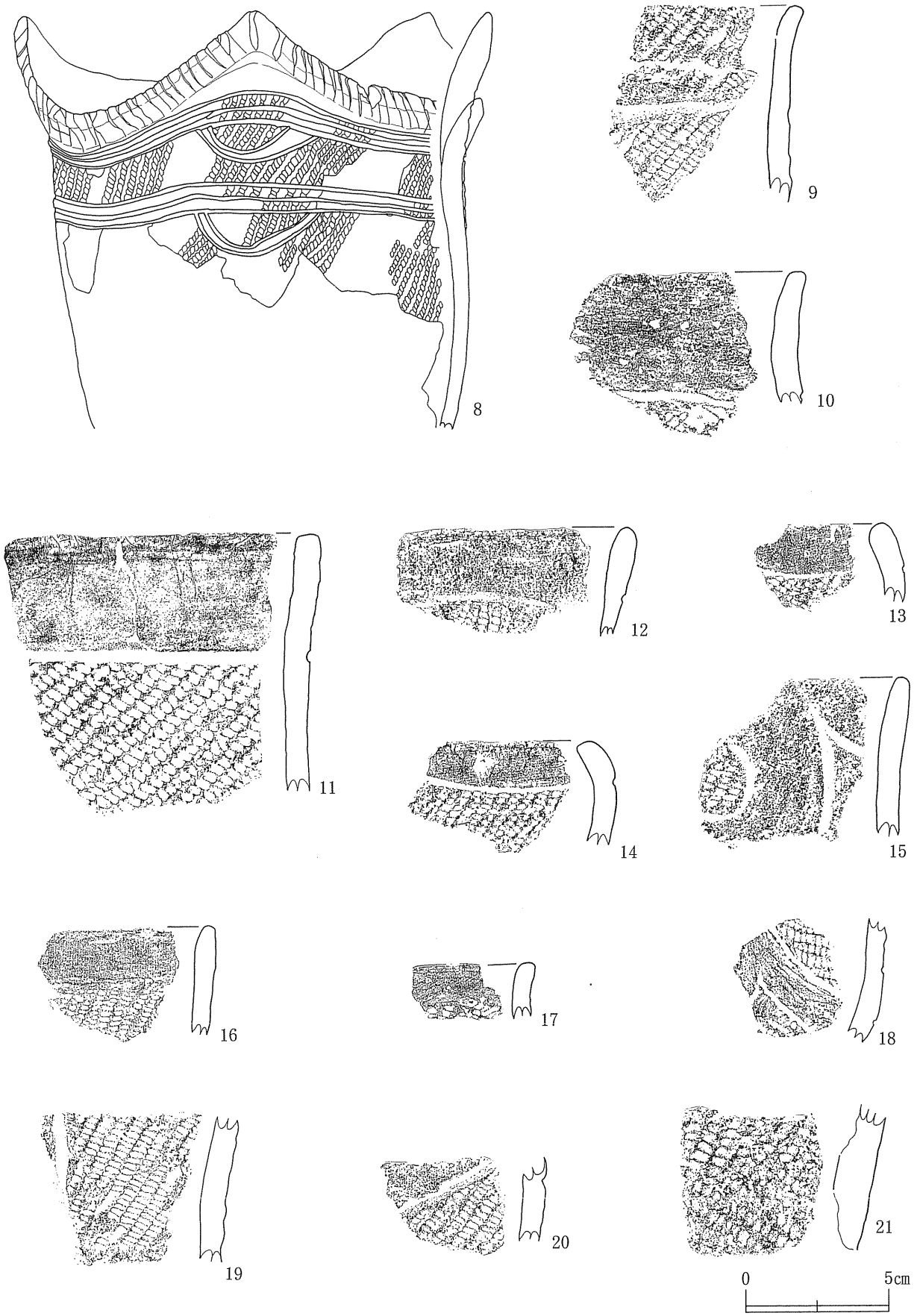
35～41は口縁部破片。35は平縁で、頸部に5条の細い平行沈線が描かれ、基本的には沈線間だが部分的には沈線上に器面に対して垂直に先の尖った棒状工具で刺突されている。胴部はLR縄文が施され、内外面には煤状炭化物が付着している。36は、地文に縄文が施されるが摩滅していて不明、その上に平行沈線が4条描かれる。37は、折返口縁で外側にヘラ状工具で連続的に刻目が施されている。外面に煤状炭化物が付着している。38は、口唇が外傾する口縁部で外面は棒状の工具で丁寧に横位になでられている。39は、大きな山形状の突起をもつ口縁で、撚糸文の上に沈線が描かれる。40・41は同一個体、山形口縁で三又状の陰刻が施される。42～44は深鉢形の胴部で、42は沈線だけである。43は口縁に近い部位で、3条の平行沈線でRL縄文と区画される。44は撚糸文の上に平行沈線が施される。45・46は、同一個体で大型の深鉢形土器の口縁部と底部に近い部分である。口縁に近い部分は主に横から斜め方向に、底部に近い部分は縦方向にヘラ状工具でなでられている。内面はいずれも横方向に外面と同じ工具で丁寧になでられている。外面に煤状炭化物が多量に付着している。47は壺の肩の部分と思われる。48・49は台付浅鉢の台部で、48は外面は縦方向、内面は横方向に丁寧なミガキがかけられている。49は地文のLR縄文が台部の縁部にも施されている。

縄文時代晩期の土器（第30図50～62、図版17・18）

50は深鉢、51・52は浅鉢の、53は鉢の口縁部である。50は口縁にB字形突起が付き、51はキザミのある口縁で、羊歯状文が施される。52・53は平縁で羊歯状文の下には雲形文が描かれている。54は鉢の口縁部に近い部位で、羊歯状文が施されている。55はB字型突起を縦にしたもので、壺型土器の頸部に付くと考えられる。側面の中央には孔があいていて、外面に赤色顔料が施されている。56～61は浅鉢で、56を除いて、57～59は両面に、60・61は外面のみに赤色顔料が施されている。57は山形状の突起で口唇に沈線が入る。58～60は2～3条の沈線が施される。61は底面まで赤色顔料が施され、

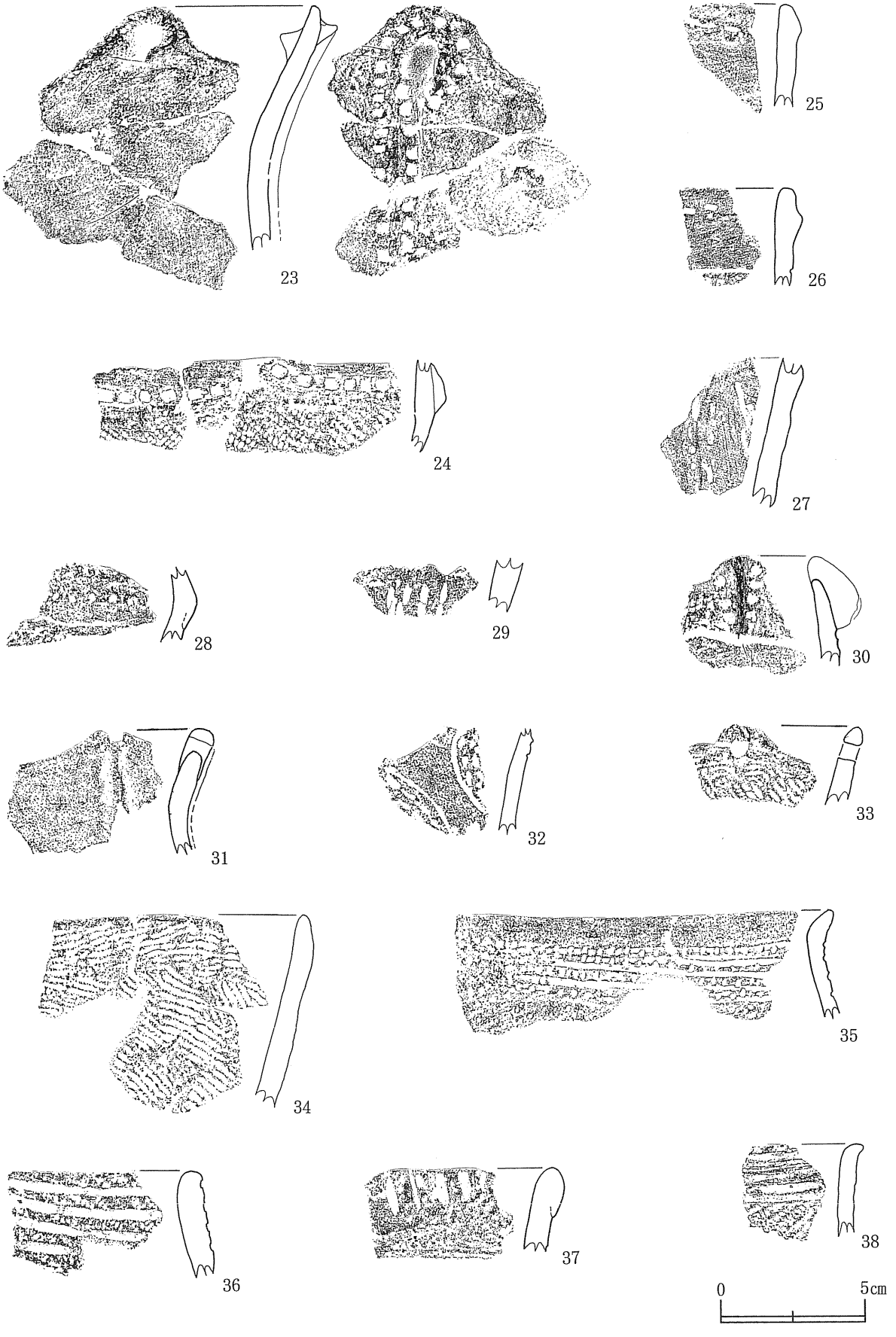


第 25 図　遺構外出土土器（1）

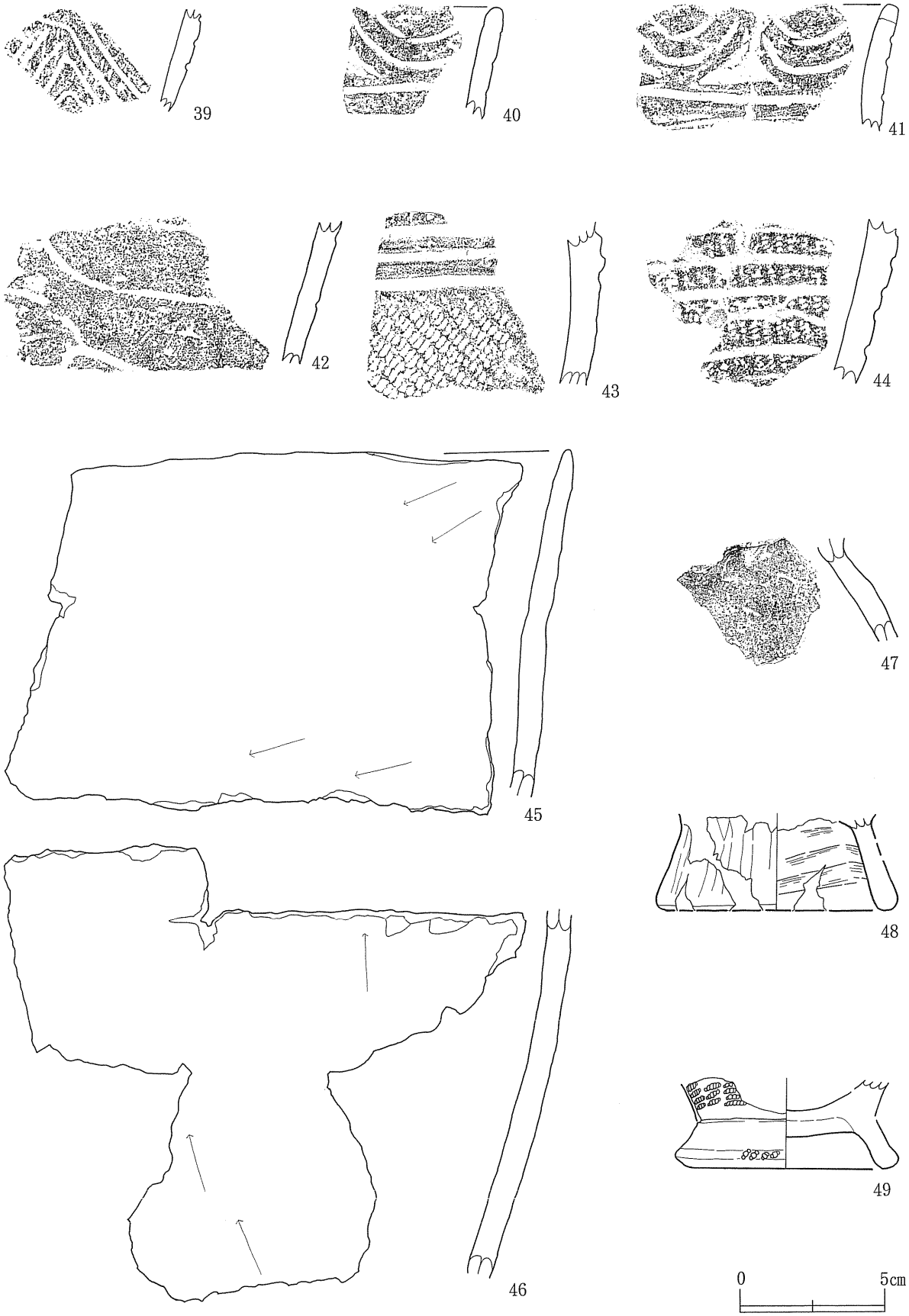


第 26 図　遺構外出土土器（2）

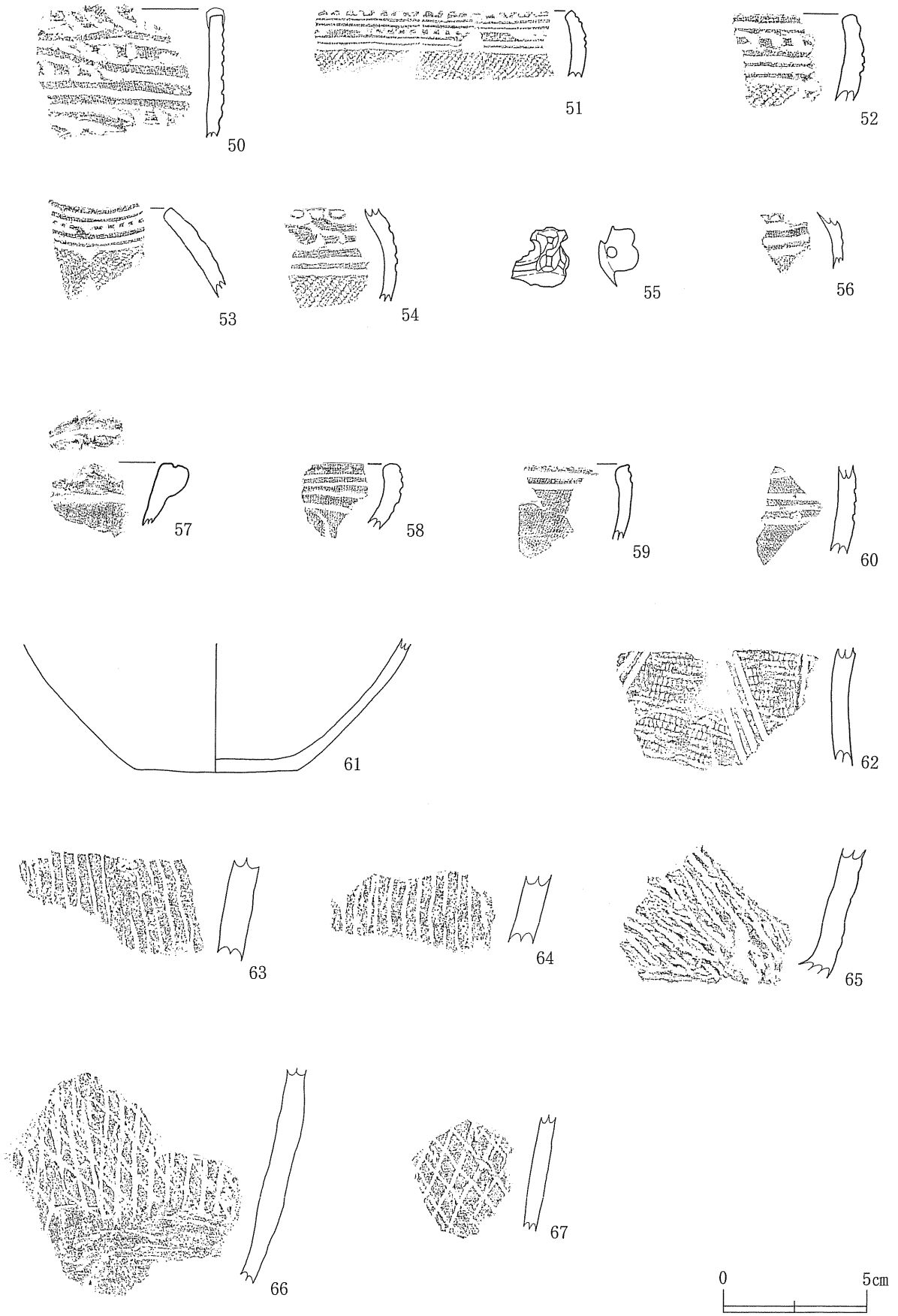
第27図　遺構外出土土器（3）



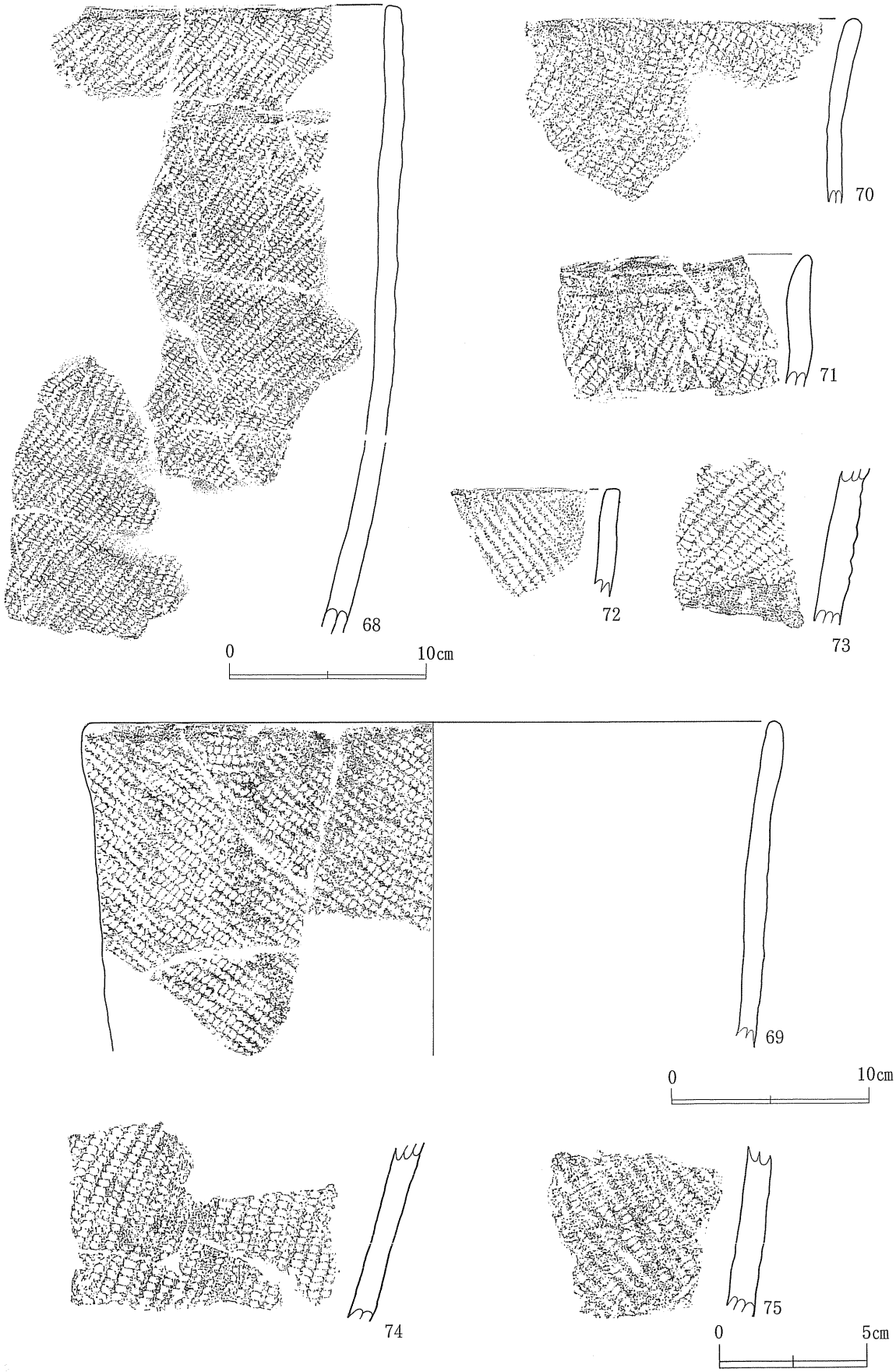
第 28 図　遺構外出土土器（4）



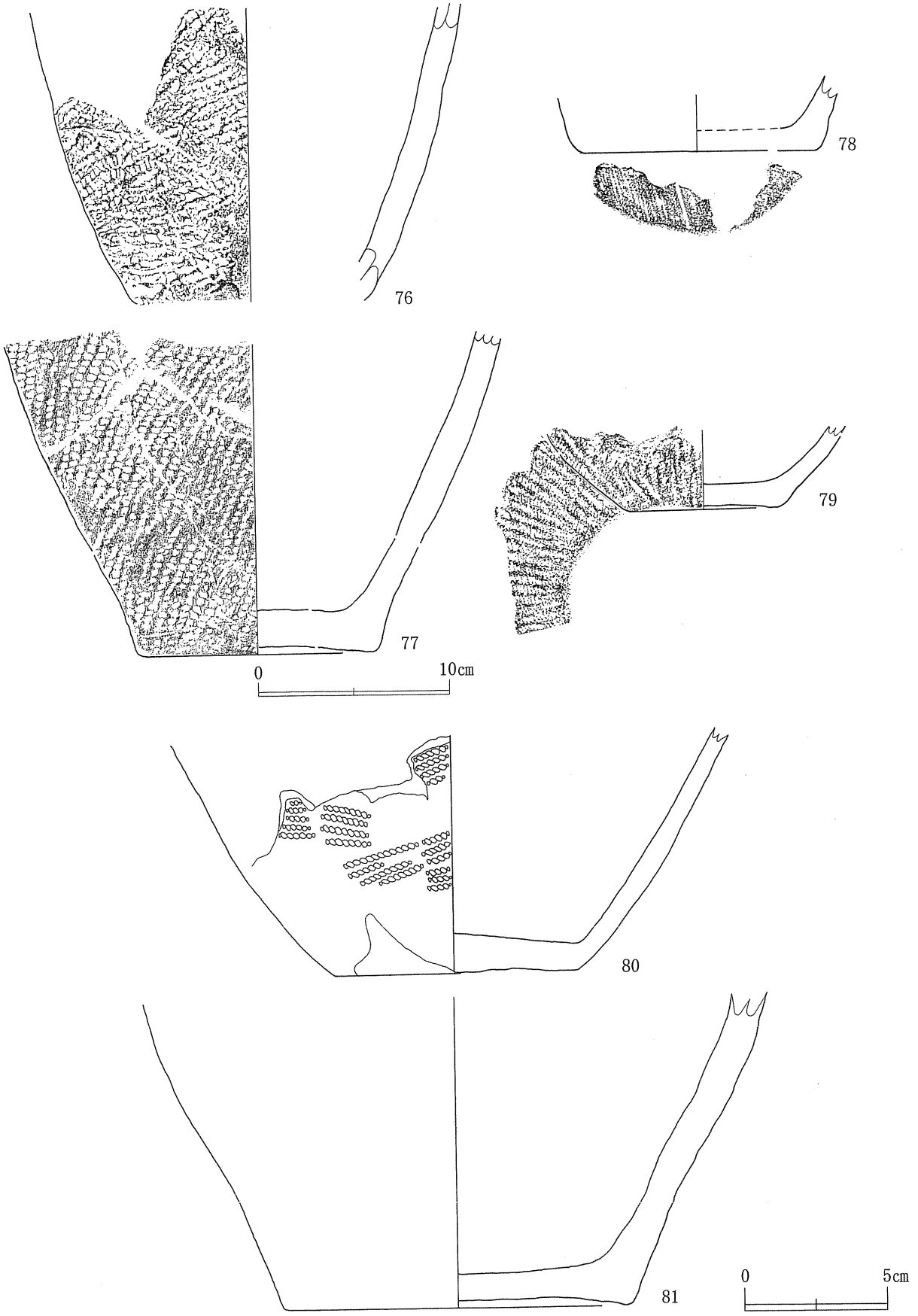
第29図　遺構外出土土器（5）



第30図　遺構外出土土器（6）



第31図　遺構外出土土器（7）

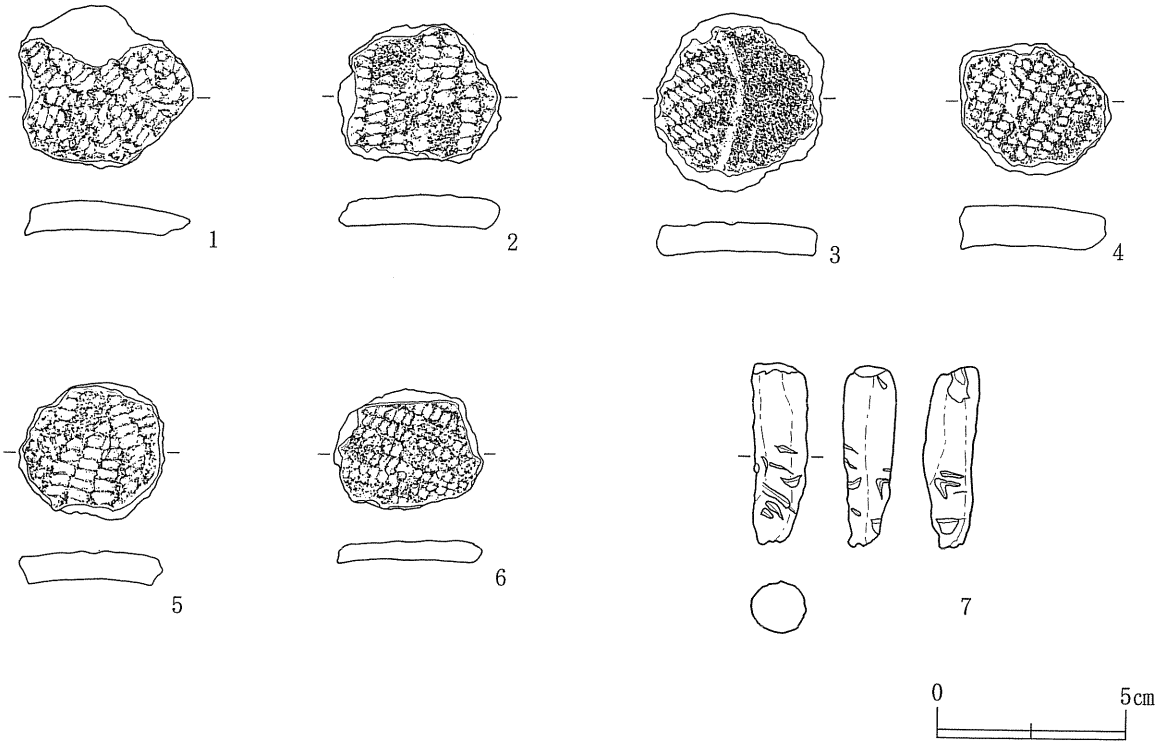


第 32 図　遺構外出土土器（8）

内面には丁寧なミガキがみられる。62は地文はRL縄文に鋸歯状の平行沈線が引かれる。

地文のみの粗製土器（第30～32図63～81、図版18・19・20）

63・64はR原体の単軸絡条体で、65は底部に近い部位にR撚糸文が施されている。66・67はR原体の網目状撚糸文が施されている。これらは後期の土器ではないかと考えられる。68は大型の深鉢形土器で、RL縄文が縦位に施されている。口頸部に文様を意識したと思われる粘土紐が横位に貼付されているが、縄文はその粘土紐をつぶしながら施文されている。外面にはわずかながら煤状炭化物が認められる。69～72は深鉢形土器の口縁部。69はLR縄文が縦位に、70はRL縄文が縦位で、口縁部だけが横位に施されている。71は緩い波状口縁で、LR縄文が横位に施された後、口縁部は横方向になでられている。72はR原体の無節縄文が施されている。73～76は深鉢形土器の胴部から底部に近い部分である。76はLR縄文を地文とするが、意図的につぶされている。内面は丁寧に磨かれている。77は大型の深鉢の底部から胴部にかけての部分で、器厚は胴部で1.5㎝、底部は2㎝を越える。RL縄文が縦位に施されている。縄文原体の長さが3.5㎝と観察できる。78～81は底部資料で、78は底部に植物圧痕がある。79は上げ底ぎみで体部にはRL縄文が施される。80はRL縄文、81は上げ底ぎみで無文である。



第33図　遺構外出土土製品

2　土製品

出土した土製品は、円盤状土製品6点、棒状土製品1点である。

円盤状土製品（第33図1～6、図版20）

土器胴部破片を利用したもので、円形に整形されているが、研磨はほとんどなされていない。6点の長径が3.8～4.5cmとほぼ近い数値である。1・2・5はRL縄文、6はLR縄文、3は沈線に区画されたRL縄文、4は結節のRL縄文と、すべて縄文が施されたものを再利用している。

棒状土製品（第33図7、図版20）

一方がやや細くなる長さ4.9cm、径1cmの棒状の土製品で、両端が欠損していると思われる。細い部分の両面に無作為に刻目が施されている。胎土には石英粒・砂粒が多量に含まれる。

3　石器

遺構外出土の石器には、石鏃・石槍・石匙・石篦・掻器・削器・磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿がある。

石鏃（第34図S1・S2、図版21）

2点出土した。いずれも平基無茎鏃で、丁寧に両面調整されている。S1は背面に、S2は両面に先行剥離面を残す。石質は頁岩である。

石槍（第34図S3～S5、図版21）

3点出土した。S3は両面とも先端部だけ浅い剥離の二次調整を施し、先行剥離面を広く残している。S4は、基部が平坦で、断面は凸レンズ状である。腹面の基部部分に主要剥離面を残す。S5は、基部に大きなつまみのある細身の石槍である。先端部はわずかに折損している。槍身中央付近の断面はカマボコ形なのに対し、茎部は棒状である。両面調整を行うが腹面に先行剥離面が広く残る。

石匙（第34・35図S6～S11、図版21）

出土した6点はすべて縦長剥片を素材とした縦型の石匙である。S6～9・11は打面方向につまみ部を設けているが、S10だけは逆である。S6は、非常に細身・長身の石匙で、断面が三角形を呈し中央部分の器厚は1cmを越える。両面の相対する一側縁のみが細部調整されている。S7は、撥形に近く、刃部は背面の周縁に作出され、剥離調整は深い。腹面には先行剥離面が広く残る。S8は、両面とも浅い剥離の二次調整を施し、先行剥離面を広く残す。つまみ部にはアスファルトが付着している。S9は、二次調整は背面と腹面のつまみ部のみに施され、背面には先行剥離面を広く残す。S10は、二次調整は背面のつまみの抉り部分だけである。断面形は三角形。S11は、つまみ部が折損したものと考えられる。両面に広く先行剥離面を残し、調整は背面の両側縁と腹面の一側縁と下側縁に行われている。

石篦（第35図S12・S13、図版21）

2点出土した。S12は、縦長剥片を素材とし、上方と下方がほぼ同じ幅の形態で頭部が折損している。下縁に設けられた刃部の調整は腹面側に粗い剥離で、急角度の刃部を作出する。刃部角度は60°である。S13は、頭部がやや細く刃部が若干開く形態で、刃部が折損している。両面調整を行うが腹面に先行剥離面が広く残る。

掻器（第35図S14・S15、図版21）

2点出土し、いずれも縦型剥片を素材としている。S14は、一側縁と下部に刃部を作出している。刃部の調整は背面側に細い剥離で、刃部角度が68°と深い。S15は、腹面に広く先行剥離面を残し、二次

調整は下側縁と下端に行われる。下端の刃部の調整は細かい剥離で、刃部角度が90°近くと非常に深い。

削器（第35図S16～S18、図版21）

3点出土した。S16は、縦長剥片を素材とし、その側縁に刃部を作出している。背面のみ丁寧な押圧剥離が施されている。S17は、横長剥片を素材とし、打面の反対側に刃部が作出される。S18は、縦長剥片を用い、両縁に刃部を作出している。両面とも先行剥離面を広く残す。

磨製石斧（第36図S19・S20、図版22）

2点出土した。S19は、ミニチュアの刃部の大きく広がる磨製石斧で、基部がわずかに欠損している。全面が研磨され、両側縁に擦痕がよく残る。断面は隅丸方形で、刃部は弧状をなし、両面から研磨された蛤刃をなす。S20は、頭部が尖り末広がりの刃部が弧状となる形状である。刃部が若干欠損している。主要面と側縁を分ける稜が頭部の先端部まで走り、主要面にもう一本稜が途中まで認められる。石質はいずれも緑色凝灰岩である。

磨石（第36図S21、図版22）

S21は、9.9×8.7×3.2㎝の長円形の磨石である。両面とも使用されているが片面がよく磨かれている。長軸の両端には敲打痕をもつ。

凹石（第36図S22、図版22）

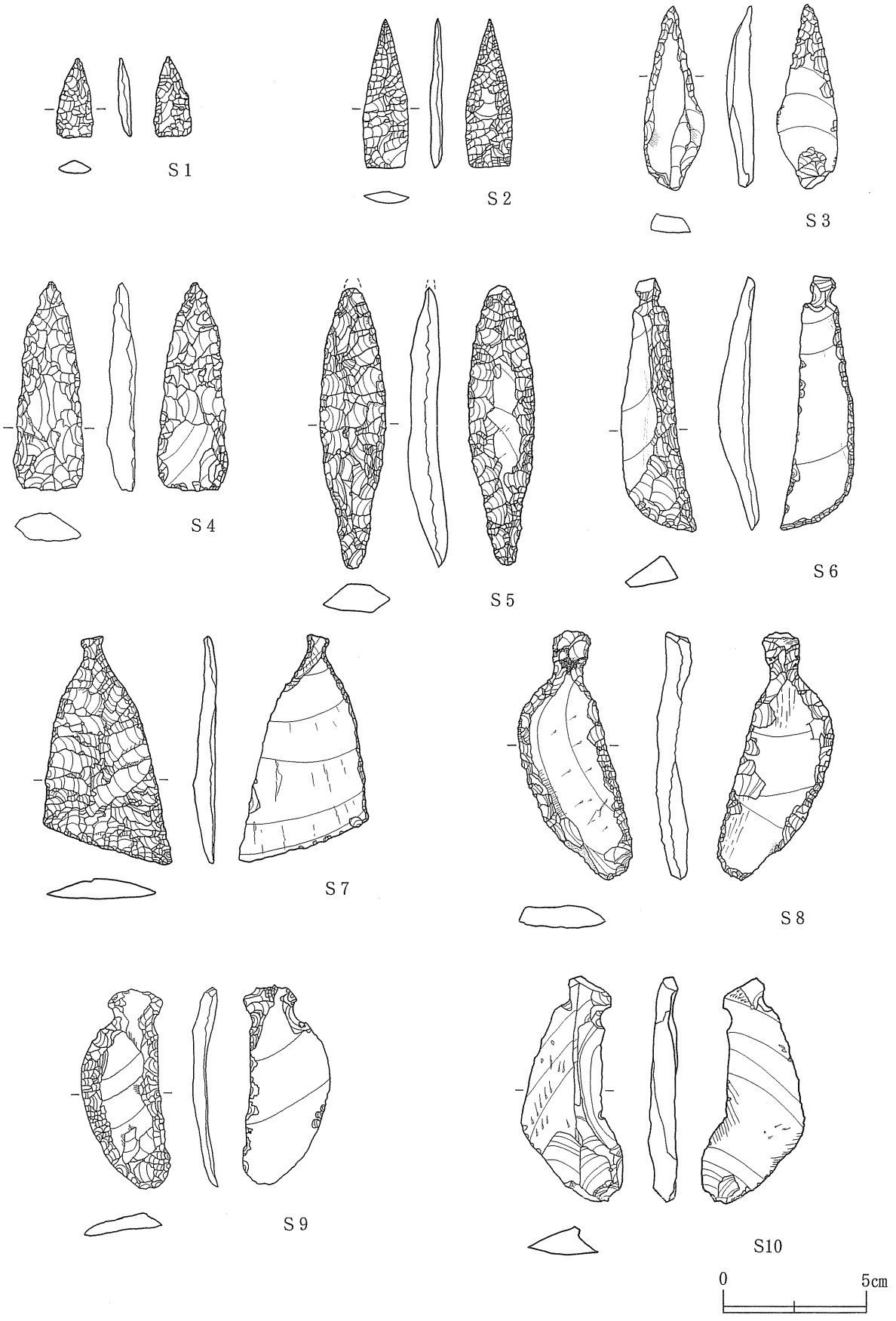
遺構外では1点（S22）だけの出土である。長円形で凹みは浅く、片面の1個のみである。長軸の両端には敲打痕があり、一部欠損している。

砥石（第36図S23、図版22）

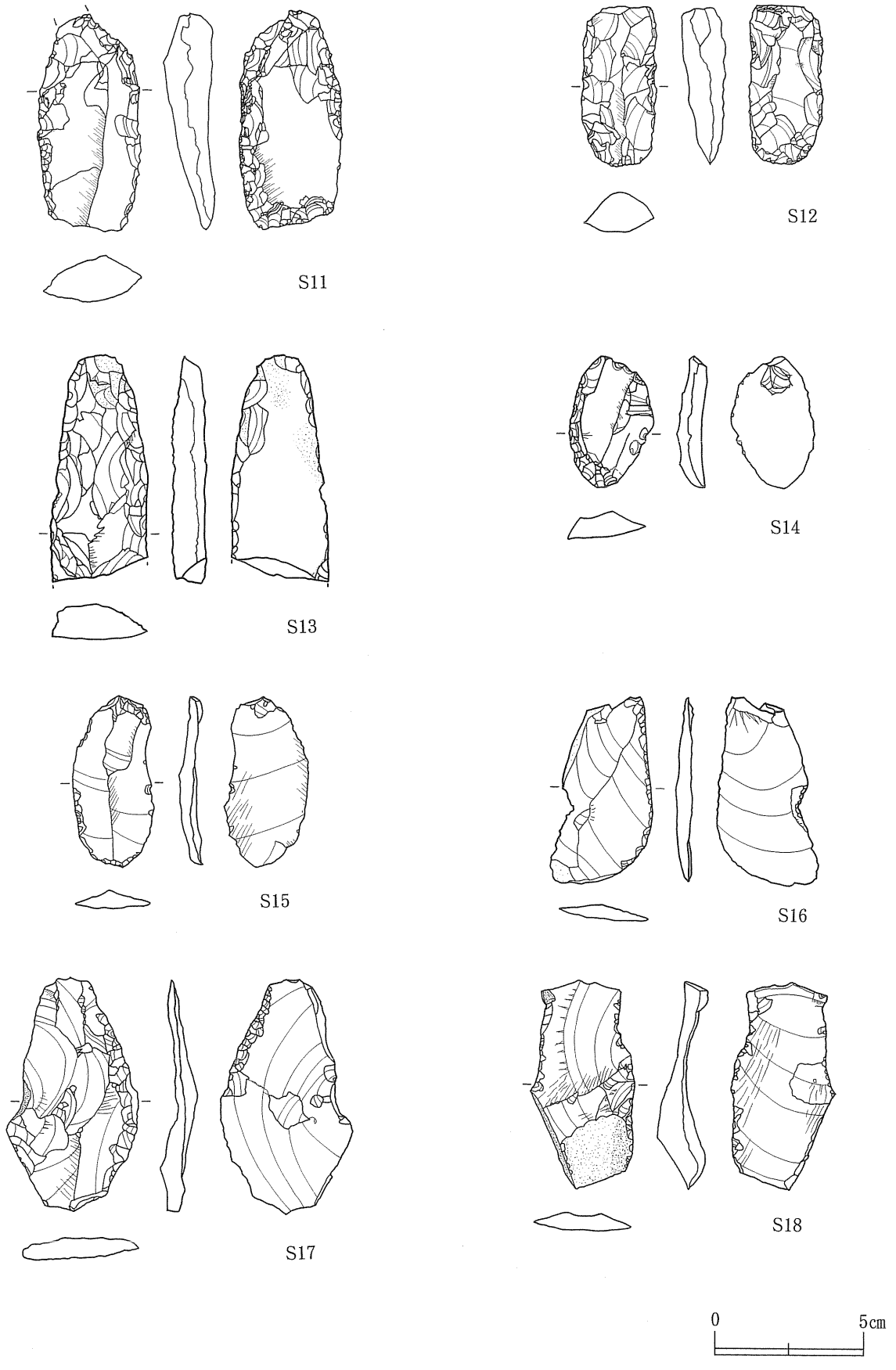
1点出土。S23は泥岩製の板状になった砥石である。すべての面が砥面として使用されている。特に片方の板面は凹面を呈し、その上から先の尖ったもので抉られた痕跡を残す。

石皿（第36・37図S24・S25、図版22・23）

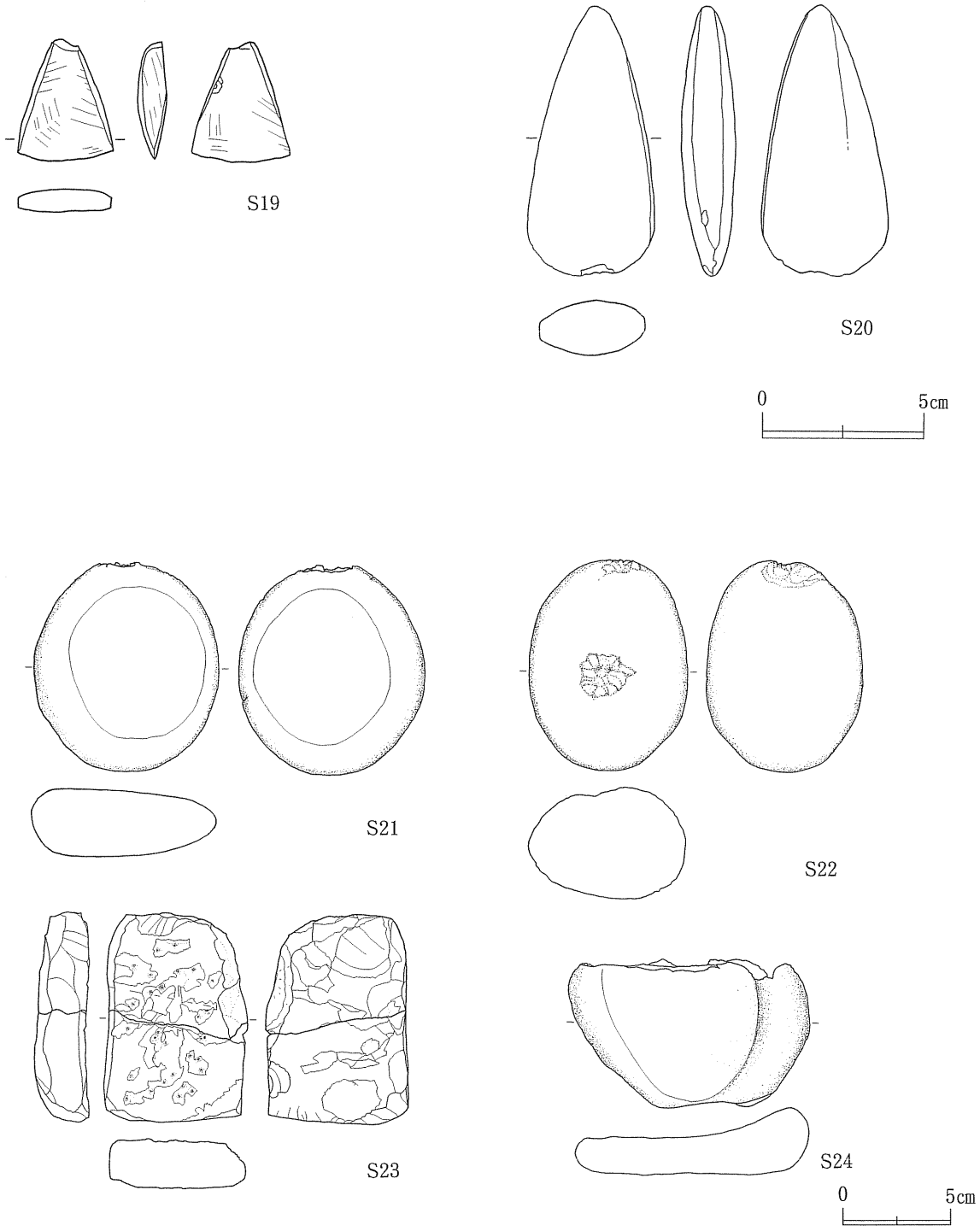
S24は、自然石をそのまま利用したもので、表面が非常によく磨かれ凹凸がなくなっている。S25は、残存部の最大径が37.3㎝のやや楕円に近い形の石皿である。幅5.0～6.2㎝、高さ1.5～2.5㎝の縁が全体をめぐるが、2/5ほど欠損している。断面形は半月形を呈する。内面は平坦となっているが、中央部は使用のため若干凹んでいる。



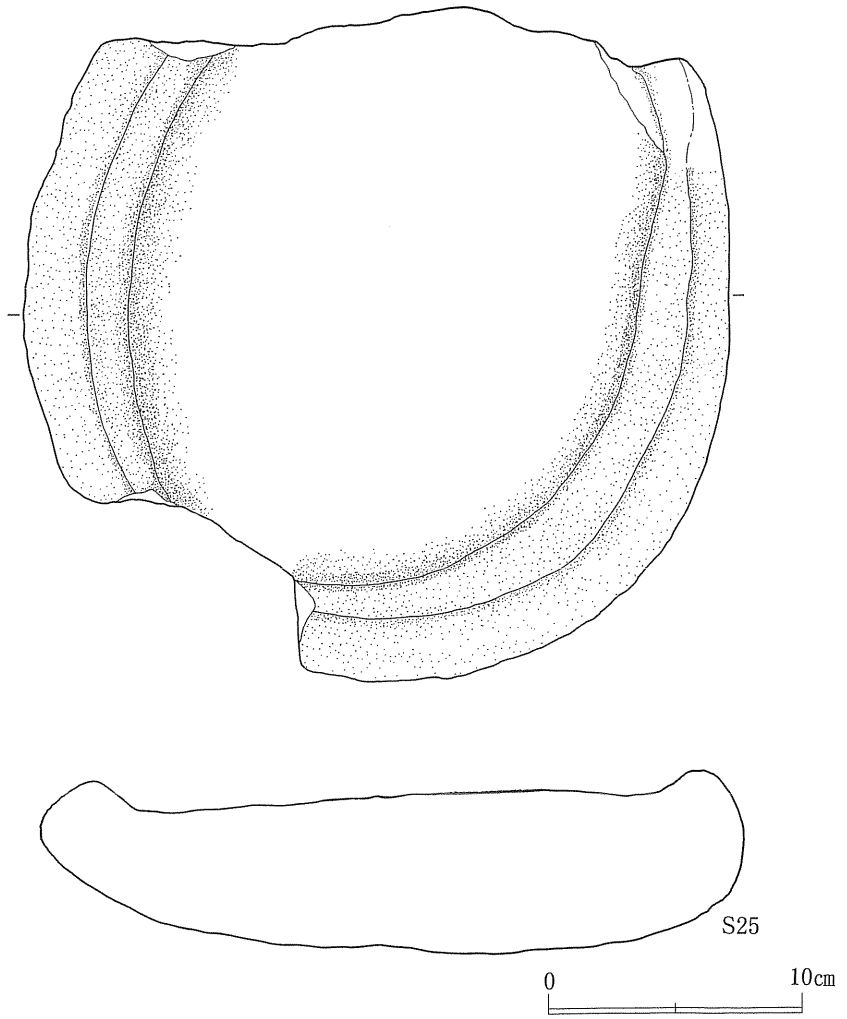
第 34 図　遺構外出土石器（1）



第35図　遺構外出土石器（2）



第 36 図　遺構外出土石器（3）



第 37 図　遺構外出土石器（4）

第６表　遺構外出土石器計測表

挿図番号	番　号	出土地区	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)
34	S1	ＬＫ４５	石　鏃	28.0	13.0	4.5	1.4
34	S2	ＬＩ５３	石　鏃	53.0	16.0	4.0	3.2
34	S3	ＬＪ４６	石　槍	65.0	22.0	7.0	9.3
34	S4	ＬＫ３８	石　槍	74.0	25.0	10.0	16.7
34	S5	ＬＩ４７	石　槍	(98.0)	23.0	13.0	(22.6)
34	S6	ＬＮ３７	石　匙	90.0	26.0	14.0	16.6
34	S7	ＬＬ４１	石　匙	81.0	45.0	7.5	18.4
34	S8	ＬＪ３７	石　匙	87.5	31.5	8.0	26.0
34	S9	ＬＮ３９	石　匙	71.0	27.0	5.0	13.9
34	S10	ＬＮ３５	石　匙	80.5	30.0	10.0	16.2
35	S11	ＬＭ４２	石　匙	(74.0)	35.0	16.5	(37.1)
35	S12	ＬＮ３９	石　篦	54.0	25.0	14.5	21.9
35	S13	ＬＬ３５	石　篦	(77.5)	(33.0)	(12.0)	(32.5)
35	S14	ＬＬ４６	掻　器	45.0	28.5	8.5	11.3
35	S15	ＬＭ４５	掻　器	58.0	27.0	6.0	6.8
35	S16	ＬＩ３７	削　器	63.0	30.0	5.5	11.0
35	S17	ＬＩ３７	削　器	80.0	44.0	7.0	25.7
35	S18	ＬＪ４０	削　器	70.5	34.5	6.0	19.3
36	S19	ＬＮ４３	磨製石斧	(36.0)	30.0	7.0	(14.0)
36	S20	ＬＬ４３	磨製石斧	84.0	38.0	17.0	80.0
36	S21	ＬＪ５１	磨　石	99.0	87.0	32.0	397.6
36	S22	ＬＩ４１	凹　石	100.0	74.5	53.0	510.4
36	S23	ＬＭ４３	砥　石	99.0	63.0	23.0	110.6
36	S24	ＬＭ４３	石　皿	(70.0)	(112.0)	(29.0)	(285.9)
37	S25	ＬＩ４２	石　皿	(357.0)	373.0	86.0	(1,630.0)

（　　）は残存値

第5章　自然科学的分析

株式会社　古環境研究所

第1節　炭化材の樹種同定

1　試料

試料は、姫ヶ岱D遺跡（2HGT—D）より出土した炭化材2点である。

2　方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3　結果

結果を次表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

No.	遺構	種　類	樹　種（和名／学名）
1	SI04	炉内炭化物	ブナ科　Fagaceae
2	SI04	床面炭化物	クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.

a．クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版23

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

b．ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科に同定される。本試料は小片で、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科の同定にとどまるが、クリ、コナラ属コナラ節のいずれかとみなされる。

4　所見

同定された樹種は、クリ、ブナ科であった。これらの樹種は、冷涼な温帯上部の冷温帯の気候を示唆する。なお、これらの試料は、落射顕微鏡（金属顕微鏡）下で反射光が著しいことなどから、燃焼により生成された炭化材と考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

第２節　放射性炭素年代測定

1　試料と方法

試料名	地点・遺構	種　類	前処理・調整	測　定　法
No.1	2HGT-D SI04 炉	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.2	2HGT-D SI04 床面	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法

2　測定結果

試料名	^{14}C 年代 （年 BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C 年代 （年 BP）	暦年代 交点（1σ）	測定No. （Beta-）
No.1	3000±60	−29.2	2930±60	BC1120 （BC1215～1015）	111870
No.2	2930±60	−27.1	2900±60	BC1045 （BC1145～990）	111871

１）^{14}C 年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（1950 年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}C の半減期は 5,568 年を用いた。

2）δ^{13}C 測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C 年代値

δ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ値が表記される場合もある。

第6章　まとめ

姫ヶ岱D遺跡の調査では、遺跡の主に南側から住居跡・石囲炉などを検出し、縄文時代の小規模な集落跡であることが判明した。とくに小又川に臨む段丘縁辺部において、竪穴住居跡が数軒まとまって検出されたことは注目される。また、出土量は多くないものの縄文時代早期から晩期までの幅広い年代の出土土器は、従来、調査例の少なかった阿仁前田・森吉地区の貴重な考古資料となる。

以下、重複する竪穴住居跡の営まれた時期および特徴的な土器について若干まとめてみたい。

1　竪穴住居跡について

調査区南側段丘縁辺部に検出された竪穴住居跡で、プランの確認できた竪穴住居跡は4軒、炉だけの住居跡は3軒である。それらの遺構の内訳は、

プランのわかるもの　　SI04・SI05・SI40・SI41

炉だけのもの　　SI46・SI43・SI45

である。

また、各住居跡相互には切り合いが認められ、その新旧関係のわかるものは、

（旧）　SI46　→　SI04　（新）

（旧）　SI43　→　SI05　（新）

（旧）　SI45　→　SI40　（新）

である。なお、SI40とSI41も切り合い関係が認められるが、その新旧関係はプランや断面の観察からはつかめなかった。

住居跡の規模については、プランのわかる4軒のうち最大のSI41が3.3m×3.2mほど、最小のSI04が径2.6mほどであり、時期決定の指標となるほどの差異は認められなかった。住居跡の形状（竪穴の壁の深さや平面形）についても同様のことがいえる。

炉については、石囲炉（SI04）、土器の埋設された石囲炉（SI05A）、土器埋設炉（SI05B）、大木8b～10式期に東北地方南部でさかんに構築された複式炉（SI43・SI45・SI46）の4つのタイプが認められた。

なお、炉の検出されなかったSI40・SI41については、廃絶時に炉石等が抜き取られたものか、あるいは、元来、炉石等を伴わず地床炉のような形態で炉が営まれていたかは不明である。

以上述べた各住居跡相互の切り合い関係と炉の形態を加味し、出土遺物に着目して各竪穴住居跡の造営の時期を検討すると、本遺跡の場合、旧い順から以下の3時期に営まれた可能性が高い。

すなわち、

Ⅰ期　縄文時代中期末葉～後期初頭　　SI40・SI43・SI45・SI46

Ⅱ期　縄文時代後期後葉　　SI41

Ⅲ期　縄文時代晩期前葉　　SI04・SI05

である。

Ⅰ期については、さらに2時期に細分される。中期末葉のSI43・SI45・SI46の3軒と、後期初頭と思われるSI40である。中期末葉の3軒は、出土土器・炉埋設土器および炉の形態から大木10式期お

よびその前後に営まれた蓋然性が高い。また、後期初頭のSI40は、SI45廃絶後に構築されたことは確実である。

Ⅱ期に属するSI41からは、砲弾状を呈し、縦位に条線文の施された深鉢形土器が出土しており、後期後葉に造営されたと考えられる。

Ⅲ期はいずれも、大洞BC式期を主時期とする住居跡とみなしうるが、SI04とSI05は炉の数や埋設土器の有無などの点で違いがある。これについては、建て替えや、2軒同時存在で機能の異なる住居の存在などが考えられる。

本遺跡を概観すると、上述した7軒の住居跡が段丘南端縁辺部に集中している点が特徴的である。遺跡中央部が削平を受けて遺跡全体の状況が判然としないことは事実であるが、土坑や柱穴様ピットが住居群を囲むような形で配置されていることから、このエリアが生活を営むうえでの本遺跡における拠点であり、なおかつエリア外との区画が意識されていたものと考えられる。小規模な集落ではあるが、あるいはそれだけに、このエリアが縄文人にとくに好まれたことは、何度もここばかりを選んで住居の構築と造営を繰り返していることから明らかであり、きわめて興味深い。

2　土器について

出土した土器は縄文時代早期から晩期までと年代的にバラエティーに富むが、阿仁前田・森吉地区で出土例の少ない早期の土器と、縄文時代中期末葉～後期初頭に位置づけられる土器で特徴的だと思われたものについて言及したい。

（1）早期の土器

本遺跡からわずか1点であるが縄文時代早期の尖底土器が出土した。森吉町において、縄文時代早期の土器は1992（平成4）年度の桂の沢遺跡（根森田字桂ノ沢）が初例で、森吉山ダム建設事業に係る発掘調査によってその資料は増えつつある。本遺跡の尖底土器は、底部のみであるが器形が砲弾形に近く、胎土にはほとんど繊維を含んでいない。また全面に縄文が施されていることなどから、赤御堂式土器に相当するものであろう。縄文時代早期の土器について、秋田県北部では一本杉遺跡、鳶ヶ長根Ⅳ遺跡、野沢岱遺跡、山館上ノ山遺跡、本道端遺跡、横沢遺跡、寒沢遺跡の大館盆地・米代川流域の遺跡、そして前述の阿仁前田地区の桂の沢遺跡に出土例がある。ただし、これらの遺跡では貝殻文土器が多く、本遺跡で出土したような縄文だけ施文された尖底土器の例はあまり多くない。今後のダム関連の発掘調査での類例の増加を待ちたい。

（2）中期末葉～後期初頭の土器

当該時期で注目される土器には、器面全体に刺突が施されたSI40竪穴住居跡出土の深鉢形土器（第15図27、図版12・13）と、ボタン状貼付文とJ字状沈線を施された遺構外出土土器（第27図22、図版16）がある。

器面全体に刺突の施される土器は、全国的には越後・佐渡・会津の各地方で多く出土する三十稲場式土器が有名である。器種構成としては蓋をともなうことが多く、深鉢形土器の特徴として口縁が「く」の字状に強く外反した蓋受け状をなしていることがあげられる。また、刺突の向きも横方向が多い。本遺跡出土の深鉢形土器は口縁がやや内湾しており、刺突の方向も上下方向なので三十稲場式土器とは認めがたく、比内町本道端遺跡10号住居跡で出土した土器、および岩手県大迫町観音堂遺跡HM－73グリッド配石面下部より出土した土器に類似する。(註1) 県内では器面に刺突の施された土器とし

ては、他に、大館市萩峠遺跡Ⅰ区、秋田市坂ノ上F遺跡、山内村上谷地遺跡SI29・SI115などで出土した土器があり、いずれも刺突は上下方向に付けられている。萩峠・坂ノ上F両遺跡出土土器については「秋田県の縄文時代の後期の土器」(高橋、1989) では縄文時代後期初頭と位置づけている。また、観音堂遺跡出土土器については「大木10式土器の考え方」(本間、1994) では大木10式と門前式の間に「観音堂式」として編年している。したがって、ここではこれらの土器群を以上の見解にしたがい縄文時代後期初頭の土器ととらえることとするが、上谷地遺跡で出土した土器は住居跡で大木10式土器と伴出しているので、中期末葉につながる要素も無視しえない。

また、秋田市坂ノ上A遺跡、西仙北町上野台遺跡、雄物川町根羽子沢遺跡などでも器面全体に刺突された土器が出土しているが、その刺突の凹部は一辺1cmほどと大きくやや横長の方形に近い形状を呈しており、上述した本遺跡出土土器類似の土器群とはかなり趣を異にしている。

一方、ボタン状貼付文とJ字状沈線をもつ土器は、ボタン状貼付文や竹管様工具による列点の存在から門前式土器に連なる要素をもっているが、J字状沈線が描かれていること、沈線文の描き方、磨消手法の採られていないことなどから中期最末葉の土器と考えたい。器形と文様のこのような組み合わせの土器は、全県的にみてもあまり類例がない。青森県弥栄平 (1) 遺跡では、口縁部に「ハ」状の貼付隆帯、隆帯上に刺突列が施され、2個のボタン状貼付隆帯をもつ深鉢形土器が第13号住居跡から、また、十字の貼付隆帯をもち、口縁部と貼付隆帯上に縄の側面圧痕文が施され、口縁部の下に直線状の刺突列があり、体部には縄文地にJ字状沈線が変形したような周期の短い波状文の施された深鉢形土器が第14号住居跡から出土している。本遺跡出土土器は、弥栄平 (1) 遺跡出土のこの2つの土器の特徴を多くの点で共有している。さらに器形の面では、青森県弥栄平 (2) ・切谷内・富ノ内の各遺跡に類例がある。

ここで掲げた、器面全体に刺突が施された土器とボタン状貼付文とJ字状沈線を施された土器は、ともに縄文時代中期末葉の土器の要素と後期初頭の土器の諸要素を併せもっており、当該時期の土器の編年研究にとって好資料として加わりえるものと思われる。

註1　本間宏氏御教示による

参考文献

秋田県教育委員会　『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第247集　1994（平成6）年

秋田県教育委員会　「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』　秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58）年

秋田県教育委員会　「鳶ヶ長根Ⅳ遺跡」『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　「野沢岱遺跡」『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』　秋田県文化財調査報告書第237集　1993（平成5）年

大館市教育委員会　『大館市山館「上ノ山遺跡」発掘調査報告書』　大館市市史編さん調査資料第15集　1975（昭和50）年

比内町教育委員会　『本道端遺跡』　比内町埋蔵文化財調査報告書　1986（昭和61）年

秋田県教育委員会　「袖ノ沢・横沢遺跡」『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第169集　1988（昭和63）年

秋田県教育委員会　「寒沢遺跡」『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』　秋田県文化財調査報告書第254集　1995（平成7）年

本間宏　「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』　10号　1994（平成6）年

本間宏　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』　第1号　よねしろ考古学研究会　1985（昭和60）年

本間宏　「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』　第3号　よねしろ考古学研究会　1987（昭和62）年

高橋忠彦　「秋田県の縄文時代の後期の土器」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』　第4号　1989（平成元）年

田中耕作　「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観4　後・晩期』　小学館　1990（平成2）年

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅻ―上谷地遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第241集　1994（平成6）年

秋田県教育委員会　『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　「上野台遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第180集　1989（平成元）年

秋田県教育委員会　『根羽子沢遺跡発掘調査報告書－国道107号線改良工事に伴う緊急発掘－』　秋田県文化財調査報告書第176集　1988（昭和63）年

青森県教育委員会　『弥栄平（1）遺跡発掘調査報告書』　青森県文化財調査報告書第98集　1986（昭和61）年

遺跡遠景（北東→南西）

竪穴住居跡群完掘状況（西→東）

SI04 竪穴住居跡
完掘状況（西→東）

SI46 竪穴住居跡炉
確認状況（北西→南東）

SI05 竪穴住居跡
確認状況（西→東）

SI05 竪穴住居跡
完掘状況（南東→北西）

SI05 竪穴住居跡炉
断面（南→北）

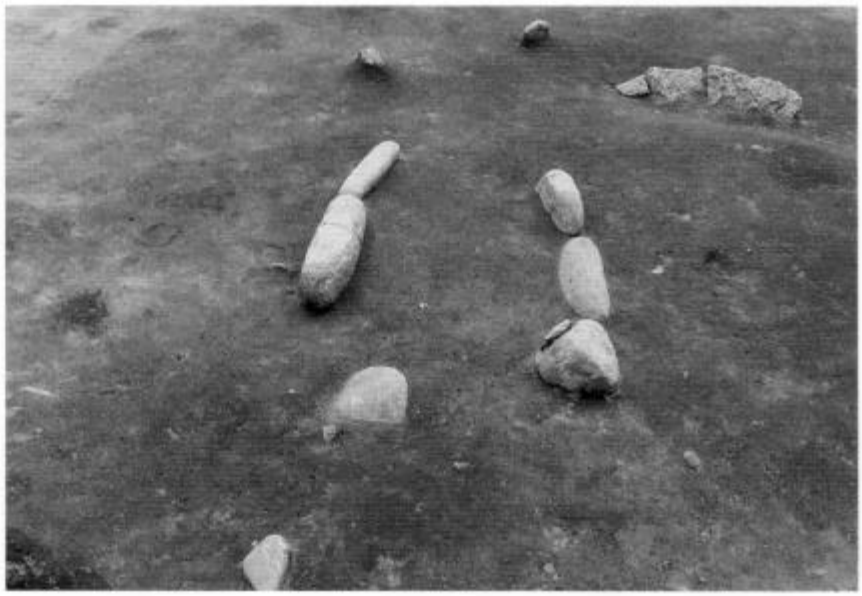
SI43 竪穴住居跡炉
断面（南→北）

SI41 竪穴住居跡
遺物出土状況
（北西→南東）

SI41 竪穴住居跡
完掘状況（西→東）

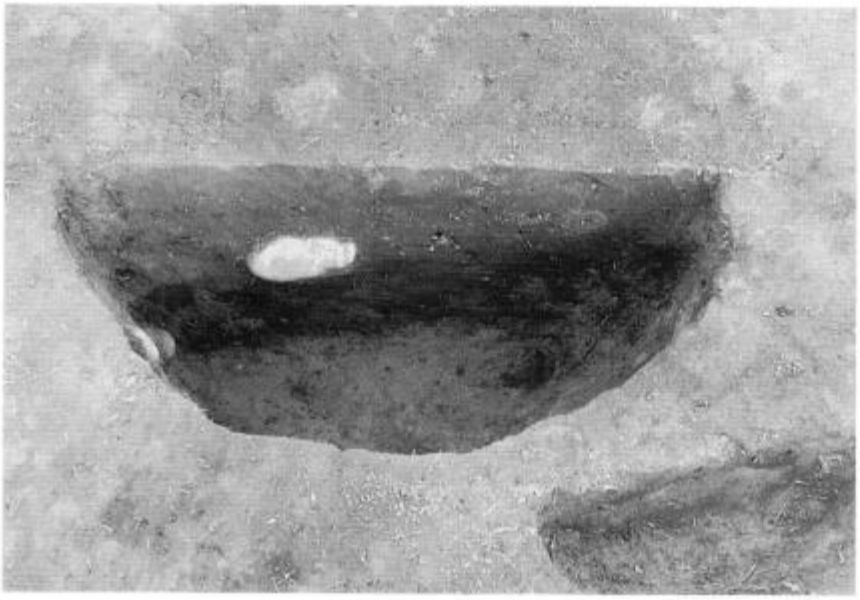
SI40 竪穴住居跡
完掘状況（南西→北東）

SI45 竪穴住居跡炉
完掘状況（東→西）



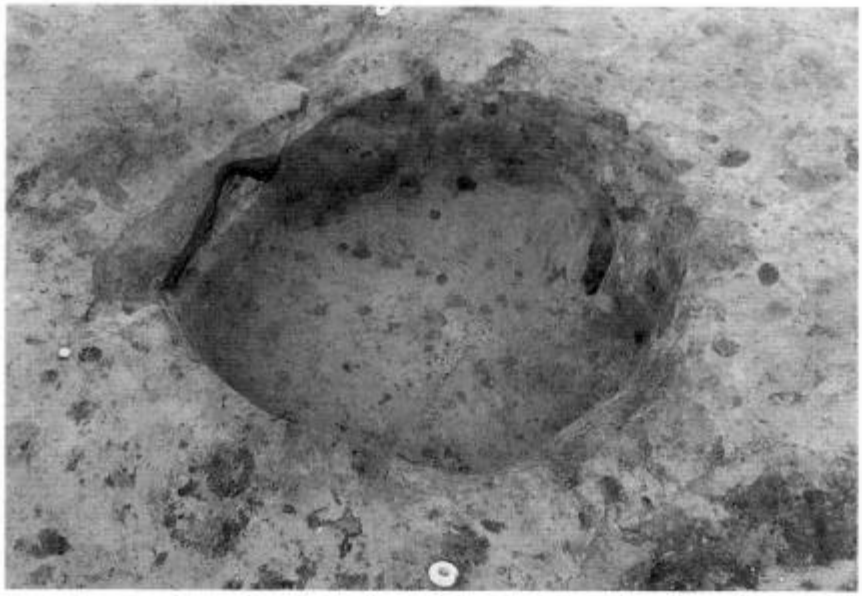
SI09 竪穴住居跡
確認状況（北→南）

SK17 土坑
完掘状況（北東→南西）

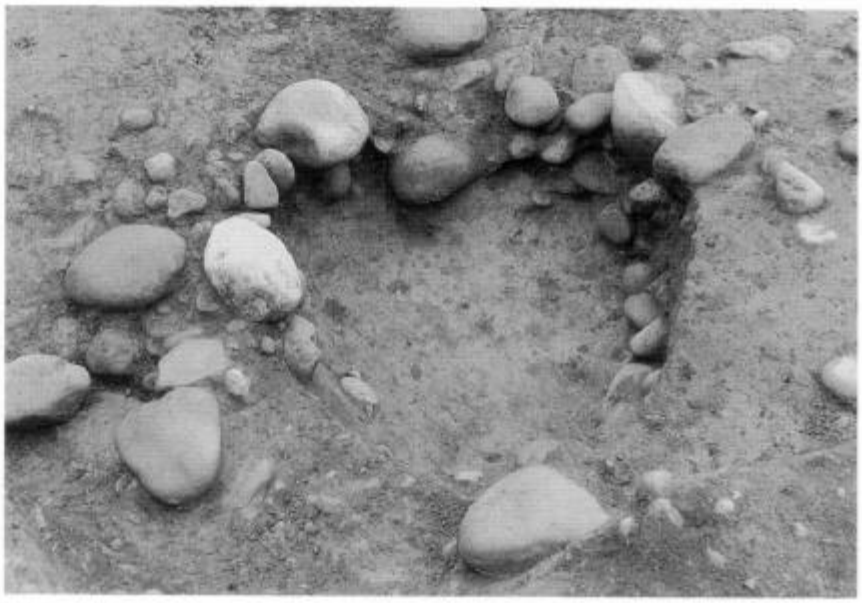


SK35 土坑
断面（南→北）

SK38 土坑
完掘状況（東→西）

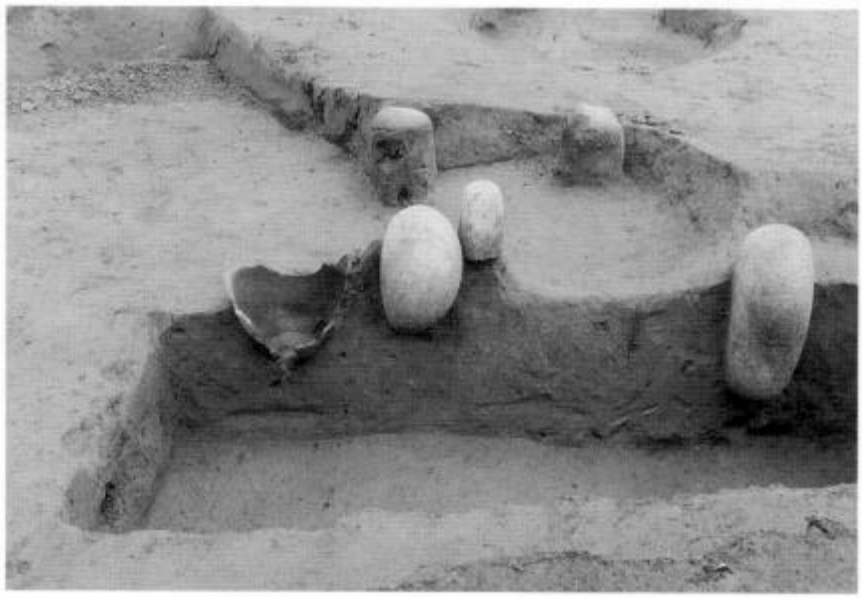


SK39 土坑
完掘状況（東→西）



SK42 土坑
完掘状況（北→南）

SQ10 配石遺構
断面（南→北）



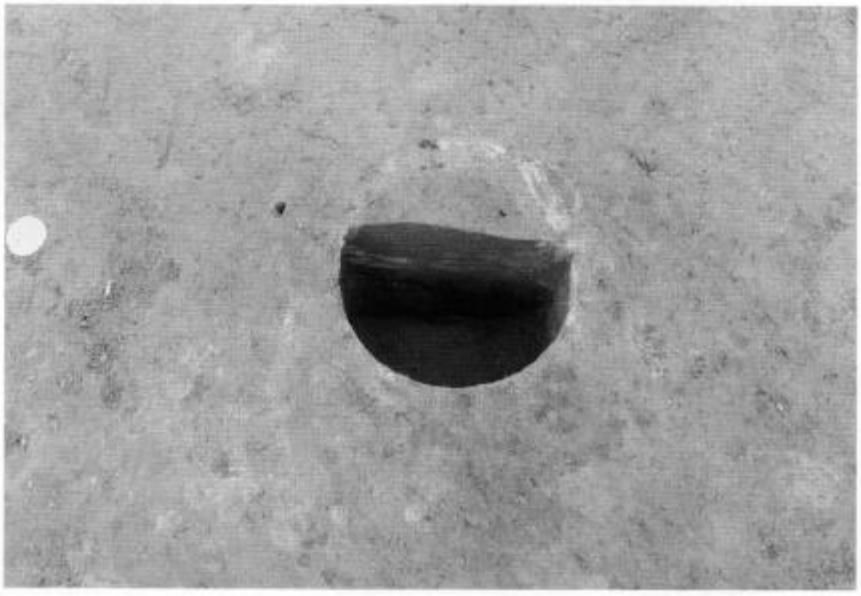
SR22 土器埋設遺構
断面（南→北）

SN12 焼土遺構
確認状況（南東→北西）

SN14 焼土遺構
確認状況（東→西）

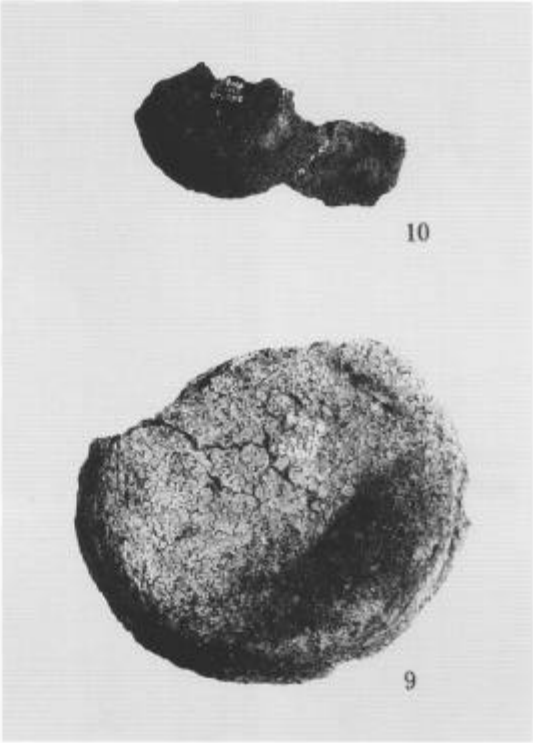
SX02 性格不明遺構
断面（北→南）

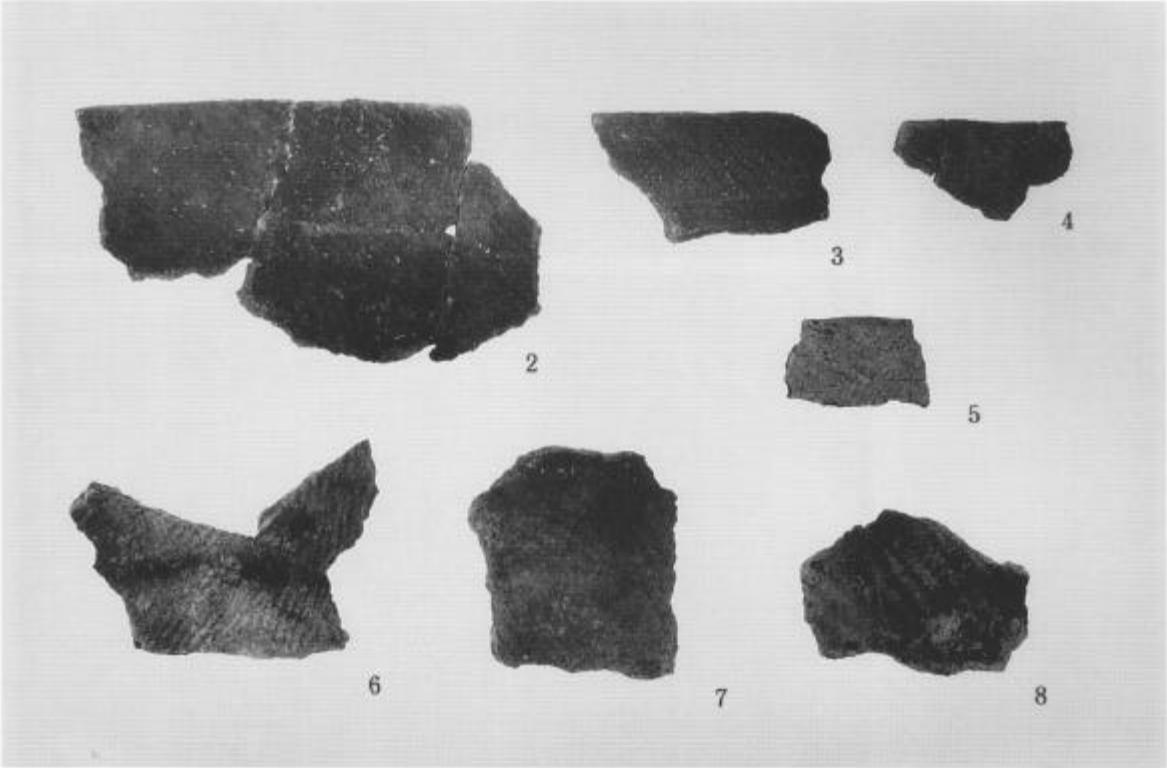
SX03 性格不明遺構
確認状況（南→北）



SKP07 柱穴様ピット
断面（南→北）

調査後の状況
（南→北）





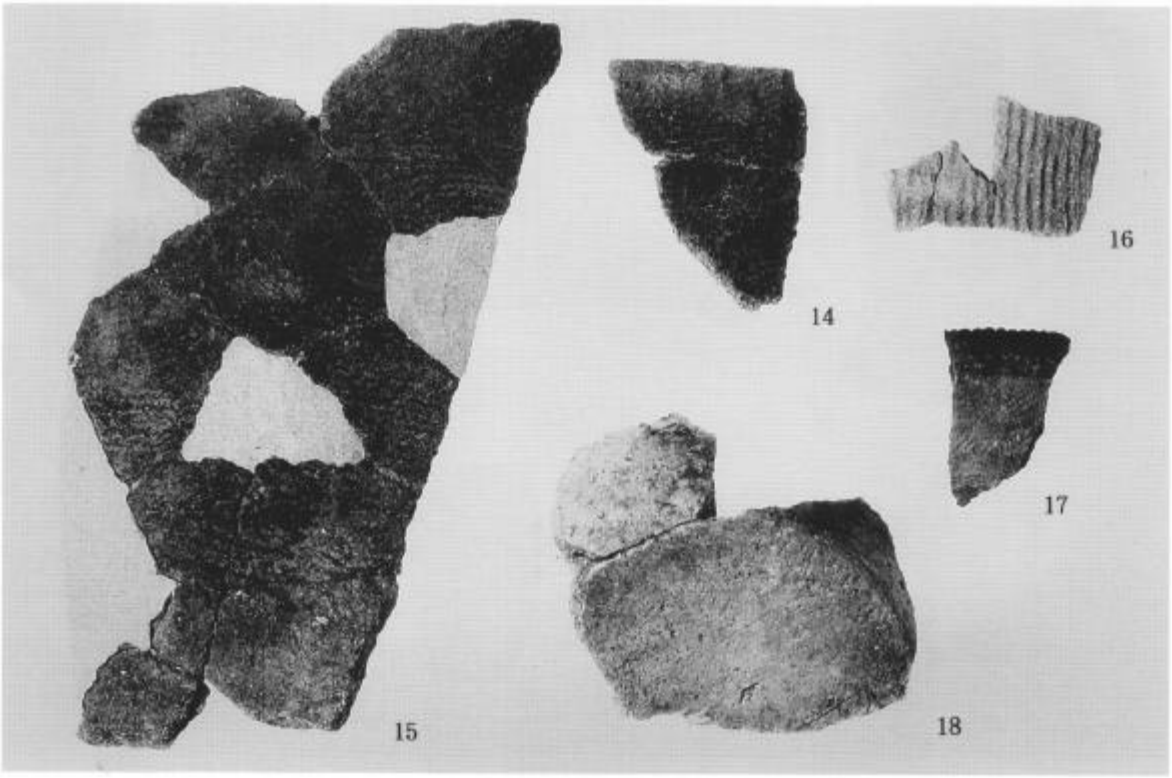
SI04 竪穴住居跡出土土器

11

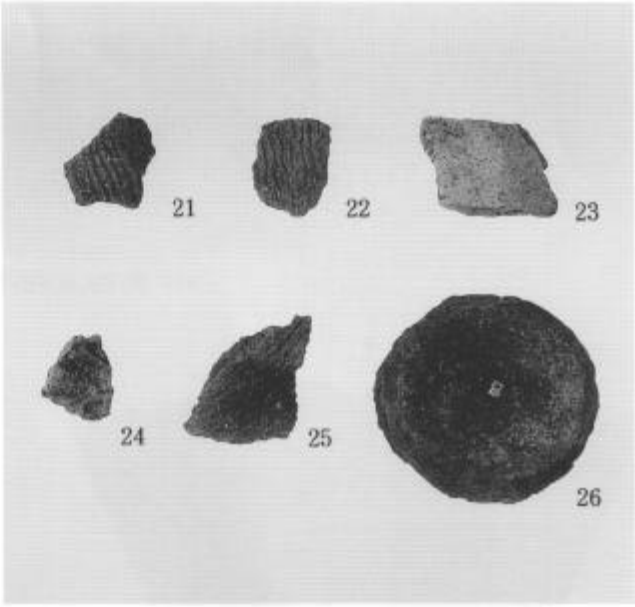
SI46 竪穴住居跡出土土器

12

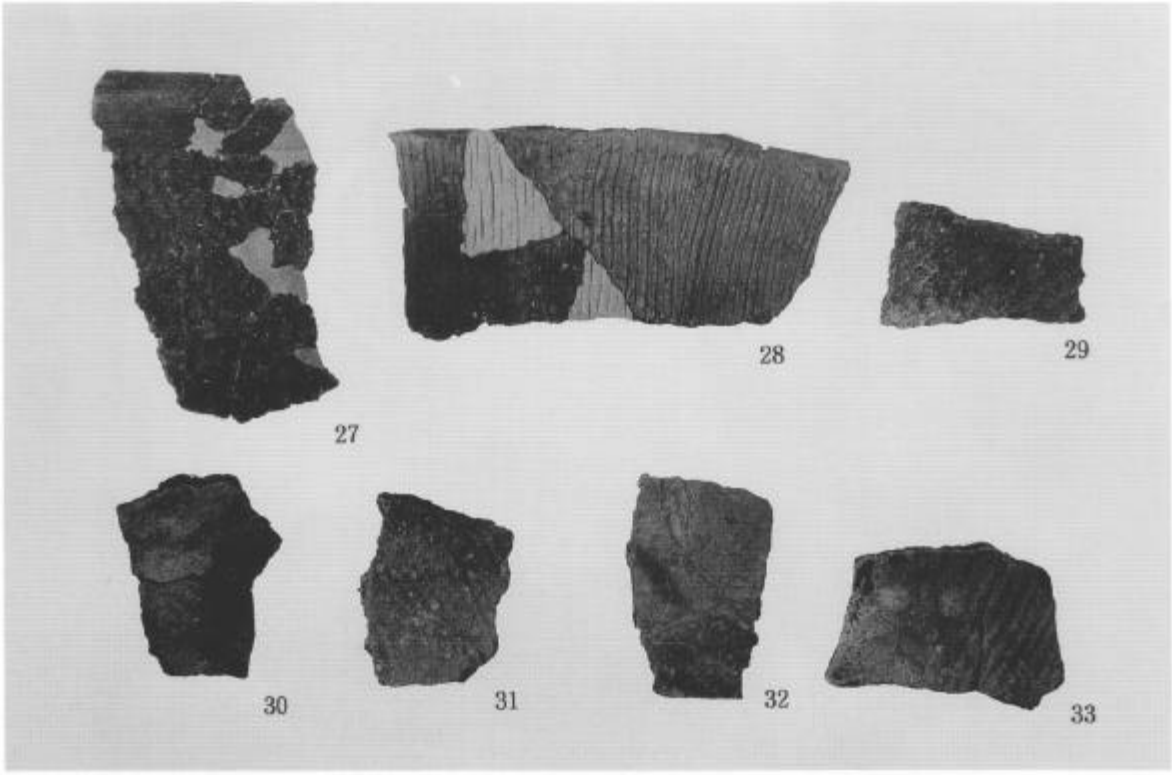
13



SI05 竪穴住居跡出土土器

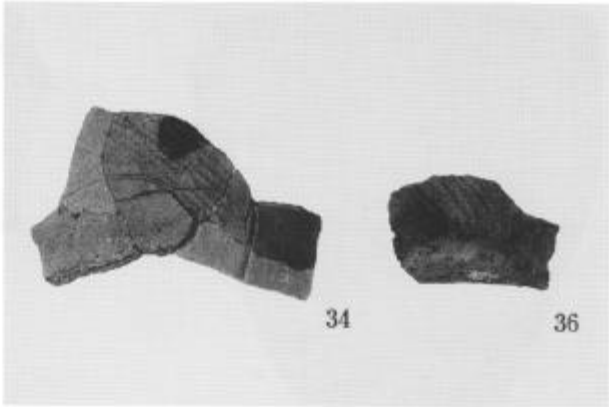


SI41 竪穴住居跡出土土器



SI40 竪穴住居跡出土土器（1）

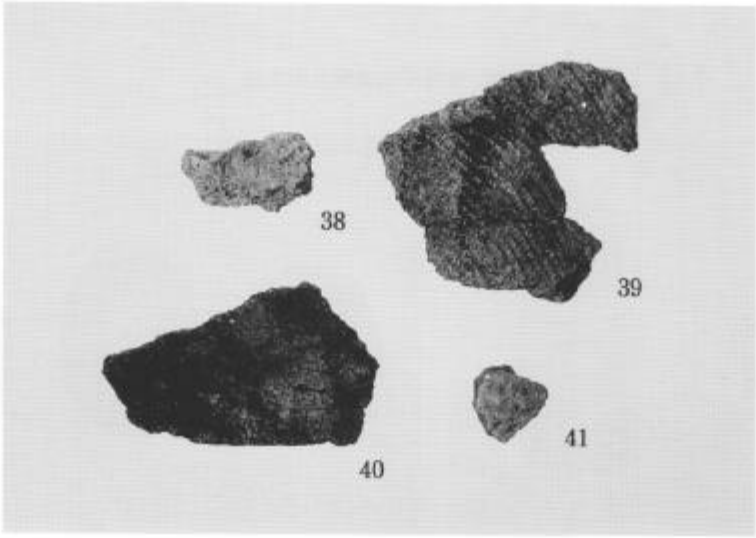
27


34 36

35

37

SI40 竪穴住居跡出土土器（2）


38 39 40 41

SI09 竪穴住居跡・SQ10 配石遺構・SX02 性格不明遺構出土土器

42

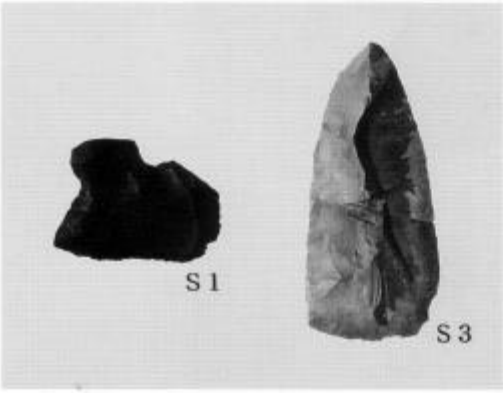
43

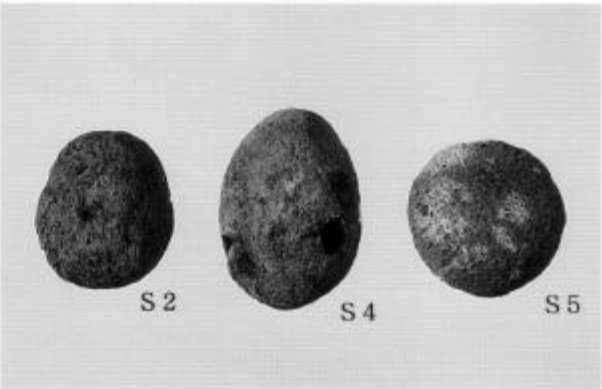
SR22 土器埋設遺構出土土器

44

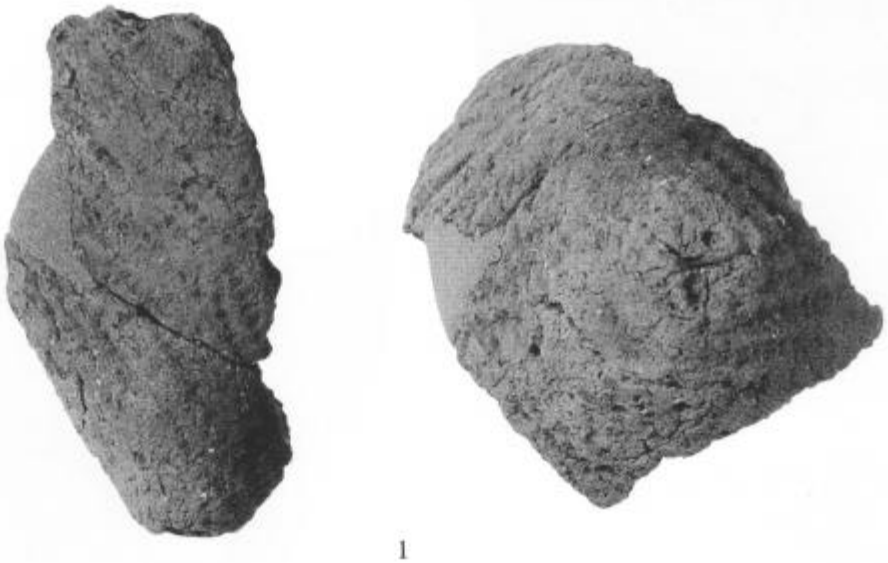
45

SX03 性格不明遺構出土土器

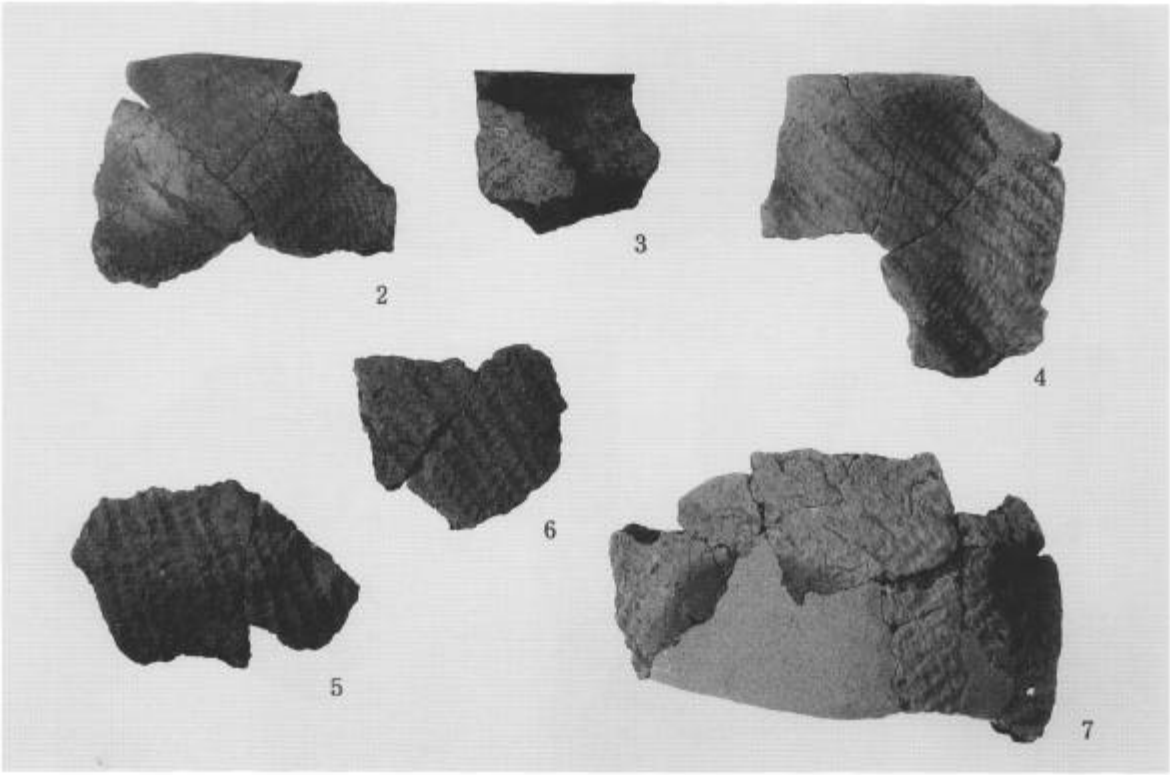




遺構内出土石器



1



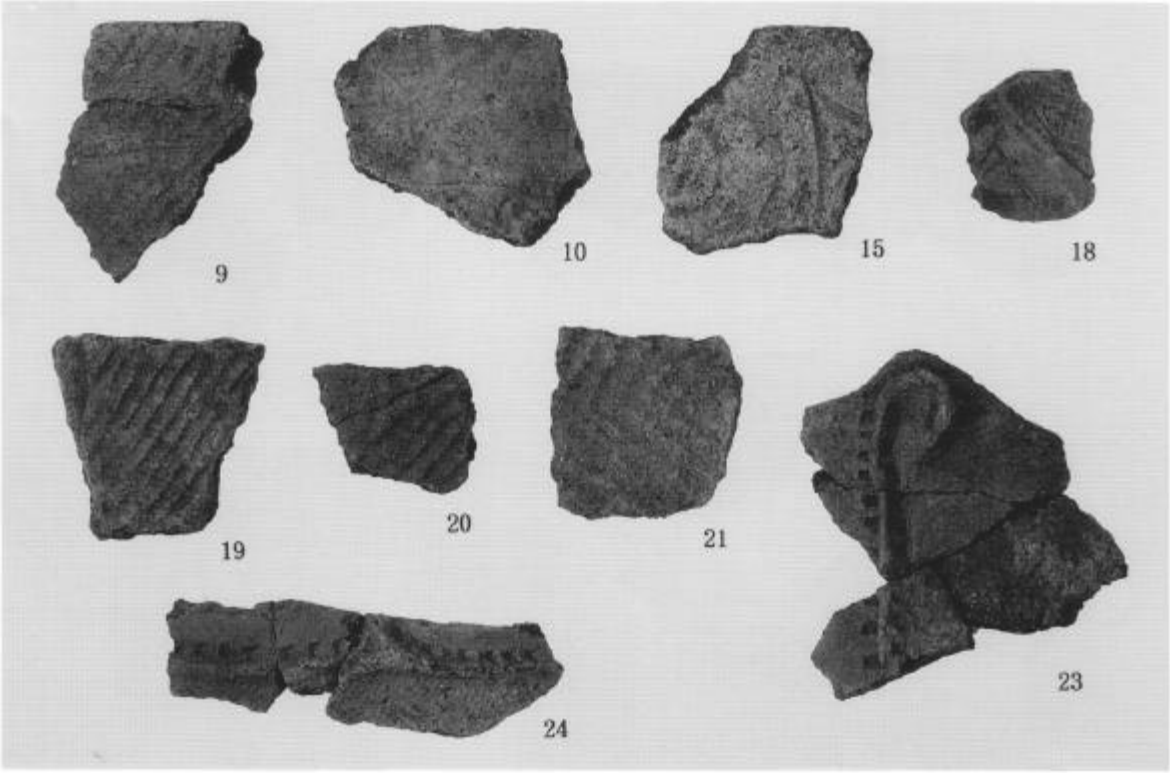
2 3 4 5 6 7

遺構外出土土器（1）

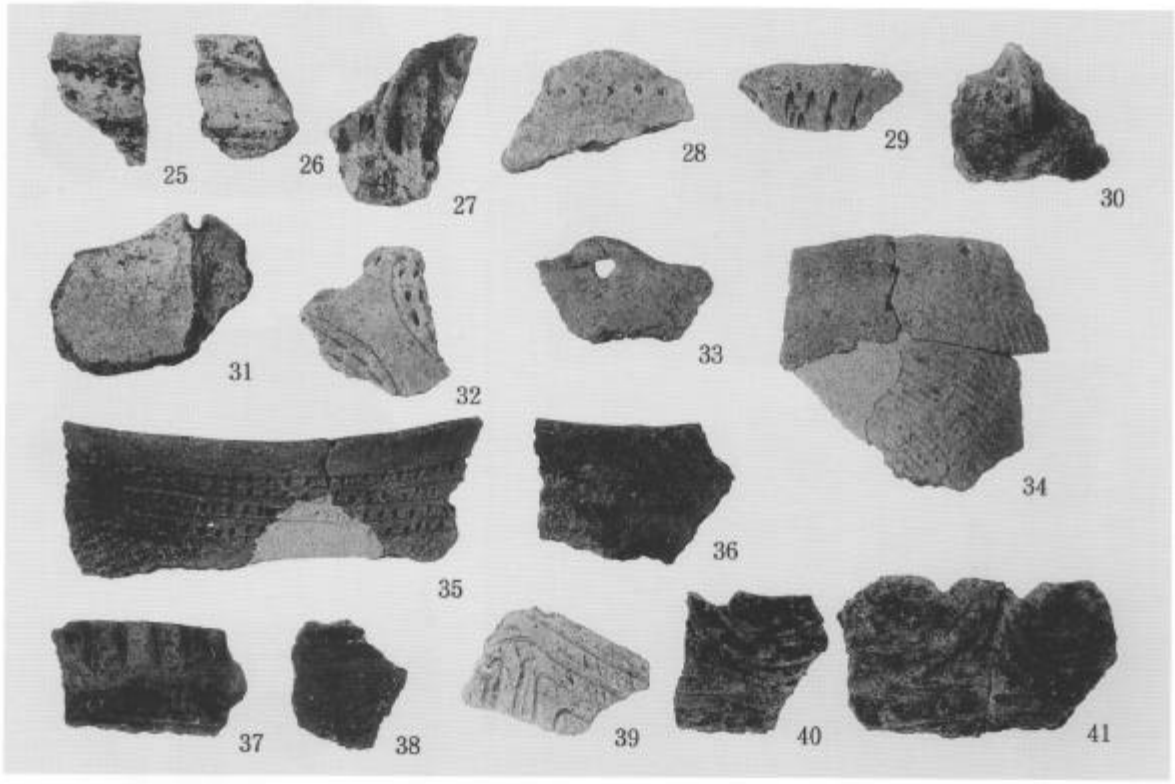
図版16

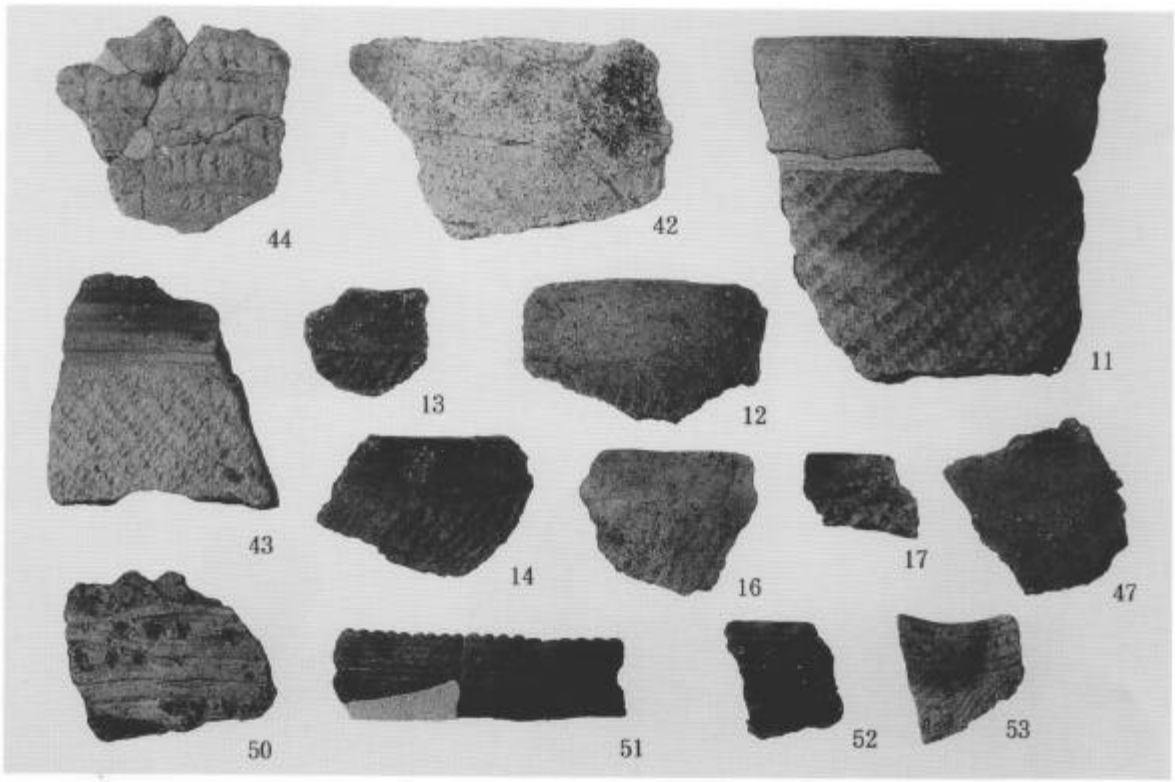
8

22

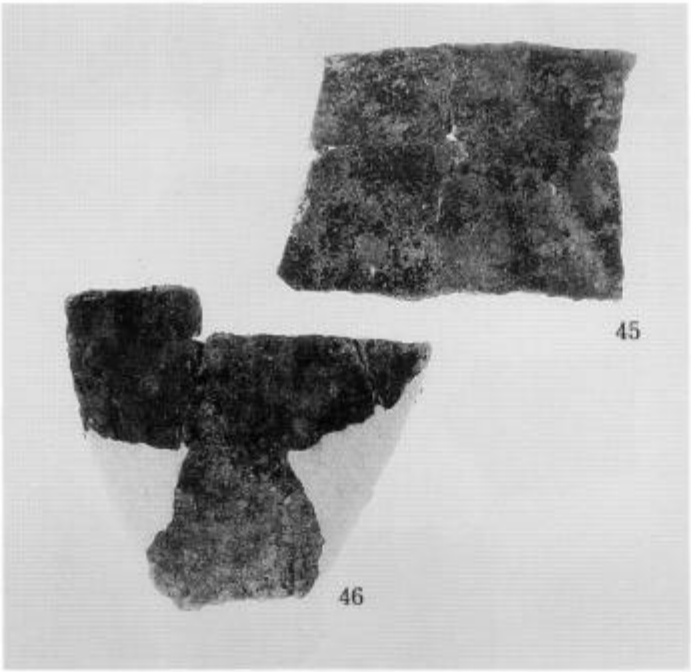


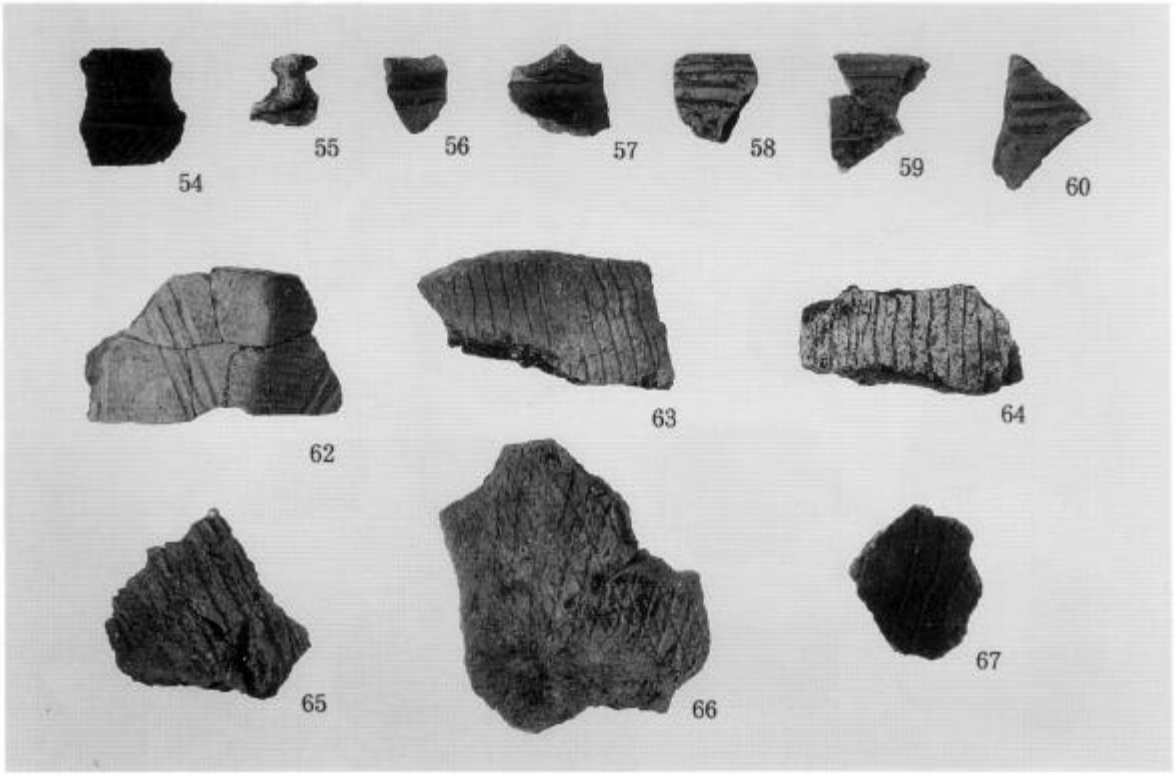
遺構外出土土器（2）


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

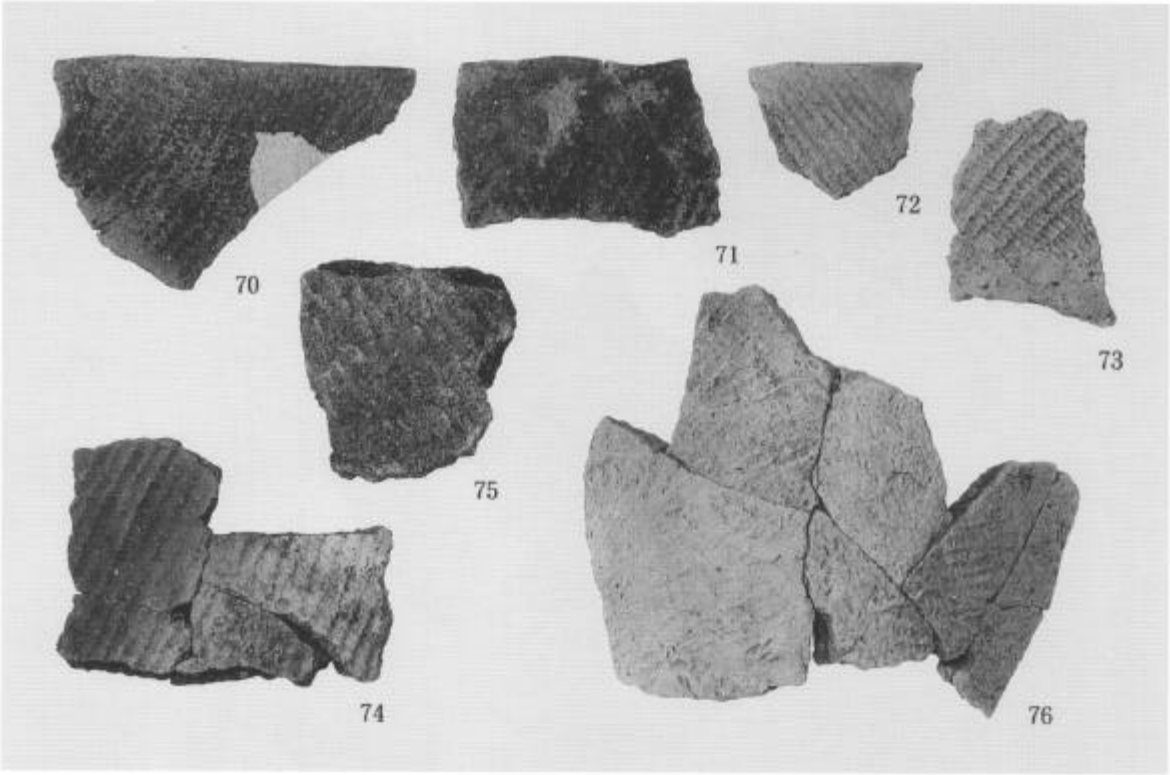

44
42
11
13
12
43
14
16
17
47
50
51
52
53

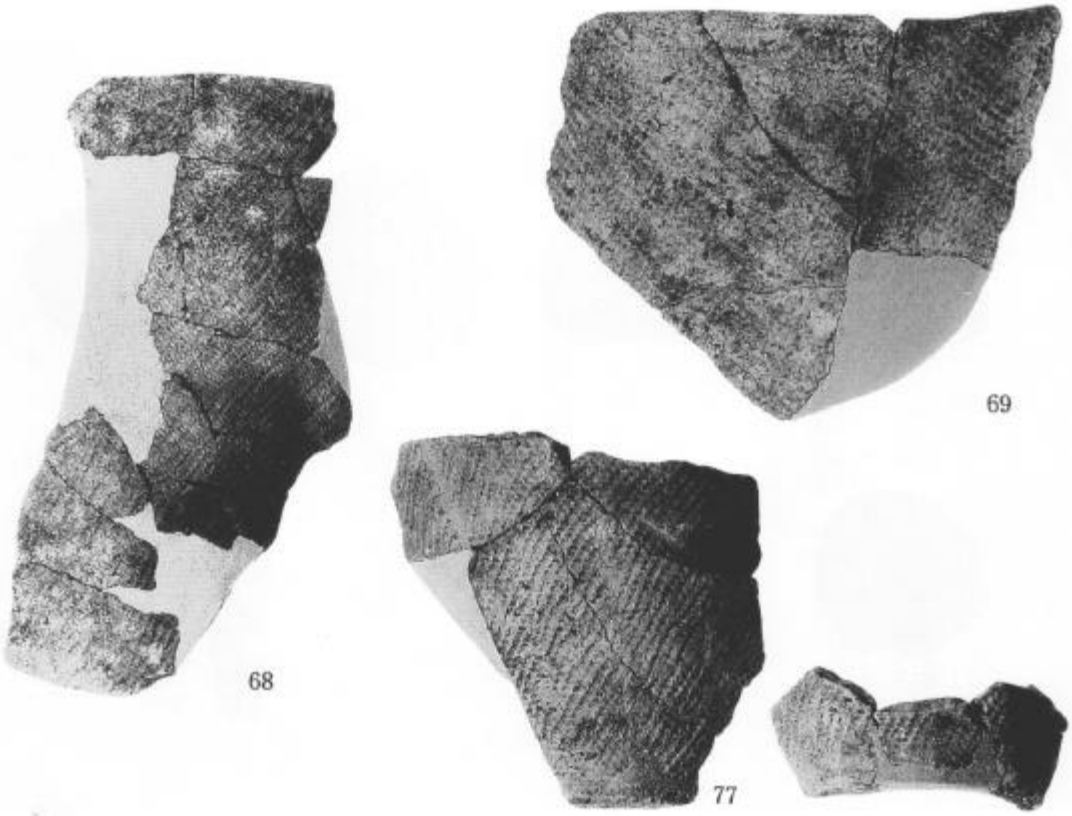
遺構外出土土器（3）





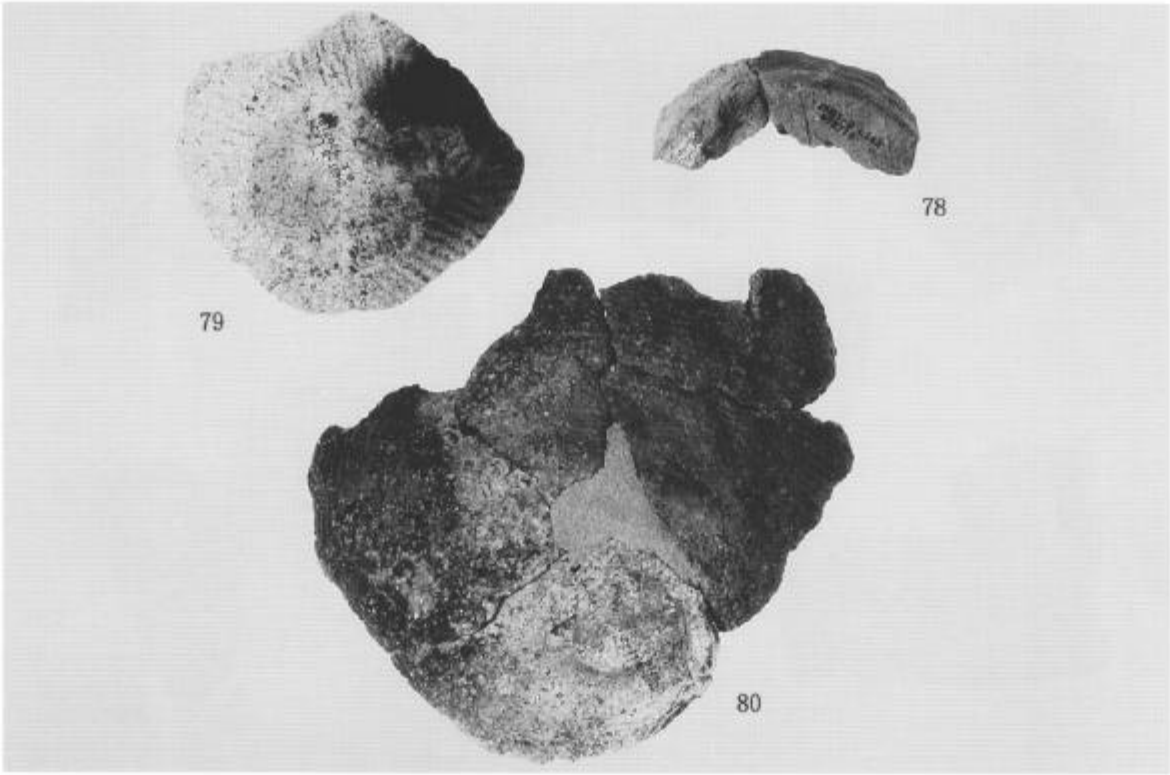
遺構外出土土器（4）



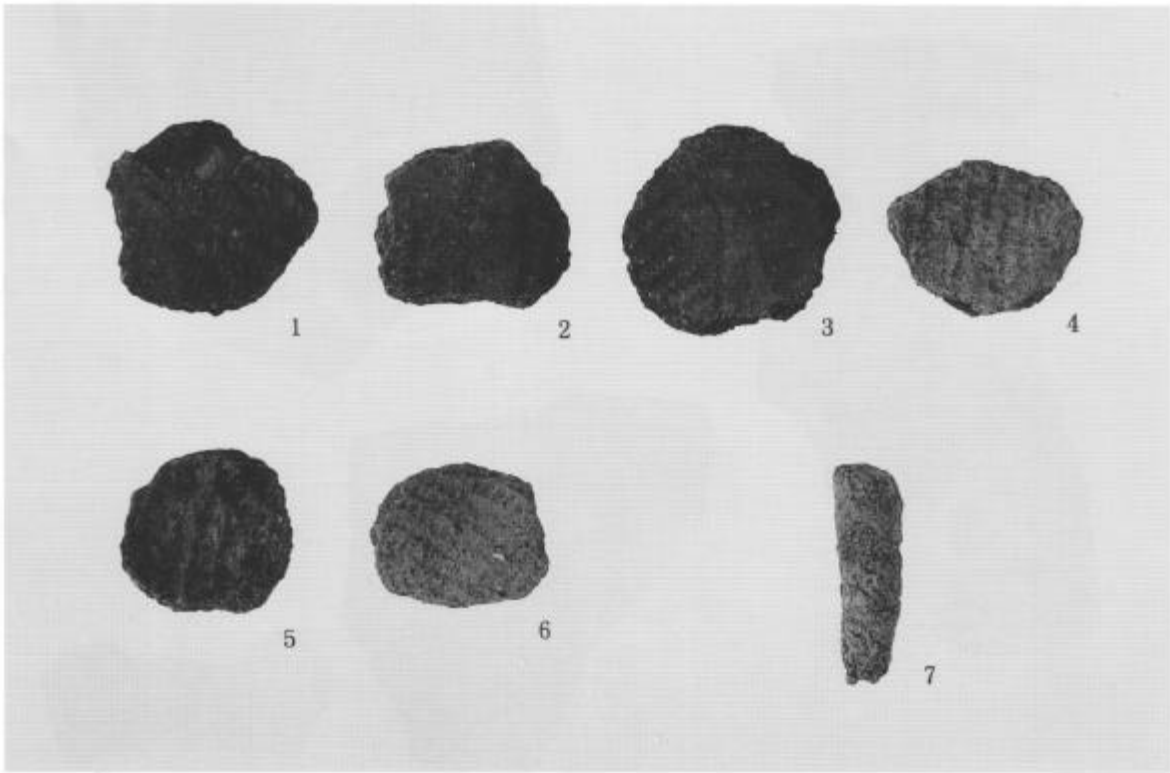


遺構外出土土器（5）

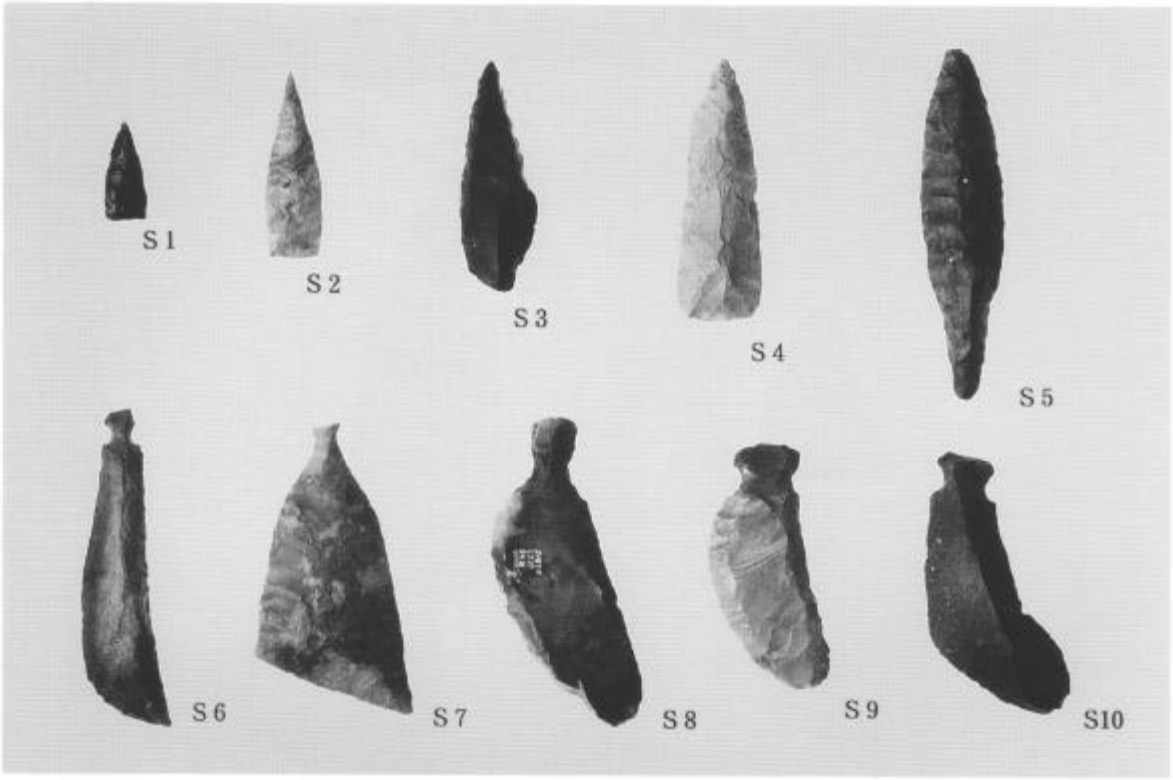
図版20

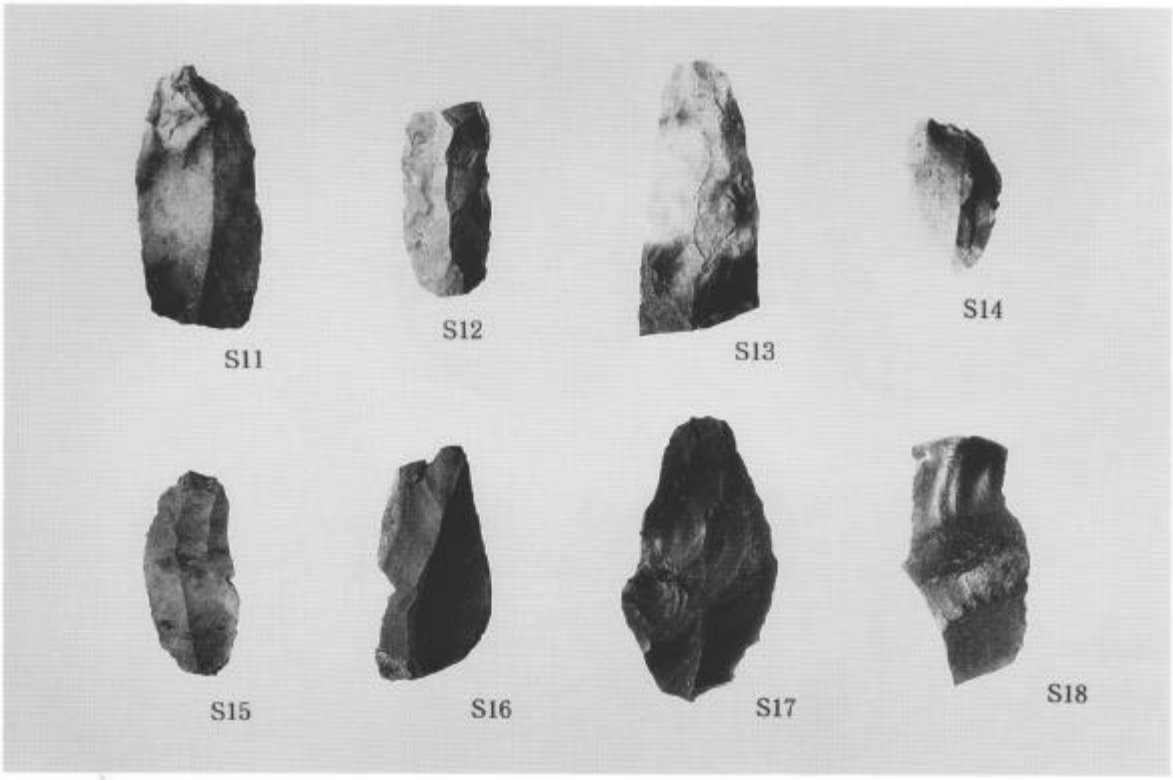


遺構外出土土器（6）

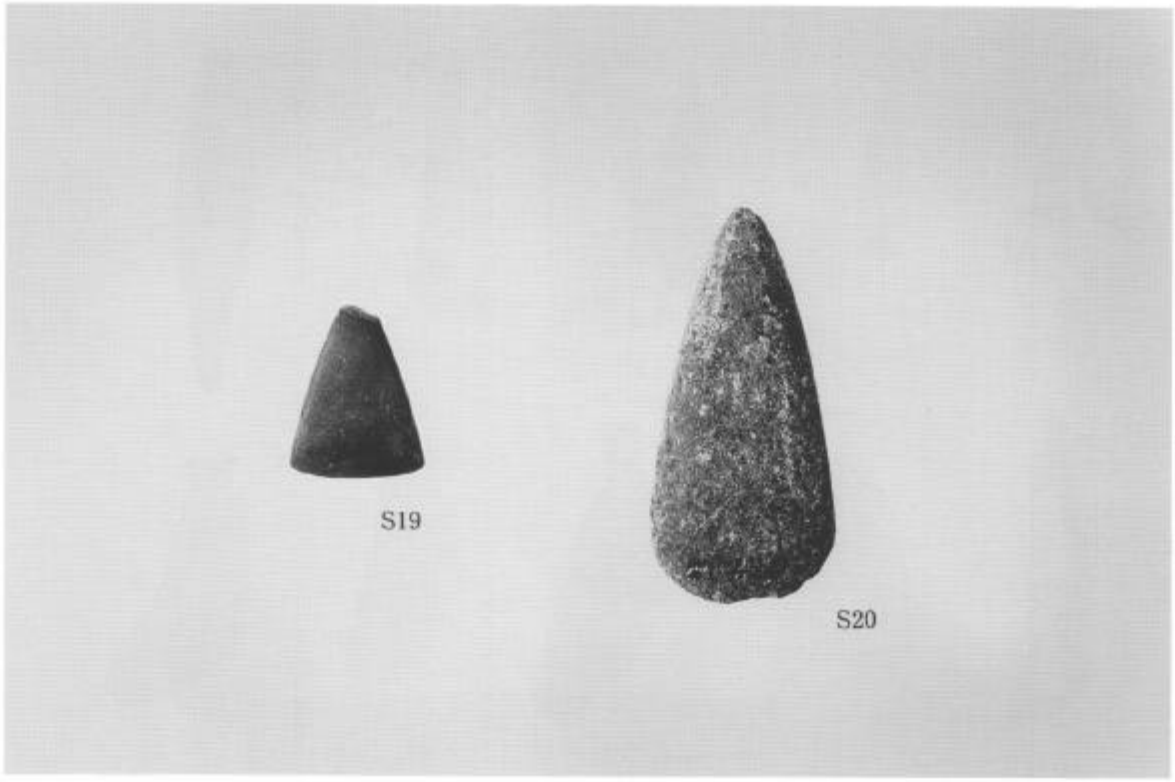


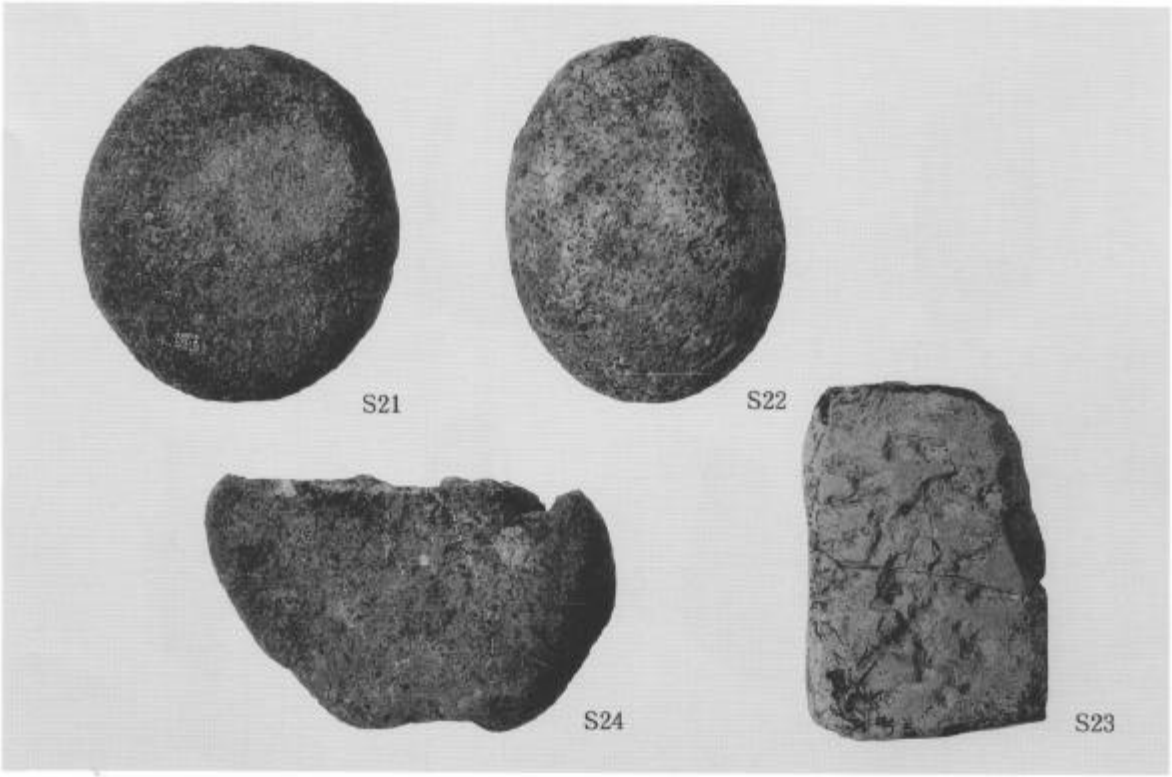
遺構外出土土製品





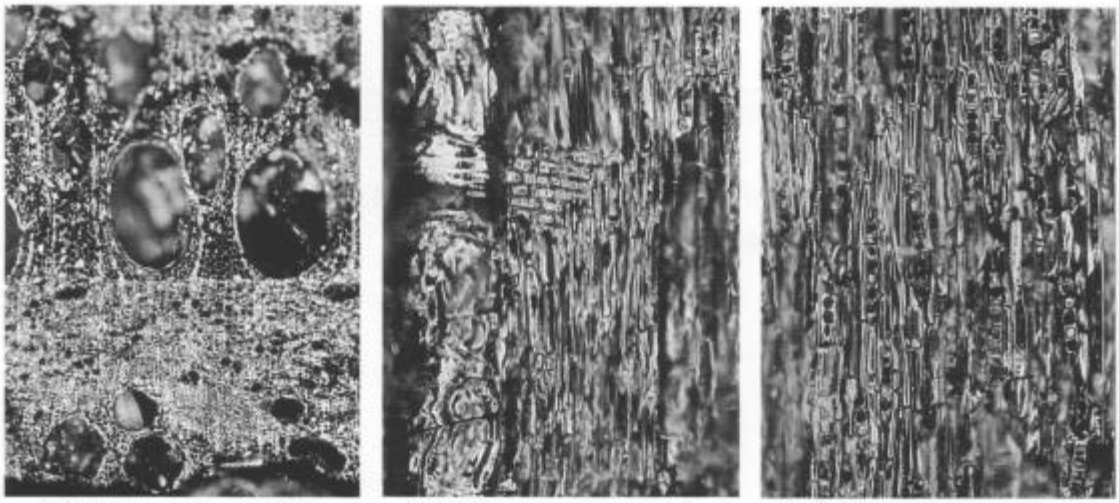
遺構外出土石器（1）





遺構外出土石器（2）

遺構外出土石器（3）



横断面 ―――― ：0.4㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

2HGT-D SI04 床面炭化物　クリ

炭化材断面顕微鏡写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひめ が たい　い せき
書　　名	姫ヶ岱Ｄ遺跡
副 書 名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第３００集
編著者名	吉川　孝・三嶋隆儀・村上義直
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦２０００年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひめがたいせき 姫ヶ岱D遺跡	あきたけんきたあきたぐんもりよし 秋田県北秋田郡森吉 まちねもりだあざひめがたい 町根森田字姫ヶ岱12 -31外	05323		40° 02′ 14″	140° 28′ 16″	19970526 ～ 19970822	2,100㎡	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
姫ヶ岱Ｄ遺跡	集落跡	縄文時代 中期～晩期	竪穴住居跡　8 土坑　6 配石遺構　1 土器埋設遺構　1 焼土遺構　2 性格不明遺構　2 柱穴様ピット　１８	縄文土器・石器	

あ　と　が　き

姫ヶ岱Ｄ遺跡の発掘調査は、私（吉川）と当時秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員だった村上義直文化財主事が主に担当した。現場に重機が入れず、表土除去をすべて人力でおこなった。涼しいうちに表土除去を終えるつもりではあったが、調査開始の遅れもあり、排土の量が膨大なせいもあって、発掘作業員のみなさんには炎天下での粗掘作業や排土移動・ベルトコンベアー移動などで御難儀をおかけした。

この地域では、かつての住民の方々が移転を完了し、水を飲むのも自動販売機を探すのも一苦労であったが、いっぽう、雄大で美しい自然のなかで、アットホームな方々と一緒に仕事ができたことは楽しい思い出となった。

図面整理の遅れから小西秀平非常勤職員に実測支援を受けたこともあった。また、遺物の整理作業の担当替えなどもあって、秋田県埋蔵文化財センター及び同秋田北分室の整理作業員のみなさんにも御苦労をおかけしたが、みなさんの御努力により、無事上梓にこぎつけることができた。

最後に、発掘作業員のみなさん、整理作業員のみなさんの御氏名を記して、お世話になったすべての人に感謝の意を表したい。

（吉川　孝）

発掘作業員のみなさん

織山　茂男　　織山　フミ　　斎藤　　弘　　佐藤　綾子　　佐藤　京子
佐藤チギエ　　佐藤ミヨ子　　庄司喜代治　　高田　米治　　土佐トクエ
播磨　勇治　　藤島喜美恵　　古倉養次郎　　古倉　ミチ　　松浦テツエ
松岡　教行　　三浦　古作　　三浦　雅文　　森川　ウメ　　森川トミノ
森川　リエ　　吉田　ワカ　　若松リツ子

秋田県埋蔵文化財センターの整理作業員のみなさん

越後谷晴美　　高橋まき子　　新田　　優　　藤田　悦子　　本間美紀子

秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室で整理に携わったみなさん

高橋　俊幸（秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室非常勤職員）
千葉　葉子　　館山　光子　　成田　典子　　成田　京子